

# 長 原 遺 跡

—大阪広域水道企業団東部水道事業所  
長吉立坑築造工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



## 序文

長原遺跡は、大阪市平野区に所在し、約 350 ヘクタールの面積を有する府内でも有数の大規模遺跡です。他方、遺跡の発見は意外に新しく、昭和 48 年に大阪市営地下鉄谷町線の延伸に伴い発見されました。その後、近畿自動車道の建設、市街化のための区画整理事業、大阪市営住宅の建設や建替えなどの大規模開発による緊急発掘調査が盛んに行われ、皮肉にもそうした事業での遺跡破壊と引き換えに、旧石器時代から現代に至る人々の生活が連綿と営まれた地域であることが分かってきました。

数多くの調査成果の中で特筆すべきものとしては、府内でも数少ない旧石器時代の遺跡で、7 万年前のナウマン象やオオツノ鹿等の足跡、3 万年前まで遡ると考えられている石器製作址等が発見されています。また、縄文時代終末段階の様相を示す土器が発見され、縄文土器最終の土器型式である「長原式」が設定されています。弥生時代では、中期から後期の府内では最大級の大型周溝墓が発見されています。古墳時代では、造営期間が前期末から後期前半で、中期を中心とする大小 200 基を超える古墳が発見され、長原古墳群と名付けられています。飛鳥・奈良時代、平安時代以降では、奈良時代に一時期難波にも都が置かれ、長原遺跡のあたりは都との地理的条件も重なり、飛鳥・奈良時代以降大規模な開発が進んだことによる集落や官衙等の遺構、或は、木簡等の重要遺物が発見されています。等々、調査が増える毎に、府内でも重要な遺跡となっています。

今回報告する調査地周辺における既往の調査では、旧石器時代や縄文時代の石器製作址、弥生時代や古墳時代の墳墓、古代の集落や耕作地跡等が重複して発見されていました。このように遺構の分布密度が高い場所での調査のためより慎重を期した調査を行うことが求められ、関係各位のご理解とご協力を得て、旧石器時代から中世に至る多くの成果を得ることが出来ました。

発掘調査の実施にあたっては、地元の皆様を始め、大阪市教育委員会、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所、株式会社森組長原事務所の方々の、ご理解とご協力を頂き深く感謝致します。

最後に、今後とも本府文化財保護行政により一層のご理解とご協力賜りますようにお願い致します。

平成 27 年 11 月

大阪府教育委員会事務局  
文化財保護課長 星住 哲二

## 例言

1. 本書は、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所の依頼により、長吉立坑築造工事（長吉松原バイパス送水管・大阪市）に伴う事前調査として実施した、大阪市平野区长吉川辺3丁目地内所在「長原遺跡」（13057・14002）の発掘調査報告書である。
2. 長原遺跡の発掘調査は、現地調査を平成25・26年度で実施し、遺物整理は平成26・27年度で実施した。なお、現地調査は平成25年度を文化財保護課調査第一グループ主査山田隆一が、平成26年度を同専門員松岡良憲が担当し、遺物整理は、平成26・27年度に松岡、同課調査管理グループ主査小浜 成・三木 弘・副主査藤田道子を担当者として実施した。
3. 発掘調査及び遺物整理、本報告書の作成に要した経費の全額を、大阪広域水道企業団事業部東部水道事業所が負担した。
4. 調査で出土した土器付着物の分析業務は、株式会社パレオラボに、鉄製品の保存処理業務は、JFEテクノリサーチ株式会社に、遺物写真撮影業務は、有限会社阿南写真工房に業務委託して実施した。
5. 本書の執筆・編集は松岡が行った。
6. 本報告書は、300部作成し、一部あたりの単価は626円である。

## 凡例

1. 本書で使用した座標値は、世界測地系座標値で表示している。標高は、東京湾平均海面値（T.P値）を用い、本来「T.P. ±○△m」と表記するが、報告書中では、マイナス表記が必要でないため、“T.P. ±”を省略して「○△m」と表記している。
2. 層序の表記について、基本層序は「第①～⑬層」とし、遺構内の堆積やその他部分的なものについては、「1～20層」と表記している。
3. 土層の色調表記について、『新版標準土色帳』編・著者 小山正忠・竹原秀雄、監修 農林水産省農林水産技術会、色票監修 財団法人日本色彩研究所に準拠している。



写真1 2区6面検出作業

## 目次

序文

例言

凡例

第1章 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2章 地理的・歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第3章 調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第1節 層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第2節 7面（旧石器時代～縄文時代早期）・・・・・・・・・・・・ 13

（1）遺構（2）遺物

第3節 6面（縄文時代中期～縄文時代後期）・・・・・・・・・・・・ 14

（1）遺構（2）遺物

第4節 5面（縄文時代晩期～弥生時代前期前半）・・・・・・・・・・ 16

（1）遺構（2）遺物

第5節 4面（弥生時代前期後半～弥生時代中期）・・・・・・・・・・ 18

（1）遺構（2）遺物

第6節 3面（弥生時代後期～古墳時代前期）・・・・・・・・・・・・ 21

（1）遺構（2）遺物

第7節 2面（古墳時代中期～中世）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

（1）遺構（2）遺物

第8節 1面（中世末～近世）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

（1）遺構（2）遺物

第9節 須恵器瓶子付着物の赤外分光分析・・・・・・・・・・・・・・ 34

（1）はじめに（2）試料と方法（3）結果及び考察（4）終わりに

第4章 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

（1）旧石器・縄文時代～弥生時代（3～7面）

（2）古墳時代～古代（2面）

（3）中世～近世（1面）

図版

報告書抄録・奥付

## 挿図目次

図 1	長原遺跡の地区割と周辺遺跡	1
図 2	長原遺跡周辺の地形分類図	2
図 3	長原遺跡調査位置及び調査箇所図	3
図 4	長原遺跡東南地区の後期旧石器時代後半の古地理図	4
図 5	長原遺跡東南地区の縄文時代晩期～弥生時代中期初頭の古地理図	5
図 6	長原遺跡東北地区の弥生時代後期後半の大型方形周溝墓	5
図 7	長原遺跡の古墳時代中～後期前葉の地形復元図	6
図 8	今回の基本層序及び周辺調査での層序	7
図 9	長原遺跡の標準層序	8
図 10	立坑本体部東西断面図	10
図 11	立坑本体部南北断面図	11
図 12	7面遺構配置図	13
図 13	6面遺構配置図	14
図 14	溝 6-002・003 土層断面図	15
図 15	5面遺構配置図	16
図 16	5面検出遺構土層断面図	17
図 17	4面遺構配置図	19
図 18	4面遺構土層断面図	20
図 19	3面遺構配置図	22
図 20	溝 3-004 囲郭内出土遺物	23
図 21	2面遺構配置図	24
図 22	溝 2-002・220(小型方墳)断面図	25
図 23	溝 2-002・220(小型方墳)平面図	25
図 24	溝 2-001、土坑 3-212・213・216・217 検出状況	25
図 25	溝 2-001 土層断面図	25
図 26	溝 2-003、022 検出状況	26
図 27	溝 2-095、098、131、132、144、145、149～152 検出状況	27
図 28	2面遺構土層断面図	28
図 29	2面出土遺物実測図	29
図 30	1面遺構配置図	31
図 31	1面(5区)遺構配置図	32
図 32	土坑 1-001、011、012 断面土層図	32
図 33	付着物が認められる須恵器	34
図 34	オリーブ黒色付着物および基本試料と赤外線	

	分光分析スペクトル図	35・36
図 35	旧石器・縄紋～弥生時代 調査地周辺の主要検出遺構	37
図 36	古墳～古代 調査地周辺の主要検出遺構	38
図 37	中世～近世 調査地周辺の主要検出遺構	39

## 表目次

表 1	赤外分光分析を行った試料とその詳細	34
表 2	基本試料の赤外吸収位置とその強度	34

## 写真目次

写真 1	2区6面検出作業	ii
写真 2	6面遺構の土層断面	15
写真 3	土坑 5-004・010 及び南北アゼ土層断面	17
写真 4	溝 3-001 土層断面(西辺南北方向部)	21
写真 5	囲郭内再確認状況(ブロック土除去)	22

## 図版目次

図版 1	7面・6面遺構(1)
図版 2	6面遺構(2)
図版 3	5面遺構
図版 4	4面遺構(1)
図版 5	4面遺構(2)
図版 6	3面遺構
図版 7	2面遺構(1)
図版 8	2面遺構(2)
図版 9	2面遺構(3)
図版 10	2面遺構(4)
図版 11	2面遺構(5)
図版 12	1面遺構(1)
図版 13	1面遺構(2)
図版 14	遺物(1)
図版 15	遺物(2)
図版 16	遺物(3)

# 第1章 はじめに

長原遺跡は、大阪市平野区の南東部に位置し、南北約2km、東西約1.5～2km、面積約350haの拡がりを有する旧石器時代から近世に至る複合遺跡である。昭和48年（1973年）に地下鉄谷町線延伸事業に伴う試掘で遺跡が確認され、昭和49年（1974年）に長原遺跡調査会により実施された調査が、長原遺跡の本格的な発掘調査の開始である。以後、遺跡が大阪市域にあることから、調査の大部分を大阪市教育委員会・財団法人大阪市文化財協会（平成24年度より公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所）（以下、市教委・市文協）が担当して実施している。

市教委・市文協は遺跡範囲が広大であることから便宜的に、西南・南・西・中央・北・東南・東・東北の8地区に分割している（図1）。今回報告する場所は、東南地区にあたる場所である。長原遺跡東南地区は、南に羽曳野丘陵と現（新）大和川、北に河内平野があり、羽曳野丘陵から北西に向かって延びる瓜破台地の台地北東縁辺部と西除川の氾濫原となる低地部や自然堤防に該当する地域であり、

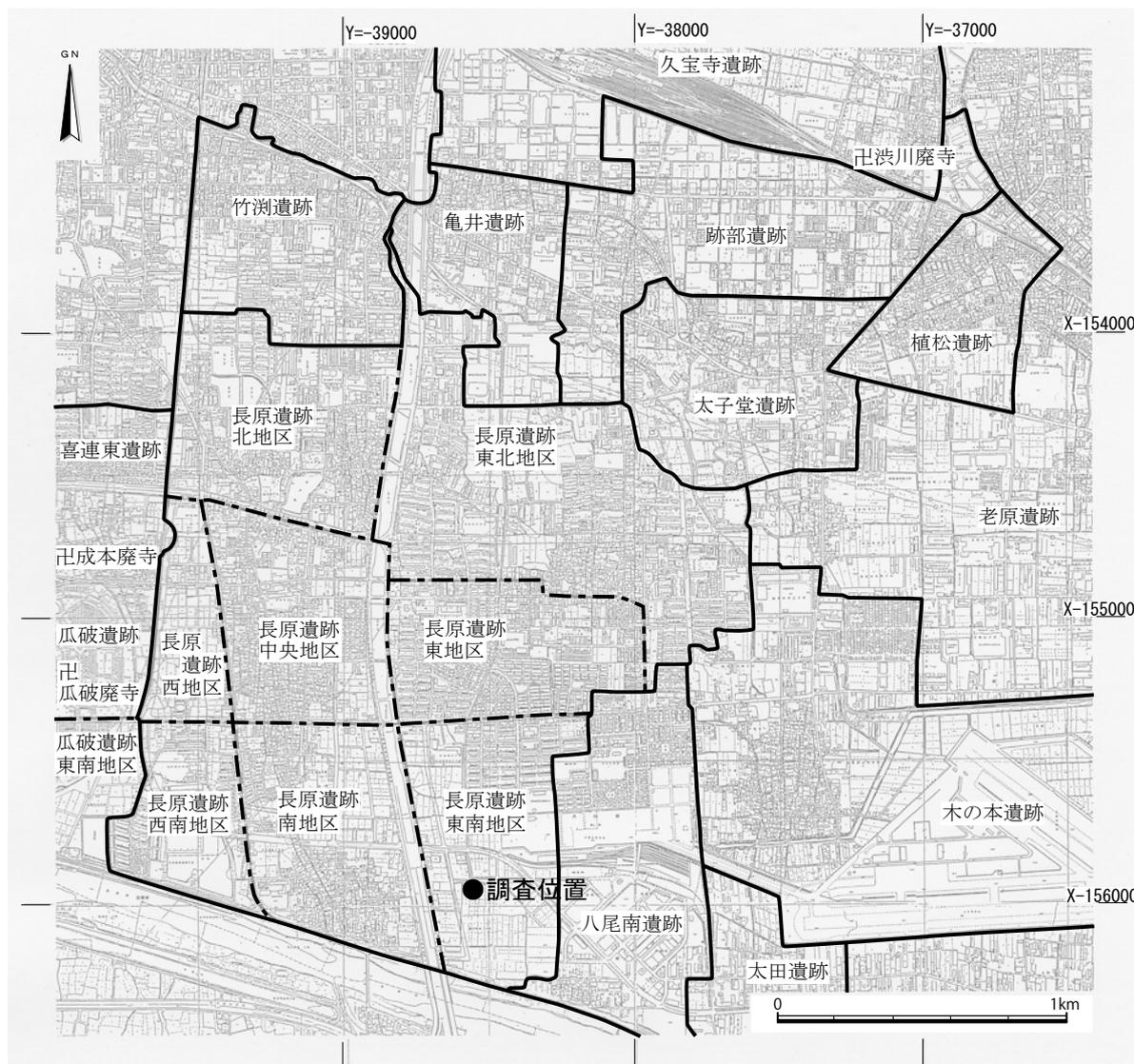


図1 長原遺跡の地区割と周辺遺跡 1/25000（注1より転載）

北側や東側は、洪積段丘下位を挟んで沖積平野部へとつながる微地形を呈する（図2）。市教委・市文協は発掘調査を実施するにあたり、昭和55年（1980年）から長原遺跡の標準層序を作成し、調査事例の増加に伴い随時検討が加えられている。市教委・市文協の調査とは別に昭和51年（1976年）から近畿自動車の建設に伴う長原遺跡の発掘調査を大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター（平成23年度より公益財団法人大阪文化財センター）（以下、府教委・大文セ）が南・中央・東北の3地区で実施している。この様な大規模調査を含めて平成23年度までの調査件数は累計約700件に及んでいる。今回の調査地周辺についてその成果の主要なものを概観する。まず、最古のものとしては、長吉川辺3丁目でA T火山灰層の下層から発見されたことからB.P. 3万年頃の後期旧石器時代に遡る石器密集部が報告されている。この付近で確認され、「古川辺川」と名付けられた河川跡周辺では他にも旧石器時代から縄文時代早期の石器密集部が数多く発見されている。また、長吉六反2丁目では、縄文時代早期の住居址と共に土器等の遺物が発見されている。長吉川辺3丁目で縄文時代晩期の溝等の遺構・遺物が発見されている。弥生時代になると調査地から北に1km程の長吉長原東1・2丁目でも中期の住居址や方形周溝墓等の遺構・遺物が発見されている。長吉川辺3丁目でも中期後半の大型方形周溝墓等の遺構・遺物が発見されている。調査地から北に1.3km程の長吉出戸8丁目で後期前半の大型方形周溝墓等の遺構・遺物が発見されている。古墳時代になると前期では、長吉長原東1丁目でも墓域や居住域が確認され、中期では、長原東1・2丁目から長吉出戸8丁目にかけて居住域が確認されている。後期では前述の前・中期の遺構はあまり継続せず、調査地周辺の長吉川辺3丁目から長吉長原東3丁目のやや標高の高い地点で集落域や生産域が確認されている。飛鳥・奈良時代から平安時代になると、川辺川の水利を目的とした水路の整備が調査地周辺でもさらに進むようである。

この様に既往の調査が数多く実施されていることから、長原遺跡は府内の遺跡の中でも地点ごとの埋蔵文化財の遺存状況が、比較的推察可能な遺跡である。今回の調査は、立坑本体部（1～4区）、配

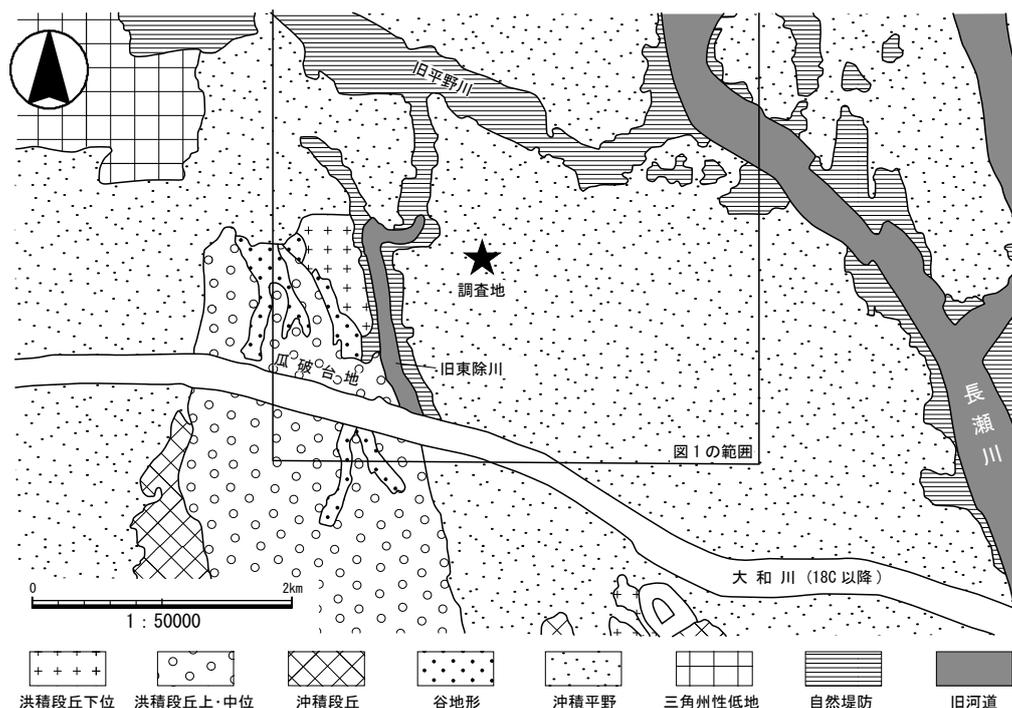


図2 長原遺跡周辺の地形分類図 1/50000 (注2より一部修正・加筆)

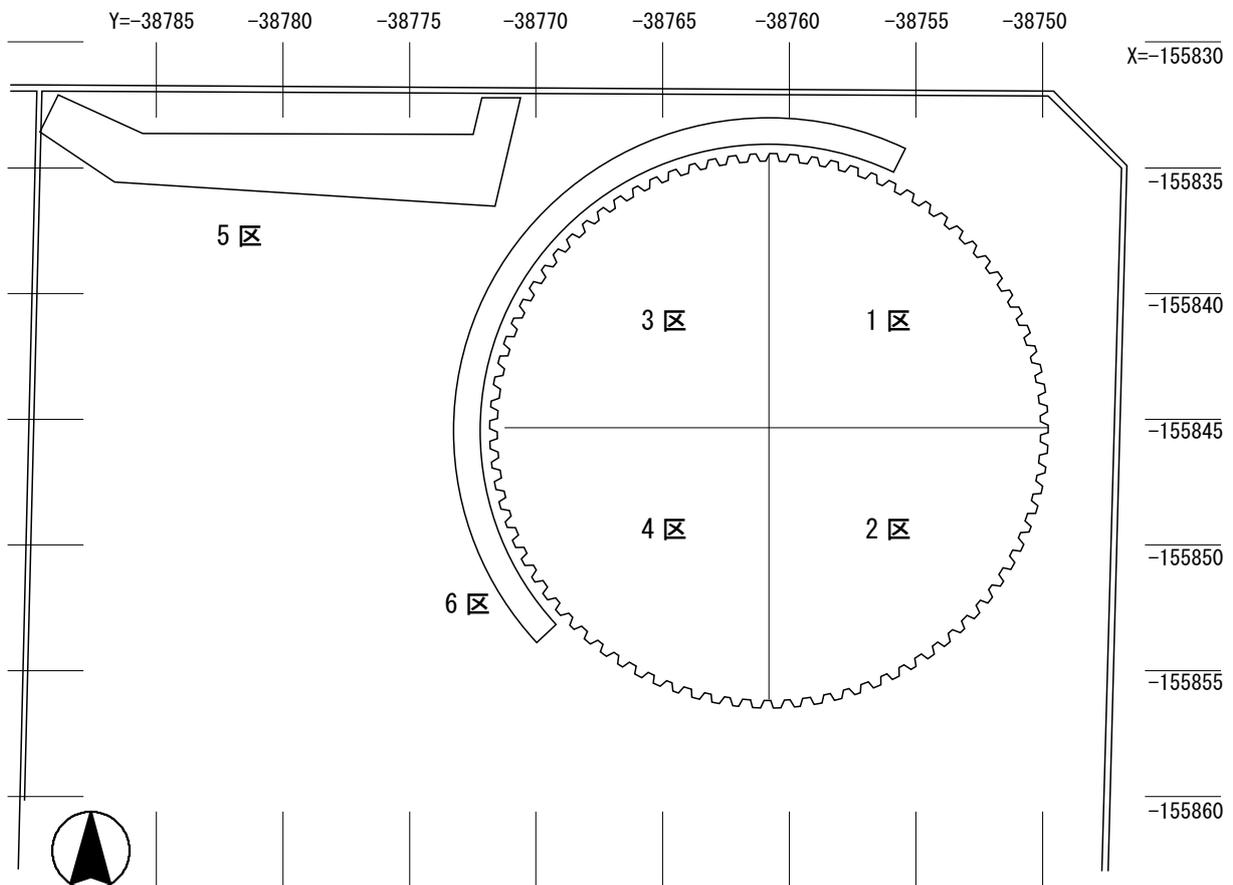


図3 長原遺跡調査位置及び調査箇所図 1/300

管部（5区）、土壌改良部（6区）の三箇所について実施した（図3）。各地区の調査は、工事内容で記録保存の対象範囲が異なっている。立坑本体部は、工事による掘削が、現況道路敷から約45.7m掘り下げられるため、周辺の調査で旧石器時代の遺構・遺物が確認されているNG13層まで、配管部は、配管に伴う掘削が及ぶNG3層まで、土壌改良は、現況道路敷から約4.9m下がったところから約47.7mまでの間で実施され、薬剤注入による埋蔵文化財への影響は無いが、改良工事の実施方法として改良範囲を溝状に掘削することから、掘削が及ぶNG7層までとして実施した。

## 第2章 地理的・歴史的環境

まず長原遺跡の地理的環境を見ることにする。大阪府域の中央部に淀川に向かって形成された南北約20km、東西北約10kmの河内平野が、東は生駒山系、南は羽曳野台地（丘陵）、西は上町台地と三方を囲まれて拓がっている。河内平野は、これら山系、丘陵、台地に囲まれた谷状低地部に、大和川・石川水系、西除川や東除川等の中・小水系により形成された沖積平野である。長原遺跡はこの河内平野の南端部に位置し、南北約2.2km、東西約1.8kmの広い遺跡範囲を有している。北と東に平野部、南と西に羽曳野丘陵の一部である瓜破台地の両地形をあわせ持つ地域である。また、河内平野の縁辺部は上位、中位、低位の各洪積段丘が形成されており、比較的明瞭に段丘形状を留めている事が知られている。長原遺跡の丘陵部は、中位段丘上に立地し、低位段丘部は、沖積層で埋没していると考えている。長原遺跡の立地を水系で示すと羽曳野丘陵を流れてきた東除川水系に属する。長原遺跡はその発見以来非常に多くの発掘調査が実施されており、前述のようなキャンパスに古地形の復元を描くことの出来る遺跡である。（注1）



古地形の復元は、すでに発表されている成果があるので、ここでの記述は省くこととし、次に東除川・川辺川水系に位置する長原遺跡の歴史的環境について、今回の報告に関わるところの概略を述べる。まず、旧石器時代であるが、大阪府内の分布を見ると①北摂の郡家今城遺跡に代表される千里丘陵、富田台地付近と、②山畑遺跡に代表される生駒西麓付近と、③大園遺跡に代表される泉北丘陵と、④長原遺跡のある国府遺跡に代表される羽曳野丘陵から上町台地付近までの4地域である。

この4地域の中でも④は旧石器時代の遺跡数が多く、その中でも国府遺跡や翠鳥園遺跡に代表される羽曳野丘陵東側縁

図4 長原遺跡東南地区の後期旧石器時代後半の古地形図（注3）

辺部と、長原遺跡に代表される羽曳野丘陵西側縁辺部での遺跡分布密度が特に濃厚である（図4）。この地域の更に南東約10kmで、石材であるサヌカイト原産地の二上山に至る位置的な優位性によると思われる。縄文時代においても遺跡分布は、①～④の地域で濃厚にみられ、5番目の地域として、河岸段丘上に立地する仏並遺跡や三軒家遺跡に代表される泉州地域が加わる。縄文時代、④の地域でも、長原遺跡周辺は遺跡分布上では、あまり濃い地域とは云えない状況である（図5）。弥生時代になると河内平野部への生活域の拡大が勢いを増し、低位段丘面や自然堤防上が集落域や墓域となり、またその周辺の沖積平野部が、水田などの耕作地として開発されたようである。長原遺跡



図5 長原遺跡東南地区の縄文時代晩期～弥生時代中期初頭の古地理図（注3）

範囲内の北地区から東北地区にかけて、以前は城山遺跡としていた地域や長原遺跡の東に位置する木の本遺跡、北の亀井遺跡、西の瓜破遺跡など、長原遺跡周辺は、比較的大規模集落が集まった地域と言える。また、加美遺跡（Y-1・2号墓）や長原遺跡（SX-801・802、長吉出戸8丁目大型周溝墓）で確認されている中期から後期にかけての大型方形周溝墓は、その大きさにおいて府内他地域では発見例が無く、注目されるものである（図6）。古墳時代になると、集落域や墓域が更に中位段丘面にその開発域が及んできているようである。ただし、自然堤防上に営まれた集落が弥生時代から引き続き

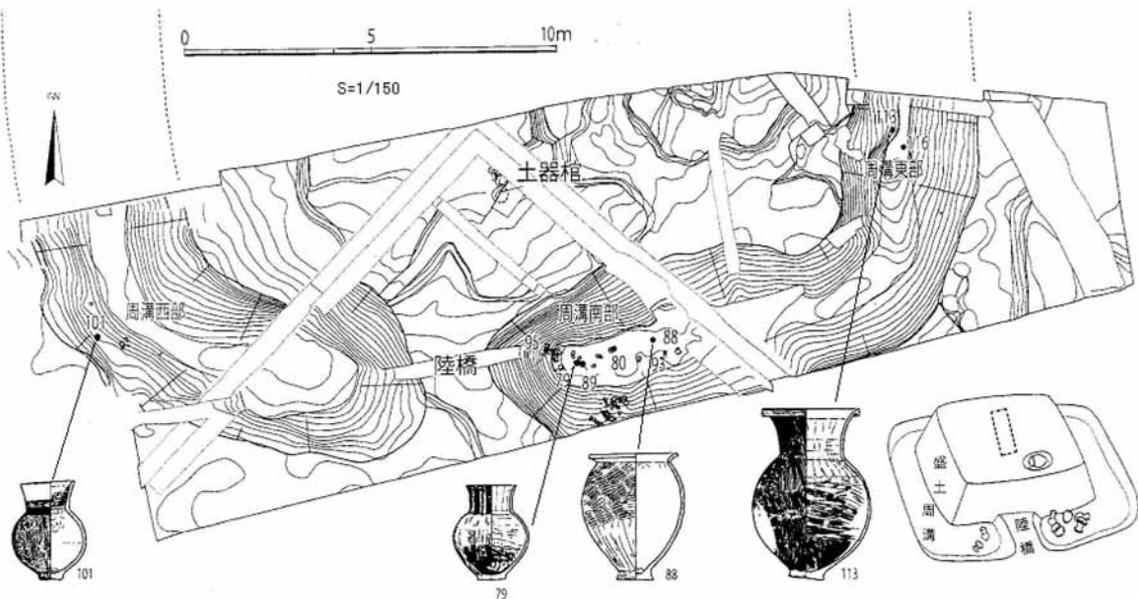


図6 長原遺跡東北地区の弥生時代後期前半の大型方形周溝墓（注4より作成）

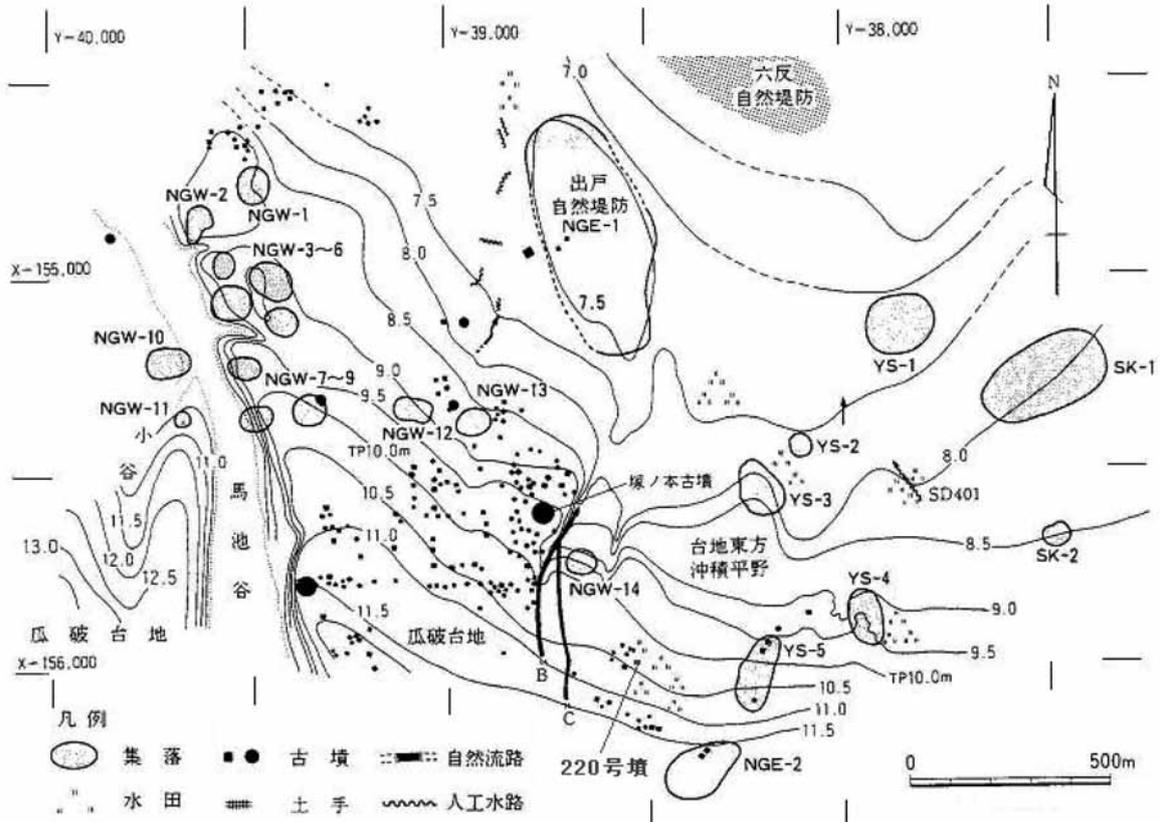


図7 長原遺跡の古墳時代中～後期前葉の地形復元図（注5より作成）

規模的に優位なものが顕著のようである。前述の長原出戸8丁目付近は、大阪市の調査成果から「出戸自然堤防」と名付けられており、長原遺跡の主に東・西・北で、この出戸自然堤防の集落を取り囲むように数百mから1kmの間隔で集落跡が発見されている。また、この自然堤防の主に南側では、最大の塚ノ本古墳をはじめ大小220基以上の古墳が発見されている（図7）。飛鳥・奈良時代になると中位段丘面上では、土地利用の最大の障害であった水の問題を、水路の建設で解決しようとしていたことが伺える。調査地周辺での、川辺水路1・2などの発見がそれである。こうした水路の整備により、常に水害の危険に曝されながら営まれていた集落や耕作地の展開範囲が拡大したようである。

（注1）長原遺跡発掘調査報告Ⅶ 1999.10 大阪市文化財協会より転載

（注2）長原遺跡発掘調査報告書 2002.3 大阪市文化財協会より、一部修正・加筆

（注3）『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ』「第Ⅴ章第6節まとめ」P414・415 1995年3月（財）大阪市文化財協会

（注4）田中 裕子 新発見！平野の考古学『長原遺跡の最新発掘成果報告会』レジュメ

「報告2 弥生時代の墓・古墳時代の墓 一方形週溝墓と長原217号墳」1995年4月29日

（注5）『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』「第Ⅳ章第1節長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」1999年3月（財）大阪市文化財協会

高橋 工 『古代狭山池と台地開発の始まり 平成23年度特別展』「長原遺跡における地形と土地利用の変遷」2011年（大阪府立狭山池博物館）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 層序

今回の調査地は、瓜破台地の北東縁辺部に位置しており、沖積層及び低位段丘層の確認等で用いた層序は、市教委・市文協による調査が周辺で数多く実施されていることから、長原遺跡の標準層序（図9）に準拠し、調査区北に近接するNG91 - 1次調査、調査区西に近接するNG92 - 5次調査を参考にして、今回の調査13057・14002における基本層序として図8において整理し、東西及び南北方向の断面図は、図10、図11で報告している。

#### 盛土・現耕作土

今回の調査地は、立坑築造工事以前は耕作地として利用されていたが、周辺は盛土をして道路や建築物が建設されている。調査及び工事の準備工を実施するにあたり、まず盛土が行われた。盛土には大阪広域水道企業団が大阪市内で実施している同様の工事残土が運び込まれ、盛土が軟弱にならないように事前に一部で現耕作土を除去していた。除去された現耕作土の厚さは、0.1～0.26 mである。現耕作土除去後の盛土は周辺道路に高さを合わせるため厚さは0.9 mである。

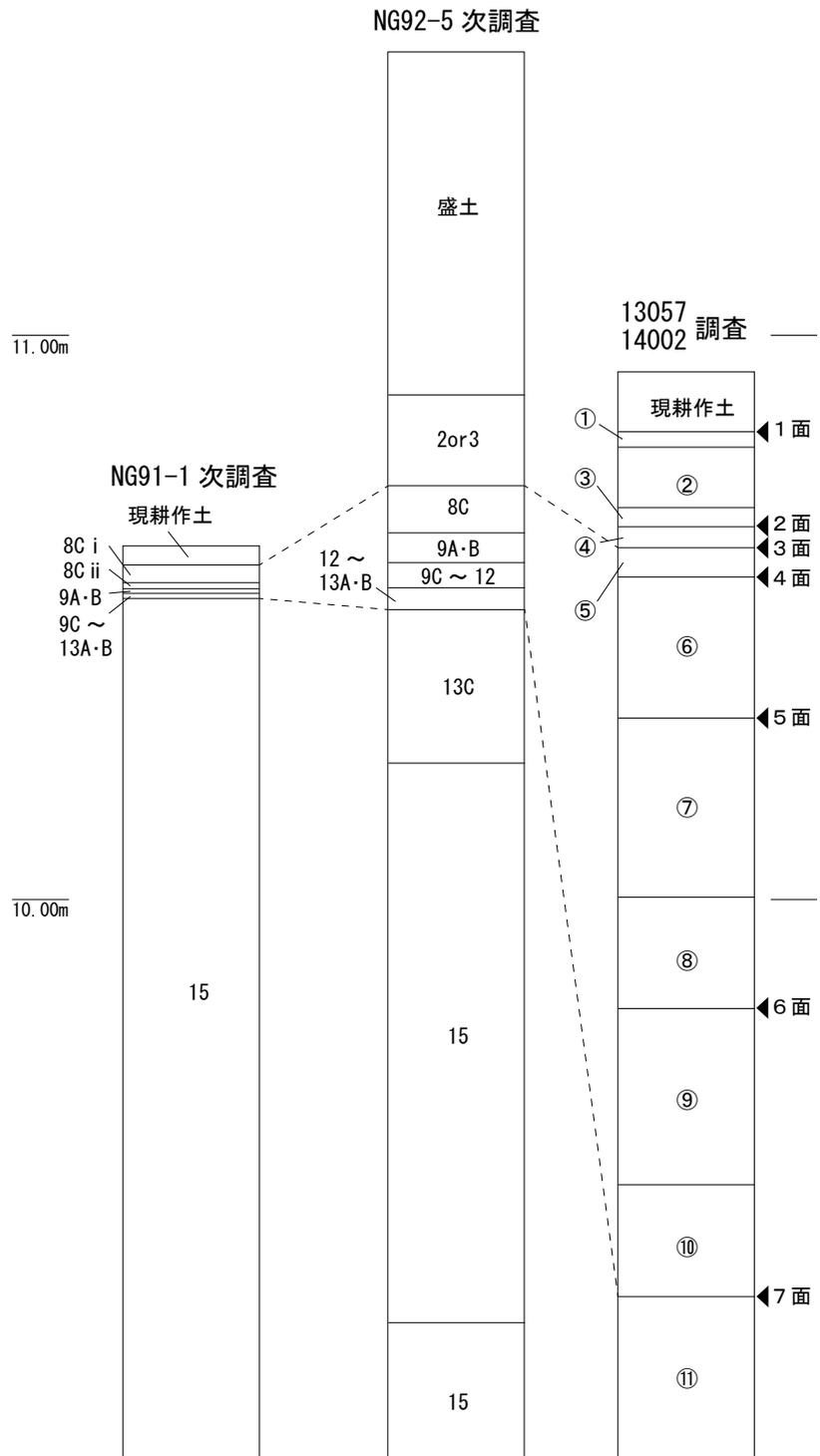


図8 今回の基本層序及び周辺調査での層序（注1より作図）

第3章 調査の成果

層序	層序 標全図	岩相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C.14yB.P	時代	
最上部	NG0層	現代盛土	—				近代・現代	
	NG1層	現代作土	15-25				近世	
	NG2層	含細礫灰褐色～黄褐色シルト質砂	6-24	↓小遺群・灰濁 ↓小遺群・灰濁・飛鳥	青花・唐津・瀬戸美濃・備前など 輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器(Ⅳ-1～5)	(400)	室町	
	NG3層	含細礫灰褐色～灰色粘土質シルト	12-20		瓦器(Ⅳ-1～Ⅳ-3)		鎌倉	
	NG4A層	含細礫黄灰色中粒砂	8-15		瓦器(Ⅱ-Ⅲ)		(800)	平安
	NG4B層	暗灰褐色 黄褐色シルト 含細礫黄灰色中粒砂 灰色砂質シルト	av.20 av.5 av.15		瓦器 黒色土器 陶磁器 須恵器 土師器 水田面 ↓小遺群・灰濁 水田面 ↓小遺群・灰濁			
	NG4層	10～45cm 明黄褐色砂質シルト にふい黄褐色シルト質砂	av.20 av.20		▽竪立柱遺物 水田面		平安Ⅰ～Ⅲ期	
	NG5A層	灰色砂礫・シルト質細粒砂層を挟む	10-80		一鉄跡		平城宮Ⅴ～Ⅵ	
	NG5B層	青灰色細粒～極細粒砂	2-8		一水田面		平城宮Ⅶ	
	NG6A層	暗青灰色砂・粘土質シルト	≦20	タニシ			(1300)	奈良
	NG6B層	暗緑灰色中粒～細粒砂 粘土質シルト層と極細粒砂層の互層	≦5 av.10		一ヒトと鉄類の足跡 一水田面			
	NG6層	含砂・暗黒褐色～暗灰色シルト質粘土 灰色粘土・シルト・礫質粗粒砂	≦15 ≦5	タニシ	一水田面 一水田面		飛鳥Ⅲ～Ⅳ 飛鳥Ⅴ	
NG7A層	含砂灰色粘土 含砂黒褐色シルト質粘土	av.10 av.15	一乾痕	一水田面 ↓竪立柱遺物		飛鳥Ⅰ・TK209		
上部	NG7B層	明黄褐色砂礫～暗オリーブ灰色粘土質シルト 黒褐色砂・礫質粘土・黒色シルト 褐色極細粒砂・粘土質シルト互層 暗褐色粘土質シルト	≦250 ≦35 ≦170 ≦5		一土手 長原古墳群	TK10 地輪Ⅴ期・TK23・47～MT15 地輪Ⅱ期 TK216	古墳後期 古墳中期 古墳前期	
	NG8A層	青灰～黄灰色砂・礫～粘土	≦40		一方形形溝墓・竪穴住居		弥生後期	
	NG8B層	暗褐色砂質シルト	av.10		一方形形溝墓・竪穴住居		弥生中期	
	NG8層	にふい黄褐色粗粒砂～中粒砂 灰色シルト質粘土 黄褐色シルト質粘土	av.25 av.10 ≦15	一乾痕	一水田面・漆・ヒトの足跡 一自然道路の礎		本宮形石墓 石器製作址・畿内第Ⅱ様式・石斧	
	NG9A層	黒褐色砂・シルト質粘土	3-15				畿内第Ⅰ様式・長原式・石鏝	
	NG9B層	灰オリーブ～黒褐色砂礫 暗灰黄色シルト質粘土・植物片多含 灰オリーブ色シルト質粘土	≦90 10-40 3-14		土偶 石鏝		(2600)	縄文晩期
	NG9C層	暗灰オリーブ色シルト質粘土・植物片多含 灰オリーブ色シルト・砂 黒褐色～暗褐色含シルト質粘土 灰色シルト質粘土・砂礫	8-50 10-35 2-8 2-10	一乾痕	▽石器製作址 ▽土器遺構 ▽竪穴住居・貯蔵穴	一遺習Ⅴ式 凹釜式石鏝		
	NG10層	オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土 暗灰色シルト～粘土質粗粒砂	7-25 av.5	一火山灰層(BB7?)			縄文	
	NG11層	緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト 灰色シルト質粘土	≦80 ≦16	一地震			北白川上層Ⅱ～Ⅲ式	
	NG12A層	黄褐色黒褐色礫質粘土～シルト オリーブ黒色シルト質砂・礫混り	≦15 ≦20	一乾痕			黒木Ⅱ式・北白川C式・石鏝	
	NG12B層	暗褐色細粒砂質シルト 暗黄灰色シルト～灰色礫混り砂 黒灰色シルト～オリーブ黒色シルト質粘土 黄灰色砂礫～灰色シルト質粘土	av.20 av.10 av.10 ≦15		一地震? (火山灰の2次堆積あり) シカ・トリの足跡		船元Ⅱ式	
	NG12C層	黒褐色～オリーブ黒色シルト～粘土 黒褐色～灰色粗粒砂 黒褐色シルト質粘土・植物片多含 灰色中～粗粒砂・礫混り オリーブ黒色シルト 灰色砂・一部シルト質 黄灰色ガラス質火山灰	≦25 5-10 av.10 av.40 ≦20 ≦30 ≦5		▽土器 ▽石器製作址		甲穀類の黒穴の化石 一大火	
NG12D層	オリーブ黒色極細粒砂質シルト 灰色礫混り砂・シルト層を挟む 灰色細粒シルト	20～30 ≦60 ≦5				押型文土器 有茎尖頭器・鏝石刀		
下部	NG13A層	灰黄～灰白色細粒シルト(火山灰質)	av.7	一乾痕	▽石器製作址		割器・ナイフ形石器・割片・石核 (15000)	
最上部	NG13B層	黄褐色～灰黄色シルト質粘土 黄褐色粗粒シルト質火山灰	≦5 ≦5	一平安神宮火山灰層(AT)			割片・石核 一25000	
	NG13C層	暗灰質～暗褐色シルト質粘土	av.12	一地震			後期旧石器	
上部	NG14層	灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土 灰色砂礫～砂質シルト	20-80		▽石器製作址		割器・ナイフ形石器・細部調整割片石器	
下部	NG15層	黄灰色～緑灰色粘土～砂礫 シルト・砂礫	150-450					
中位段丘構成層	NG16A層	暗灰～灰青色シルト・礫混り砂互層 暗褐色泥炭質粘土・沼沢地性層 灰色火山灰質砂質粘土～シルト；河成～ 沼沢地性層 灰色砂礫；河成層	≦150 ≦20 ≦25 ≦260		ヒメマツハダ 一ナウマンゾウの足跡 一化石林・ナウマンゾウとオオノヅカの足跡化石 一高塚火山灰層(As0-4) 一北花田火山灰層(KTz) 一ゾウの足跡状の凹み		一87000 一91000	
	NG17A層	オリーブ灰色砂質粘土；古土墳	av.10				中前期旧石器	
	NG17B層	オリーブ灰色砂混り粘土質シルト；沼沢 地性層 緑灰色粗粒砂質シルト；河成～沼沢地性層 緑灰色極細粒砂～細礫；河成層	av.20 av.10 av.10		一ナウマンゾウ臼歯(クメラ片)			
	NG18層	緑灰色砂質シルト～緑灰色砂礫	av.65		一ゾウの足跡状の凹み			
	NG19層	暗緑灰色砂質粘土～緑灰色砂礫 緑灰色砂混り粘土質シルト 上方細粒化 下部で極細粒～極細	av.50 ca.280					
	NG20層	オリーブ黒色泥炭～泥炭質粘土	ca.100					
	NG21層	暗緑灰色細粒砂質シルト	ca.40					
	中部	NG22層	含貝化石砂～粘土	ca.200				(12万年)

図9 長原遺跡の標準層序(注2より転載)

**①層**

現耕作土直下の層で、調査区全域（1～6区）で確認している。灰黄色（2.5Y7/2）粘土砂混じり土で、高さ TP. 10.8m 付近において、僅かに南西から北東に傾斜をもって堆積している。厚さは、0.04～0.08m と薄い堆積層であるが、瓦器、土師器、須恵器等の遺物を包含している。この層上面が1面（中世末～近世初）の検出面である。長原遺跡の市文協標準層序「NG 3層」に該当すると考える。後述するように、1面では、中世末～近世初の遺構を検出しているが、近世初めにこの高さまで削平されたものと考えている。削平時期については、18世紀初め頃ではないかと推定している。

**②層**

①層直下の層で、調査区全域（1～6区）で確認している。にぶい赤褐色（5YR4/4）砂混じり土層で、高さ TP. 10.6～.7m 付近で、僅かに南西から北東に傾斜をもって堆積している。厚さは、0.03～0.11m と均一ではなく、瓦器、土師器、須恵器、磁器等の古墳時代から中世の遺物を包含している。①層との接触面はかなり乱れている。このような層厚や接触面の乱れは、後世の耕作に起因するものと考えている。長原遺跡の市文協標準層序「NG4層」に該当すると考える。

**③層**

②層直下の層で、調査区1～4、6区で確認している暗褐色（10YR3/4）粘土混じり粗砂層で、氾濫堆積と思われるものである。高さ TP. 10.6m 付近で、厚さは、0.01～0.04m と薄く不連続で③層が遺存しない所では、次の④層が露出する。③層は、長原遺跡の市文協基本層序「NG4層」に該当すると考える。検出状況では、③層が遺存するのは部分的であり、②層との接触面もかなり乱れていることから、本来の堆積が後世の削平等でかなり人為的に改変されているものと考えられる。③層上面は2面（古墳時代中期～中世前半）の検出面でもあるが、後述するようにこの層は飛鳥時代以降の堆積と考えている。

**④層**

②・③層直下で検出される層で、調査区1～4、6区で確認している黄褐色（2.5Y5/6）粘土混じり粗砂層である。高さ TP. 10.5～.6m 付近で、僅かに南から北に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.05～0.11m と均一ではなく、②層や③層との接触面は乱れている。長原遺跡の市文協基本層序「NG 7層」に該当すると考える。③層上面と同様に④層上面が、2面（古墳時代中期～中世前半）の検出面である。③層上面との関係からすると④層上面を古墳時代の遺構面と考えるのが適当であるが、遺構の検出状況等からすると、本来の古墳時代中・後期の遺構面は、削平されて遺存しておらず、下層堆積が露出していると考えの方が妥当と考える。

**⑤層**

④層直下の層で、調査区1～4区で確認している黄灰色（2.5Y6/1）シルト質粘土層である。高さ TP. 10.4～.5m 付近で僅かに南から北に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.05～0.1m と均一ではなく、⑥層との接触面もやや乱れている。長原遺跡の市文協基本層序「NG 8層」に該当すると考える。この層上面が3面（弥生時代後期～古墳時代前期）の検出面である。

**⑥層**

⑤層直下の層で、調査区1～4区で確認している黄色（2.5Y8/8）粘質シルト層である。高さ

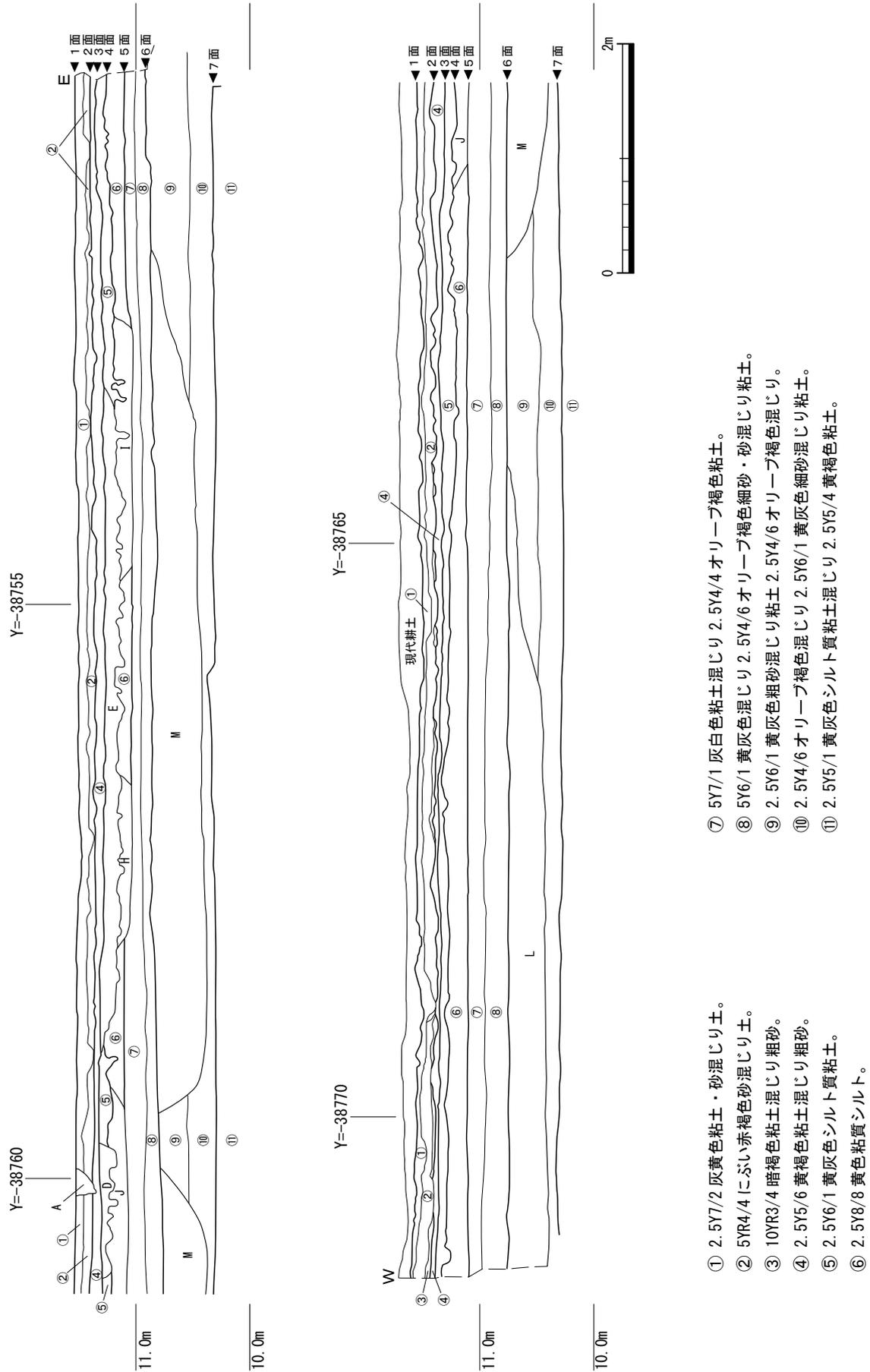


図10 立坑本体部(1~4区)東西断面図 1/50

- ① 2.5Y7/2 灰黄色粘土・砂混じり土。
- ② 5YR4/4 にぶい赤褐色砂混じり土。
- ③ 10YR3/4 暗褐色粘土混じり粗砂。
- ④ 2.5Y5/6 黄褐色粘土混じり粗砂。
- ⑤ 2.5Y6/1 黄灰色シルト質粘土。
- ⑥ 2.5Y8/8 黄色粘質シルト。
- ⑦ 5Y7/1 灰白色粘土混じり 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土。
- ⑧ 5Y6/1 黄灰色混じり 2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂・砂混じり粘土。
- ⑨ 2.5Y6/1 黄灰色粗砂混じり粘土 2.5Y4/6 オリーブ褐色混じり。
- ⑩ 2.5Y4/6 オリーブ褐色混じり 2.5Y6/1 黄灰色細砂混じり粘土。
- ⑪ 2.5Y5/1 黄灰色シルト質粘土混じり 2.5Y5/4 黄褐色粘土。

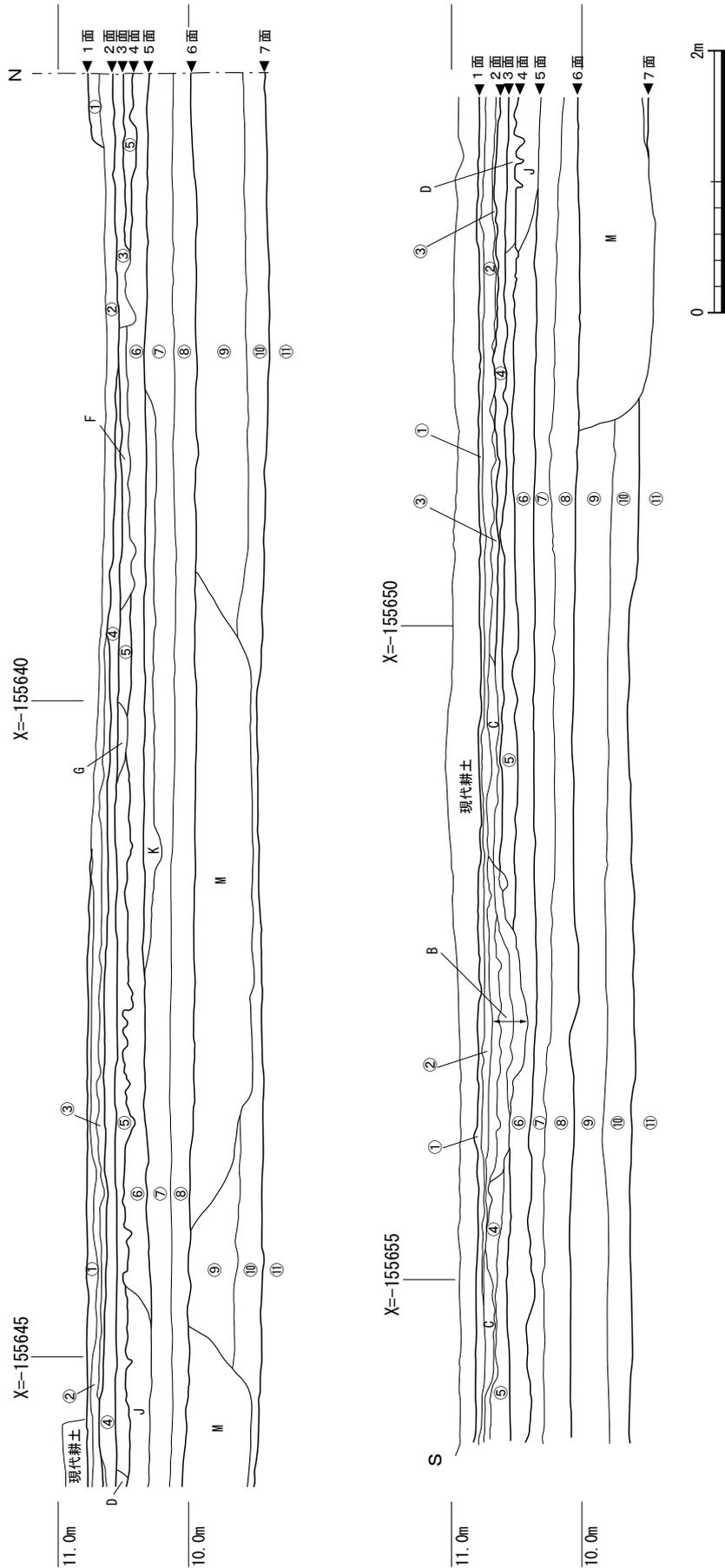


図 11 立坑本体部 (1 ~ 4 区) 南北断面図 1/50

- |              |  |              |                                   |
|--------------|--|--------------|-----------------------------------|
| A 溝 1-009    | 2.5Y4/1 黄灰色砂・粗砂混じり土。                         | G 土坑 3-007   | 10YR6/2 灰黄褐色砂混じり粘土。               |
| B 溝 2-001    | 図 26。  | H 土坑 4-002   | 図 18。                             |
| C 整地土        | 2.5Y6/2 灰黄色と 2.5Y4/6 オリーブ褐色の混合砂質粘土。          | I 土坑 4-003   | 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト質粘土。             |
| D 土坑 3-003   | 7.5YR5/1 褐色極細砂混じり粘土。                         | J 土坑 4-004   | 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト質粘土、乾痕多。         |
| E 溝 3-004    | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトが斑状に混じる 2.5Y5/1 黄灰色シルト~極細砂。 | K 土坑 5-004   | 2.5Y7/1 灰白色粘土混じり 2.5Y6/4 にぶい黄色粘土。 |
| F 落ち込み 3-006 | 10YR3/2 黒褐色砂混じり粘土。                           | L 落ち込み 6-001 | 2.5Y6/6 明黄褐色粘土混じり 2.5Y7/1 灰白色粘土。  |
|              |  | M 溝 6-002    | 図 14。                             |

### 第3章 調査の成果

TP. 10.3～.5m 付近で僅かに南東から北西に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.1～0.15m で、⑦層との接触面は比較的平坦である。長原遺跡の市文協基本層序「NG 8～9層」に該当すると考える。この層上面が4面（弥生時代前期後半～弥生時代中期）の検出面である。

#### ⑦層

⑥層直下の層で、1～4区で確認している。灰白色（5Y7/1）粘土混じりオリーブ褐色（2.5Y4/4）粘土層である。高さ TP. 10.1～.4m 付近で南から北に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.1～0.2m で、⑧層との接触面は平坦である。長原遺跡の市文協基本層序「NG 9層」に該当すると考える。この層上面が5面（縄文時代晩期～弥生時代前期前半）の検出面である。

#### ⑧層

⑦層直下の層で、1～4区で確認している黄灰色（5Y6/1）混じりオリーブ褐色（2.5Y4/6）細砂・砂混じり粘土層である。高さ TP. 10.0～.1m 付近で南から北に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.1～0.15m で、⑨層との接触面は平坦である。長原遺跡の市文協基本層序「NG 9層」に該当すると考える。

#### ⑨層

⑧層直下の層で、1～4区で確認しているオリーブ褐色（2.5Y4/6）混じり黄灰色（2.5Y6/1）細砂混じり粘土層である。高さ TP. 9.6～10.0m 付近で南東から北西に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.15～0.4m で、⑩層との接触面は平坦であるが、3・4区では侵食により（落ち込み6-001）⑨層は殆ど失われている。長原遺跡の市文協基本層序「NG 9～12層」に該当すると考える。この層上面が6面（縄文時代中期～縄文時代後期頃）の検出面である。

#### ⑩層

⑨層直下の層で、1～4区で確認しているオリーブ褐色（2.5Y4/6）混じり黄灰色（2.5Y6/1）細砂混じり粘土層である。高さ TP. 9.6～10.0m 付近で南東から北西に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.15～0.4m で、⑩層との接触面は平坦であるが、⑨層同様に3・4区では侵食により（落ち込み6-001）層厚の半分程が失われている。長原遺跡の市文協基本層序「NG 9～12層」に該当すると考える。

#### ⑪層

⑩層直下の層で、1～4区で確認している黄灰色（2.5Y5/1）シルト質粘土混じり黄褐色（2.5Y5/4）粘土層である。高さ TP. 9.4～9.6m 付近で南西から北東に傾斜をもって堆積しており、厚さは、0.2m まで確認している。長原遺跡の市文協基本層序「NG12～13層」に該当すると考える。この層上面が7面（旧石器時代～縄文時代早期頃）の検出面である。

（注1）『長原遺跡発掘調査報告 XV』「第VI章第2節 NG91-1次およびその周辺の調査」2006年11月（財）大阪市文化財協会より作成

（注2）『同上』「第I章第1節長原遺跡の概要」2006年11月（財）大阪市文化財協会の表2より転載

## 第2節 7面（旧石器時代～縄文時代早期）

7面の調査は、1～4区で実施した。T.P9.5～.6m付近で検出した⑬層（黄灰色シルト質粘土混じり黄褐色粘土層）上面をベースにする遺構面である。調査区全体では、南西から北東方向に地形が低くなる傾斜を持つようである。7面は、NG12～13層に相当する遺構面と考えている。大阪市による周辺の調査では、調査地の南東100～130mの付近で、径4～6mの範囲にサヌカイト片が集中して出土する旧石器製作址を多数検出している。また、周辺での調査の層位に関する記述で、NG12層とする堆積の中に、「横大路火山灰層（アカホヤ火山灰層 Ah）」を、また、NG13層とする堆積の中に、「平安神宮火山灰層（始良火山灰層 AT）」を検出したと報告している。6面から7面への掘り下げ時に、小範囲で厚さ数cm程のレンズ状白色微砂堆積を数箇所を確認したが、何れも火山灰層起源ではあるが、二次堆積と思われる。また、大阪市の報告では、NG12B層とする堆積の中に「火山灰の2次堆積あり」としているが、これとは堆積層位の違いから別のものであると考えられる。長原遺跡での最古の石器製作址が平安神宮火山灰層（始良火山灰層 AT）の下から発見されているとの報告があり、これら的大阪市による調査成果から、この遺構面の上限は、後期旧石器時代に遡ることになる（図12・図版1）。

## (1) 遺構

## 落ち7-001

調査区の北から東にかけて緩やかな傾斜で落ちる地形を検出している。推定されている瓜破台地の北東側縁辺部の位置とほぼ合致することから、沖積低地部に向かって下がり始める瓜破台地縁辺部を確認したと考えている。今回の調査範囲内では、周辺部の調査で検出されているような石器製作址等は確認出来

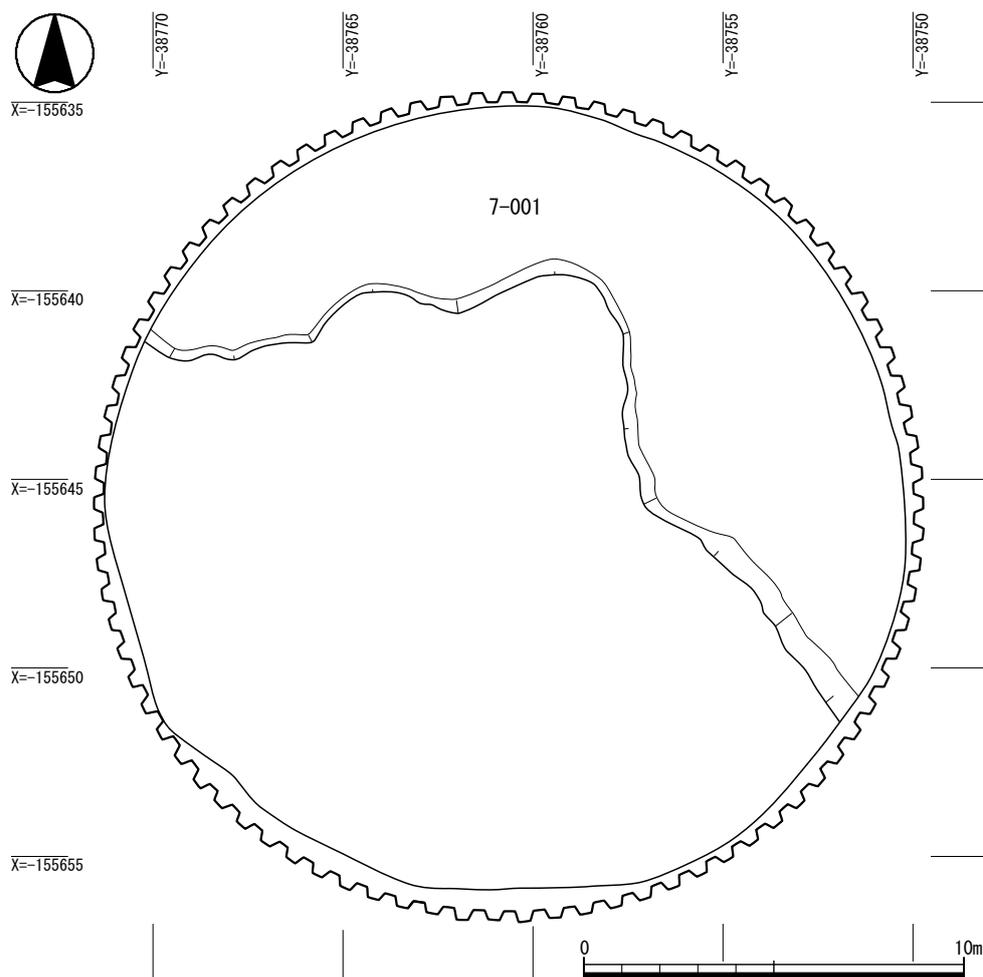


図12 7面遺構図 1/200

第3章 調査の成果

なかった。

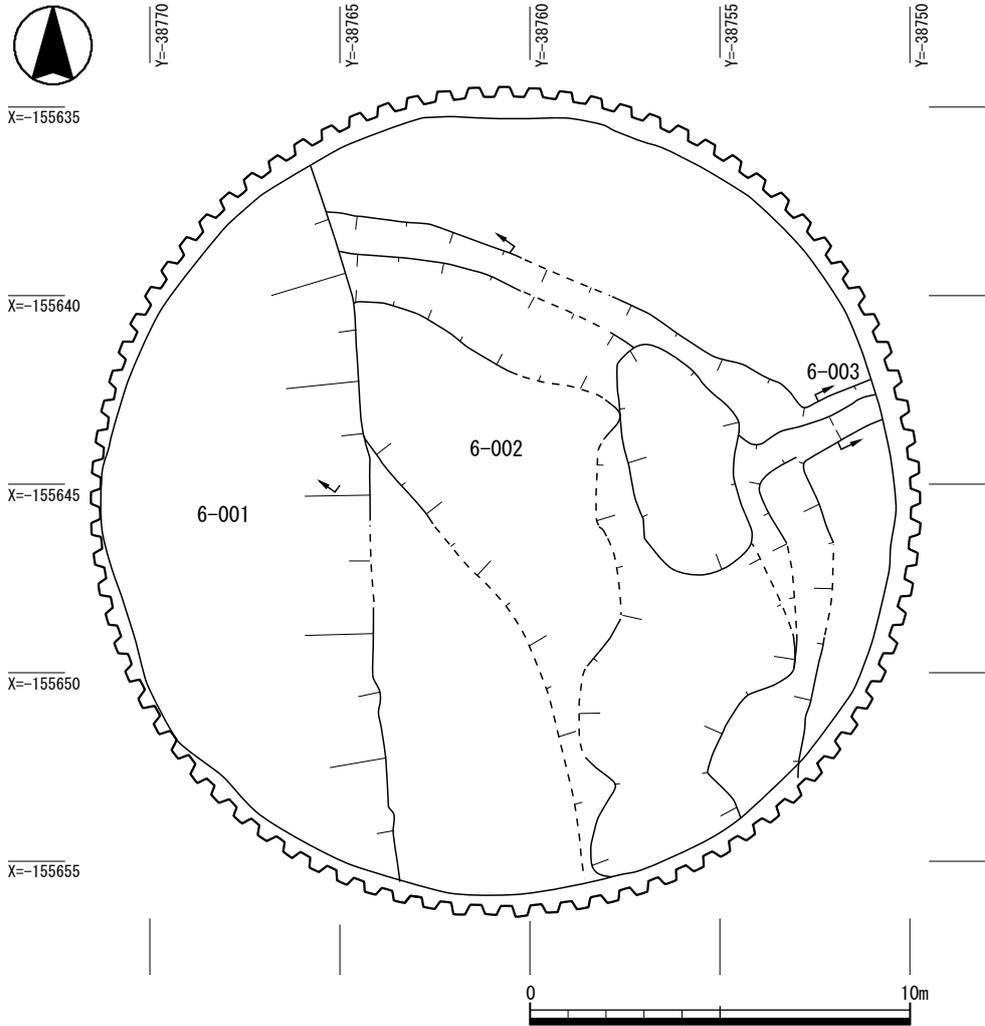
(2) 遺物

遺構面付近の堆積層を含めて、遺物は出土しなかった。

第3節 6面（縄文時代中期～縄文時代後期）

6面の調査は、1～4区で実施した。T.P10.1m付近で検出した⑪層（オリーブ褐色粘土混じり黄

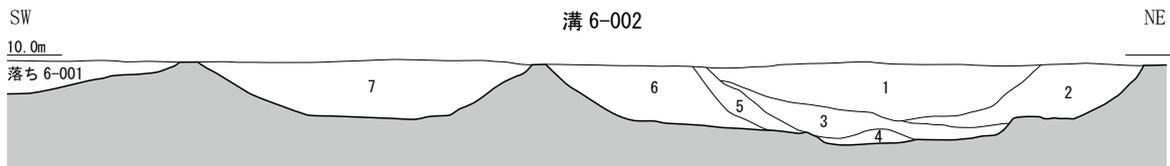
灰色細砂混じり粘土層）上面をベースにする遺構面である。周辺の調査では、北西に100m程で瓜破台地から北東に開く比較的小規模な開析谷が検出されている。調査区全体では、この開析谷に向かって東から西方向に地形が低くなる傾斜を持つようである。6面は、NG 9～12層に相当する遺構面と考えている（図13・図版1・2）。



(1) 遺構

落ち

落ち 6-001



溝 6-002

1. 2.5Y6/2 灰黄色砂混じり粘土に2.5Y5/4 黄褐色粘土混じり (20%)
2. 2.5Y6/2 灰黄色砂混じり粘土に2.5Y5/4 黄褐色粘土混じり (20%)
3. 2.5Y7/1 灰白色砂混じり粘土に2.5Y5/6 黄褐色粘土混じり (15%)
4. [ベース土]2.5Y5/4 黄褐色粘土に2.5Y6/2 灰黄色粘土混じり (30%)
5. 2.5Y5/4 黄褐色砂混じり粘土2.5Y6/1 黄灰色粘土 (40%)
6. 2.5Y6/1 黄灰色粘土に2.5Y5/4 黄褐色粘土混じり (10%)
7. 2.5Y7/1 灰白色粘土に2.5Y6/3 にぶい黄色粘土 (3%)

図13 6面遺構図 1/200

溝 6-002

溝 6-003

1. 2.5Y5/6 黄褐色砂混じり粘土、2.5Y3/2 黒褐色
2. 2.5Y6/6 明黄褐色粘土、2.5Y 白色粘土混じり
3. 2.5Y7/3 浅黄色粘土

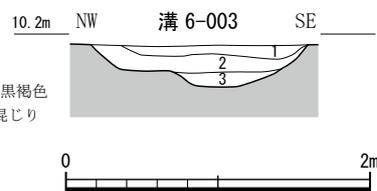


図14 溝 6-002・003 土層断面図 1/50

調査区西側（3・4区）で検出した東から西に下る傾斜の遺構である。検出時は浅い流路跡と考えていたが、堆積の状況やT.P9.6～10mの高さで検出していることなどから、地形の侵食などによる落ちであろうと推察した。また、遺構の切り合いからすると、6面で検出した遺構の中で最も新しい段階のものである。遺物は出土しなかった（写真2）。

**溝**

**溝6-002**

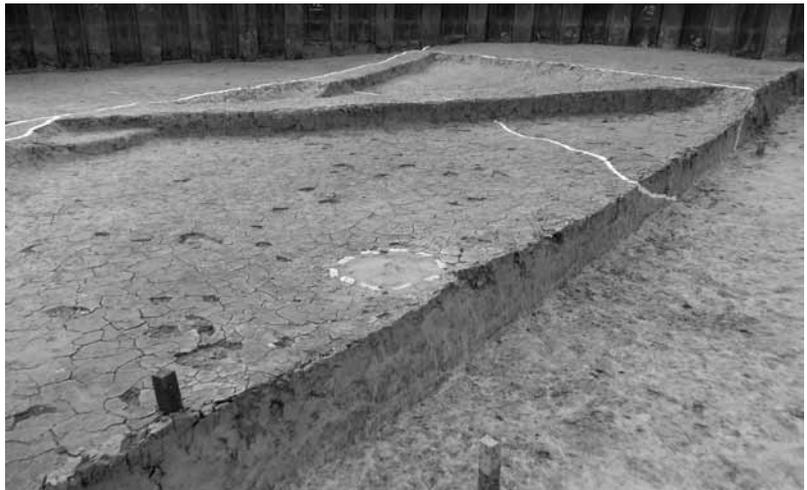
調査区南東から北西（1～3区）に向かって、緩やかに北に蛇行しながら流れる幅約10mの流路である。流路内堆積がほぼ粘土質であることから、検出長は僅かに24m程だが、この範囲内で推定すると、通常は1～3m程の緩やかな流れであったと考えられる。それが増水等により3回程度流路を変えている状況が確認できた。ただし、氾濫などによる流路の変更は、この10m幅の中で収まっている。炭片が集中するところを確認していて、焚き火跡とも考えられる事等、流路の変更が人為的な可能性も考えられるが、今回の調査では確認出来ていない。また、後述する溝6-003が流れ込む所で溝底部が南北に6m、東西に3mの範囲で、最深が0.25m程皿状に窪んでいた。この部分については、特に土器・石器等や種子・堅果類等の遺物に期待したが、出土しなかった（図14）。

**溝6-003**

調査区北東部（3・4区）で検出した幅1.25mで北東方向から来て、溝6-002に流れ込んで



落ち6-001 土層断面



溝6-002 検出状況及び土層断面（手前破線は炭片集中部）



溝6-003 及び土層断面

写真2 第6面遺構の土層断面

### 第3章 調査の成果

いる。検出長は合流部分の僅か3.5 m程である。溝の深さ0.23 mで、掘り方が特徴的で、0.15 m程掘下げた所で溝内北側に幅0.7 mの犬走りを設けている。形状から人工的な溝である事は容易に推定されるが、遺物は出土していない。

#### (2) 遺物

遺構面付近の堆積層を含めて、遺物は出土しなかった。

## 第4節 5面（縄文時代晩期～弥生時代前期前半）

5面の調査は、1～4区で実施した。T.P10.3m付近で検出した⑨層（灰白色粘土混じりオリブ褐色粘土層）上面をベースにする遺構面で、この面では干痕が顕著である。周辺の調査では、北西に100 m程で瓜破台地から北東に開く比較的小規模な開析谷が検出されている。5面はNG 8～9層に相当する遺構面と考えている（図15・16・図版3）。

#### (1) 遺構

##### 土坑

##### 土坑5-001

調査区東端部（1区）で検出した平面形が径1.5～1.6 mの不定形で、深さが0.1 mの浅い皿状の土坑である。9層の厚さからすると層を半分程掘り下げている。土坑内の埋土は、9層の粘土の再堆積のようであるが、ベースとなる土色がオリブ褐色を呈するのに対して、やや暗い明黄褐色を呈している。また、埋土の方が灰色粘土の混じる比率が少ない。土坑ないから遺物は出土していない。

##### 土坑5-002

調査区東部（1区）の土坑5-001の北東側1.5 mで検出した平面形が径2.3 mの不定

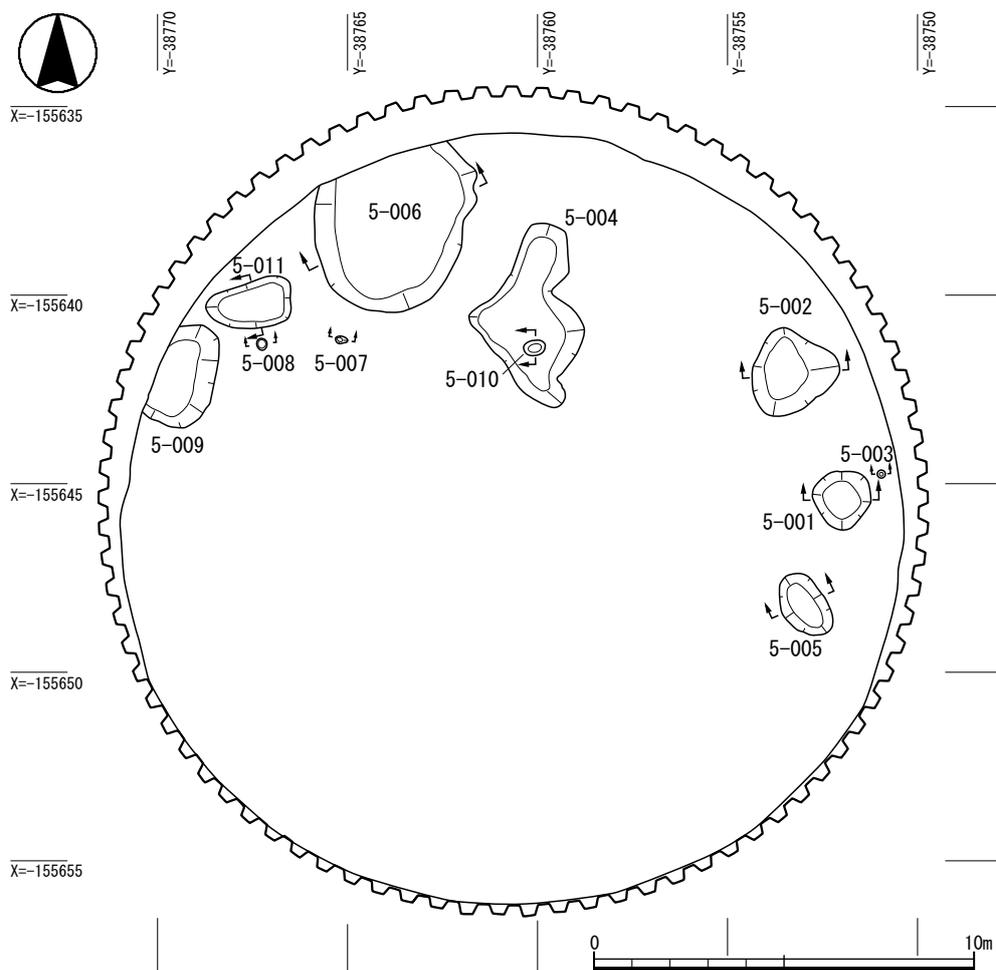


図15 5面遺構図 1/200

形で、深さが0.12 mの浅い皿状の土坑である。土坑内の埋土は、土坑5-001とほぼ同様の堆積であるが、マンガンや鉄分が固まったと思われる粒状のものが多く観察された。土坑内から遺物は出土していない。



写真3 土坑5-004・010及び南北アゼ土層断面

### 土坑5-004、010

調査区北側（1・3区）で検出した平面形が南北に長く4.9 mの東西幅が最大3.1 mの不定形で、深さが0.08 mの浅い皿状の土坑である。平面形が不定形としたが、南北で2基の土坑が重なったものと思われる。北側の土坑は縦横各2 m程の隅丸形状で、南側の土坑は縦横各3 m程の隅丸形状で南東隅に突出部をもつ形状であろう。埋土は、灰白色粘土混じりのにぶい黄色粘土で、5面ベース面で見られる干痕があまり顕著ではない。また、南側の土坑の中央部やや南寄り土坑5-004の底部を更に掘り下げた土坑5-010を検出している。平面形は長径0.5 m、短径0.4 mの卵形を呈し、深さが0.14 mの椀状の土坑である。埋土は、灰白色シルト質粘土の小塊が混じるマンガン粒を含む黄橙色シルト質粘土である。各土坑内から遺物は出土していない（写真3）。

### 土坑5-005

調査区北西部（2区）で検出した平面形が南北2.8 m、東西検出部分1.6 mの隅円形状で、深さが0.1

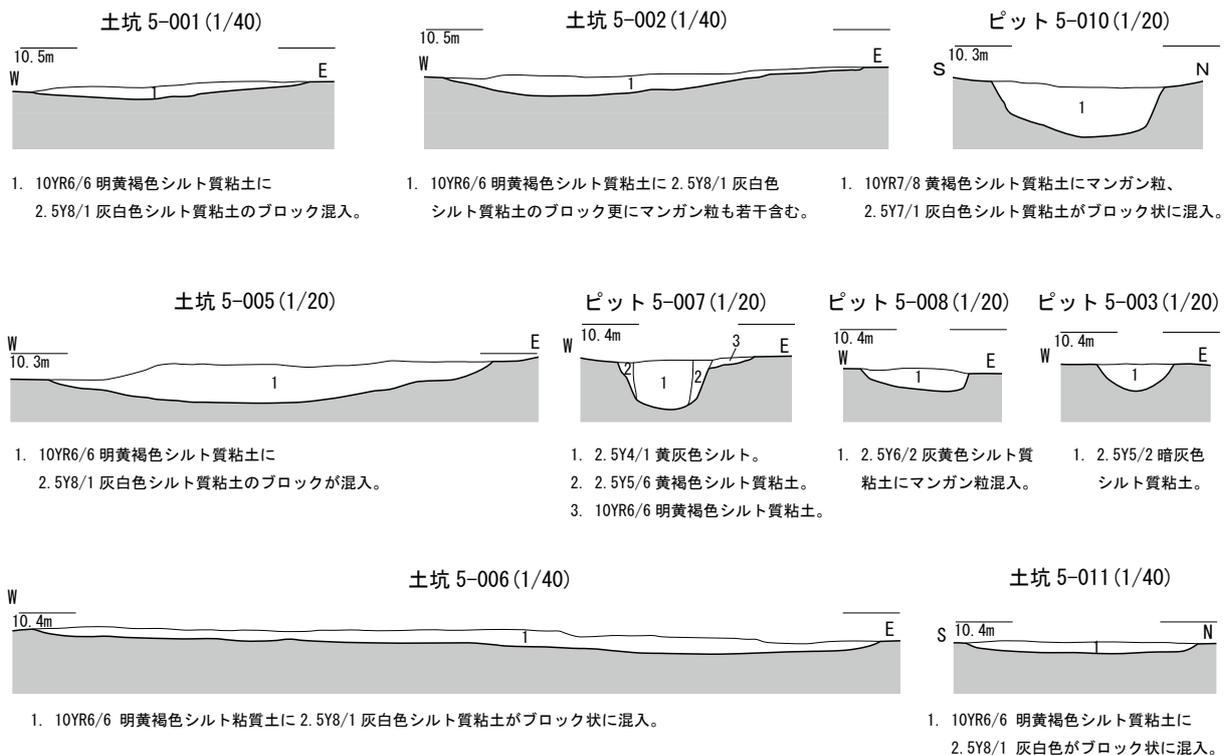


図 16 5面検出遺構土層断面図 1/20・1/40

### 第3章 調査の成果

mの浅い皿状の土坑である。土坑内の埋土は、土坑5-001と同じである。土坑内から土器等の遺物は出土していないが、土坑内底部の北西部分で炭片が径10cmの範囲で検出された。

#### 土坑5-006

調査区東部(3区)の土坑5-001の北東側1.5mで検出した平面形が径2.3mの不定形で、深さが0.12mの浅い皿状の土坑である。土坑内の埋土は、土坑5-001等と同じである。土坑内から遺物は出土していない。

#### 土坑5-009

調査区西端部(3区)で検出した平面形が径1.5～1.6mの不定形で、深さが0.1mの浅い皿状の土坑である。土坑内の埋土は、土坑5-001等と同じである。土坑内から遺物は出土していない。

#### 土坑5-011

調査区北西部(3区)の土坑5-006と009の間で検出した平面形が長径2.2m、短径1.2mの卵形を呈し、深さが0.06mの浅い皿状の土坑である。土坑内の埋土は、土坑5-001等と同じである。土坑内から遺物は出土していない。

#### ピット

##### ピット5-003・007・008

ピット5-003は、径0.2m、深さ0.07mで、調査区東端部(1区)で検出した杭状の遺構である。ピット5-007、008は、径0.35mと0.2m、深さ0.12mと0.05mで共に調査区西部(3区)で検出した杭状の遺構である。埋土は、土坑5-001等と同じである。ピット内から遺物は出土していない。

#### (2) 遺物

遺構面付近の堆積層を含めて、遺物は出土しなかった。

## 第5節 4面(弥生時代前期後半～弥生時代中期)

4面の調査は、1～4区で実施した。T.P10.4m付近で検出した⑥層(黄色粘質シルト層)上面をベースにする遺構面である。周辺の調査では、北西に100m程で瓜破台地から北東に開く開析谷を検出しているが、この頃になると旧石器～縄文時代の開析谷が埋没し、調査地付近のように新たに比較的小規模な開析谷が形成されていると思われる。調査地の西側110～130m程で検出した開析谷内で、前～中期前半頃の水田跡が検出されている。また、南東側70mで前～中期前半頃の河川跡と、この河川の南東側上流部で取水し、北西側の開析谷に水を排すると思われる2条の水路、この水路の東側、調査地の南東側30～70mで弥生時代中期後半の方形周溝墓2基、水路を挟んで周溝墓の西側、調査地の南西側60m程で居住域の一部と考えられるピット群等が検出されている。今回の調査では、立坑本体部東側(1・2区)で土坑やピットが集中した状況で検出している。4面は、NG8～9層に相当する遺構面と考えている(図17・18・図版4・5)。

#### (1) 遺構

##### 土坑

##### 土坑4-001

調査区北東部(1区)で検出した平面形が東西方向の長径2.35m、南北方向の短径1.3mで、深さ

が0.16 mの菱形に近い不整形の楕円を呈する浅い土坑である。埋土は、オリーブ褐色シルト質粘土1層だけで、黄灰色シルト質粘土で埋まった干痕がベース面よりも多く見られた。土坑内から遺物は出土していない。

**土坑4-002**

調査区中央東寄り（1・2区）で検出した平面形が南北に長く7.60 m、東西方向2.3 mの細長い不定形で、深さが0.16 mの浅い土坑である。面積10 m<sup>2</sup>を越す土坑であるが、平面形を丁寧に観察すると、土坑4-001や002程の大きさの土坑が南北に3基連なっているようである。埋土は、3層に分層でき、最下層の黄褐色シルト質粘土、次のオリーブ褐色シルト質粘土、最終堆積の2層目よりやや色が濃く干痕が多く入るオリーブ褐色シルト質粘土である。平面形からは3基の土坑が連なったように考えられることから、埋め戻さずに放置された後自然に埋没したものと考えられる。土坑内から遺物は出土していない。

**土坑4-003**

調査区南東部（1・2区）で検出した北西、南東方向に長軸5.90 m、短軸3.2 mの土坑4-002と似た平面形で、深さが0.16 mの浅い土坑である。この土坑も面積10 m<sup>2</sup>を越す土坑であるが、平面形を丁寧に観察すると、土坑4-001や002程の大きさの土坑が南北に2基連なっているようである。埋土は、土坑4-001同様にオリーブ褐色シルト質粘土1層だけである。土坑内から遺物は出土していない。

**土坑4-004**

調査区中央（1～4区）で検出した北西、南東方向に長軸3.60 m、短軸2.0 mの土坑4-001と似た大きさの土坑である。平面形はかなり角の取れた長方形形状で、深さが0.12 mの浅い土坑である。埋土は、この土坑もオリーブ褐色シルト質粘土1層だけである。土坑内から遺物は

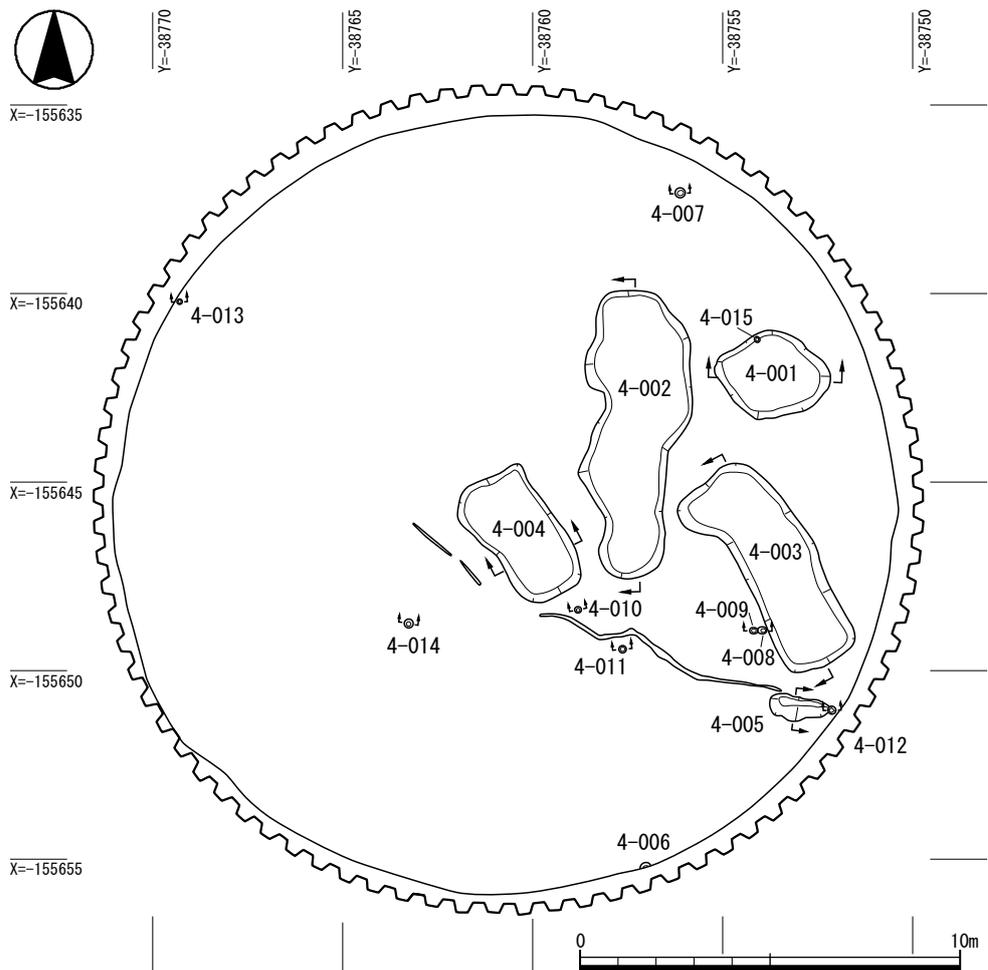


図17 4面遺構図 1/200

### 第3章 調査の成果

出土していない。

#### 土坑 4-005

調査区南東部（1・2区）で検出した東西方向に長い土坑である。平面形は、東西長軸 1.6 m、土坑中央部西寄りでの最大幅先 0.76 m で、やや歪な茄子形を呈する。先述した 4 基の土坑とは平面形も深さも異なり、掘削目的の違いによると思われる。深さは 0.33 m あり、まず上部 0.17 ~ 0.18 m 程を掘り、その後残り 0.15 m 程を掘削しているようである。土坑の東端がピット 4-012 に切られているが、この状況が偶然なのか、土坑に関連したピットなのか不明である。また、この土坑で注意する点がある。土坑の北側掘り方が土坑内に迫り出した様になっているが、本来は南側の掘り方同様に傾斜があったと思われる。図版 5-15 で示したのは、6 層上面で検出した折れ曲がりながら東西方向に幅 1 ~ 5 cm で帯状に延びる砂である。延長 10 m 程の範囲で確認出来たが、所謂「噴砂」ではなく、粘土層のひび

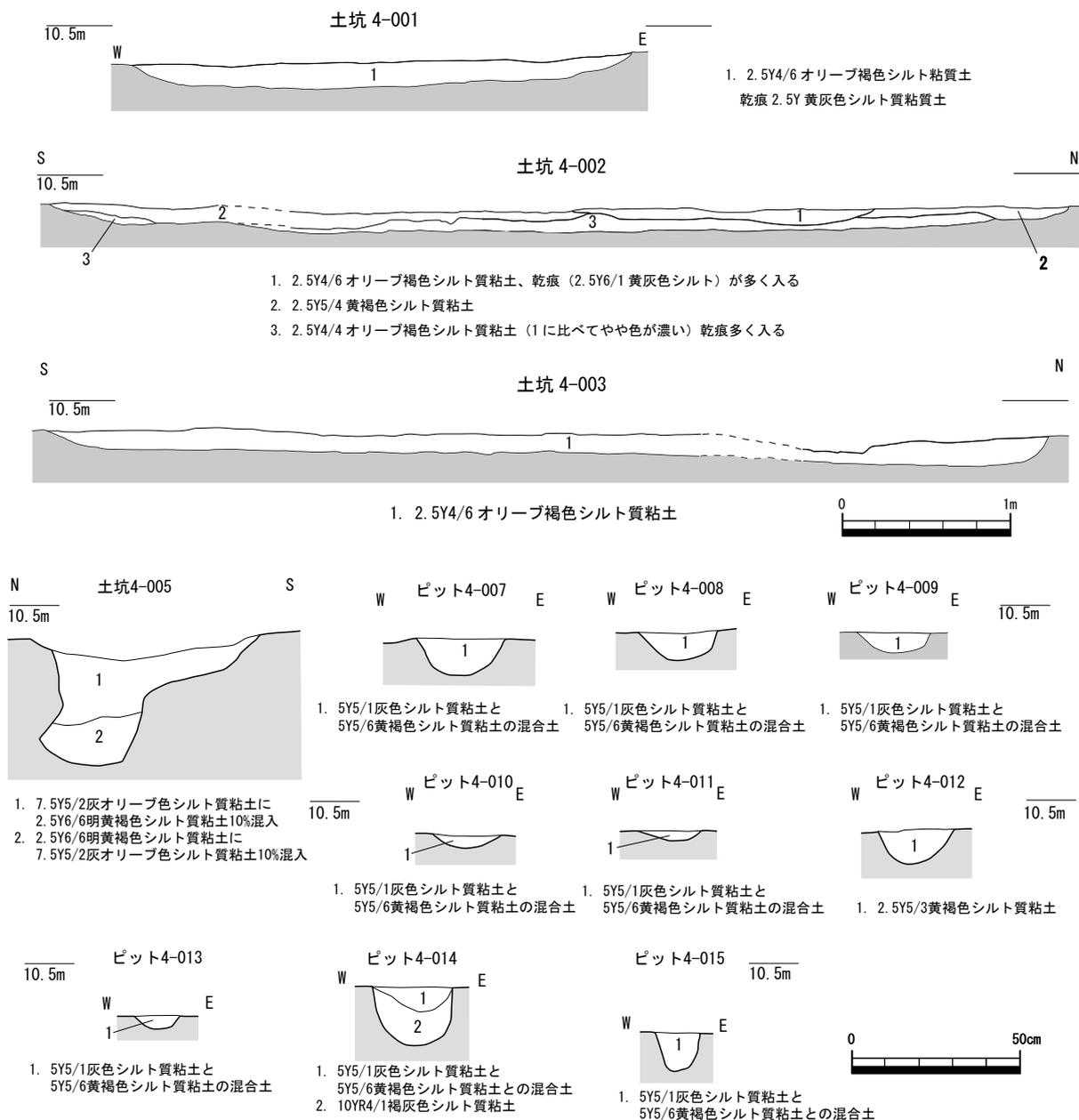


図 18 4 面遺構土層断面図

割れに砂が入り込んだものである。6層上面は写真でも見られるように「干痕」が見られ、このひび割れにはシルトから微砂の様な非常に細かな粒子の堆積が入り込んでおり、ここで報告する帯状の砂とは異なるものである。現状では、地震により地面或は堆積層に亀裂が出来、砂が入り込んだもので、地震痕跡と考えている。土坑4-005の北側掘り方の変形もこの延長線上にあり、埋土は、上下2層に分層できる。共にア・灰オリーブ色シルト質粘土とイ・明青褐色シルト質粘土の小塊の混ざった土で人為的に埋め戻されているようである。この2層はアとイの比率が異なっており、下層はイの比率が多く、上層はアの比率が多いことによる分層である。土坑内から遺物は出土していない。

#### ピット

##### ピット4-006～015

調査区西端部で検出した土坑4-013以外は、前述の5基の土坑周辺で検出している。径0.13～0.26m、深さ0.05～0.18mで全て杭状のものであると思われるが、どのような性格のものであるかは不明である。ピット内から遺物は出土していない。

#### (2) 遺物

遺構面付近の堆積層を含めて、遺物は出土しなかった。

## 第6節 3面（弥生時代後期～古墳時代前期頃）

3面は、T.P10.55m付近で検出した⑤層上面（黄灰色シルト質粘土層）をベースにする遺構面である。周辺の調査では、北東側20m～60mで弥生時代後期の溝や土坑が検出されている。今回の調査では1～3区で土坑や溝を検出した。3面は、大阪市で報告されているNG7～8層に相当する遺構面と考えている（図19・図版6）。

#### (1) 遺構

##### 溝

##### 溝3-001

調査区北東部（1区）で検出した幅1～2mで深さが0.16m程のコ字状を呈して曲がる溝である。東西方向の南辺は、約6mあり、その東西両端部でそれぞれほぼ直角に北方向に延びている。西側が長く約5m、東側が約4mである。溝内は、堆積状況から自然に埋まったと思われる。検出時は方形周溝墓と推定していたが、

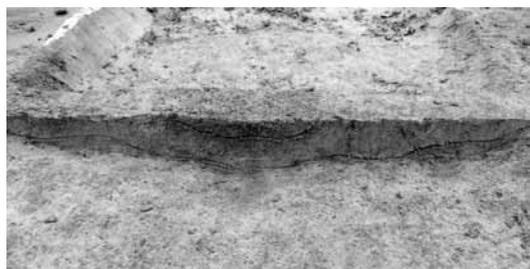


写真4 溝3-001 土層断面（西辺南北方向部）

溝に囲まれた3m×4mの長方形部分でブロック状の土が確認出来たが、厚さ数cm程度で、盛土の遺存とは考えにくく、数cmの厚さが本来の状況と思われる。また、この部分について、柱跡等の遺存について確認したが、構造物の痕跡は認められなかった。溝内から遺物は出土していない（写真4）。

##### 溝3-004

調査区南東部（2区）で検出した幅0.75～2mで深さが0.12m程の五角形状を呈して曲がる溝である。南の一辺にあたる部分のみ溝が無く、五角形の残り四辺を形作るように、それぞれの長さが4

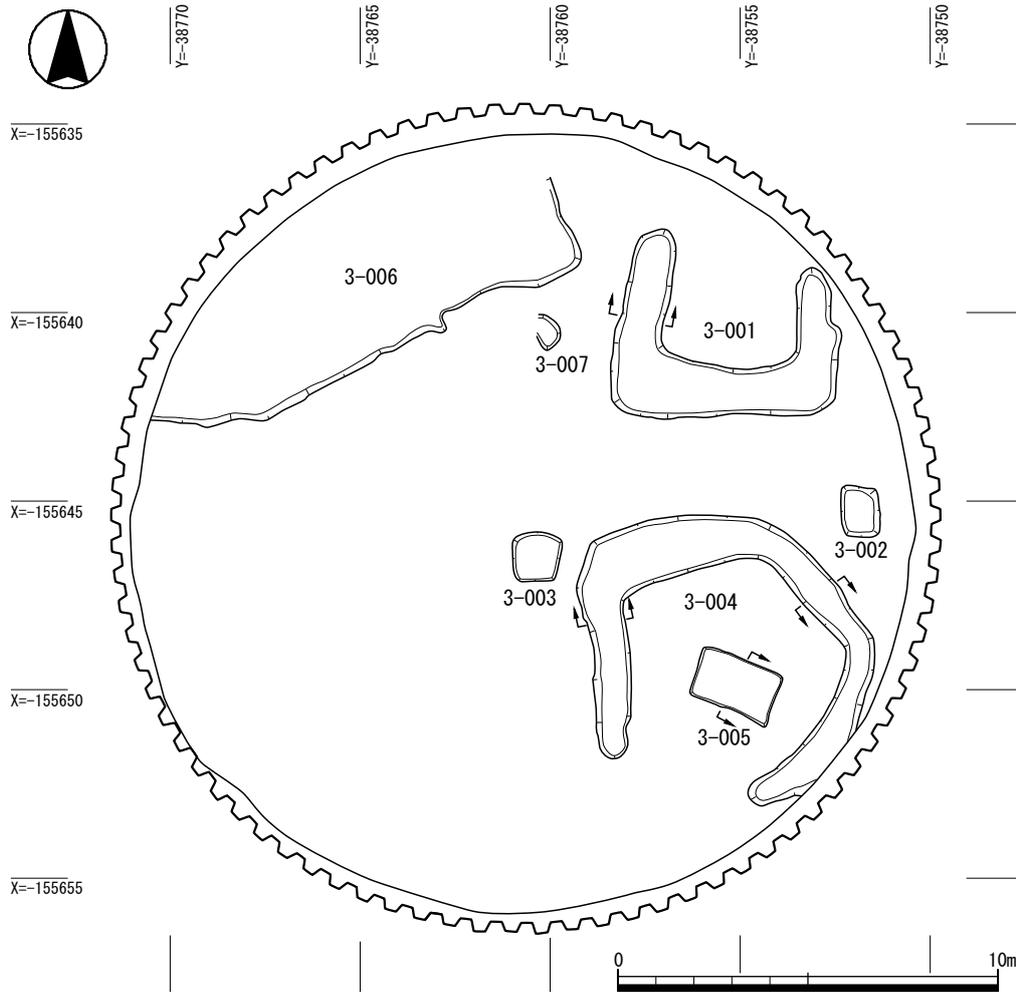


図19 3面遺構配置図 1/200

～6mで屈曲するように掘られている。溝内は、堆積状況から自然に埋まったものと思われる。この溝に囲まれた一辺3m、面積約20㎡の五角形部分で、ブロック状の土が確認出来が、厚さ数cm程度で盛土とは考え難いものであった。この遺構面に関しては、後世の堆積層流失や削平等



上 溝3-001 囲郭内



下 溝3-004 囲郭内

写真5 囲郭内再確認状況（ブロック土除去）

が考え難いので、検出した数cmの厚さが本来の形状とあまり変わらないものであろう。このブロック状の土が確認出来部分について、ブロック状の土を除去し、⑤層である黄灰色シルト質粘土層上面で柱跡等の遺存についても確認したが、認められなかった。遺物は溝内から出土していないが、溝の囲郭内で土坑3-005を検出中に土坑西側付近でサヌカイト剥片と石鏃が出土している（図20-1～5・図版14）。前述したブロック状の土に包含されていたものと考えられる（写真5）。

土坑

土坑3-002、003

土坑3-002は、調査区東部（1区）で検出した四角形の辺が1.02m×1.03m、深さが0.09mのほぼ正方形の浅い土坑である。土坑3-003は、2区で検出した平面形が1.03m×1.05m、深さが0.07mのほぼ正方形の浅い土

坑である。2基の土坑内から遺物は出土していない。

#### 土坑3-005

調査区南東部（2区）で検出した平面形が2.25 m × 1.40 m、深さが0.08 mの長方形の浅い土坑である。土坑内から遺物は出土していないが、溝3-004でも記述したように、この土坑検出時にサヌカイト剥片3点と石族1点が出土している。

#### 土坑3-007

調査区北東部（1区）で検出した平面形が長径0.97 m、短径0.64 m、深さが0.13 mの楕円形の浅い土坑である。土坑内から遺物は出土していない。

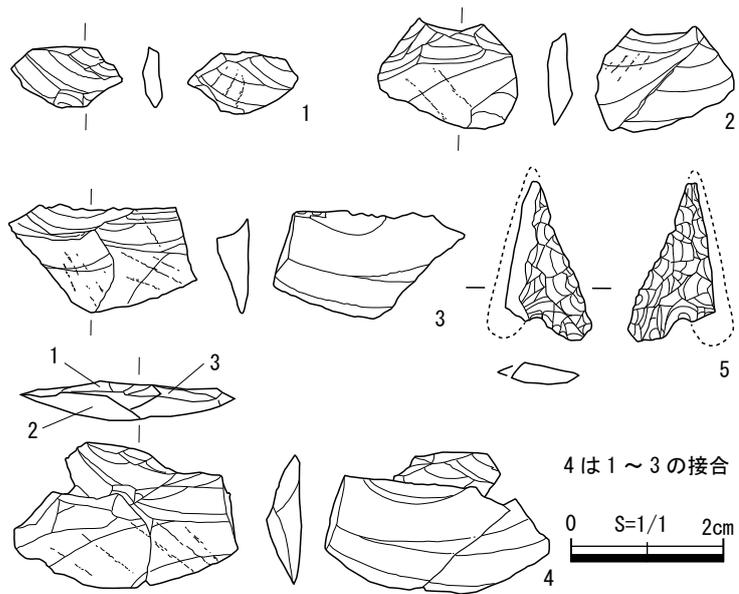


図20 溝3-004 囲郭内出土遺物 S=1/1

#### 落ち

#### 落ち3-006

調査区北西部（2区）及び1区で検出した南東から北西に向かって傾斜する地形であるが、南東隅はほぼ直角になっており、検出した南側や東側が直線的なこと等から、自然地形に人的な造成が加えられていると考える。検出した最大幅は、13 m程で深さが0.2 m程である。遺物は出土していない。

#### (2) 遺物

溝3-004の囲郭内でサヌカイト剥片3点と石族1点が出土している。サヌカイト剥片は、剥片表面の風化が進行し灰白色を呈しており、3点が接合資料であることから、この付近での石器製作を示すものである。また、石鏃についても本来は完形であったと思われるが、残念なことに発掘時に破損している。形状や風化状態から縄文時代でも比較的古い時期のものと考えられる（図20・図版14）。

## 第7節 2面（古墳時代中期～中世）

2面の調査は、立坑本体部である1～4区及び、土壌改良に伴う6区で実施した。T.P10.6～.65m付近で検出した④層（黄褐色粘土混じり粗砂）上面をベースにした遺構面である。ただし、所々に3層（暗褐色粘土混じり粗砂層）とした古代から中世頃の堆積層の残欠と考えている層が認められる。周辺の調査では北西側40 m～80 mの範囲で、古墳時代中期から後期初頭の小型方墳が6基（NG87-51、NG91-1）、東側10 mと西側80 m程離れた位置で、南北方向にほぼ1町の間隔で並行して延びる検出長100 m前後である奈良時代の2条の溝（NG87-51・90、NG88-59、NG91-1）、北西110 m～180 mで奈良時代の掘立柱建物等（NG87-28）を検出している。今回のこの面の調査では、古墳時代中期から後期初頭頃と考えられる小型方墳1基や飛鳥時代に埋まって廃絶した溝、平安時代から中世頃のものと思われる耕作痕跡や集落跡等、千年を越える時期幅の多種多様な遺構を検出している。こ

の遺構面のこのような状況は、今回の調査地周辺の開発が古代以降大規模に行われ、内容は、地形を削平して平坦地を造成する工事手法であったと推察するならば、一つの遺構面がこの様な長期間の遺構を残すことになったことが理解できる。また、2面検出の遺構について後述するが、大阪市で報告されている NG4～7 層に相当する遺構面と考えている（図 21・図版 7～11）。

(1) 遺構

古墳（長原 220 号墳）、溝 2-002、（墳丘 2-220）

調査区北西部（2区）及び6区で検出した幅2～3mで深さが0.1m程の逆L字状を呈して曲がる溝である。溝の南部分は南北方向に直線状に延長7mを検出し、その東端で北にほぼ直角に曲がり延長7mを検出した。溝の底部は水平を意識しているようであるが、平坦ではなく、凹凸が見られる。

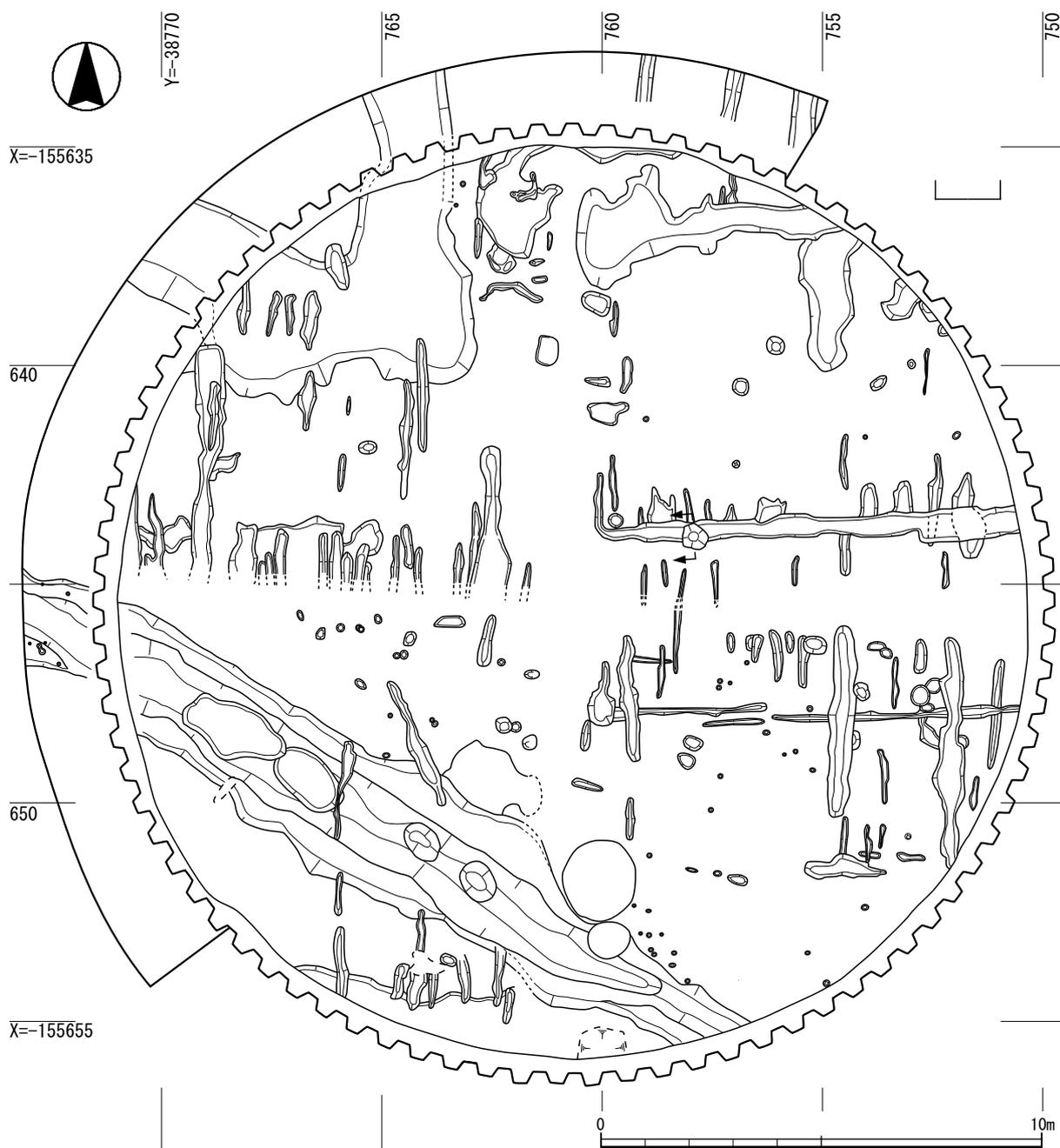


図 21 2面遺構図 1/150)

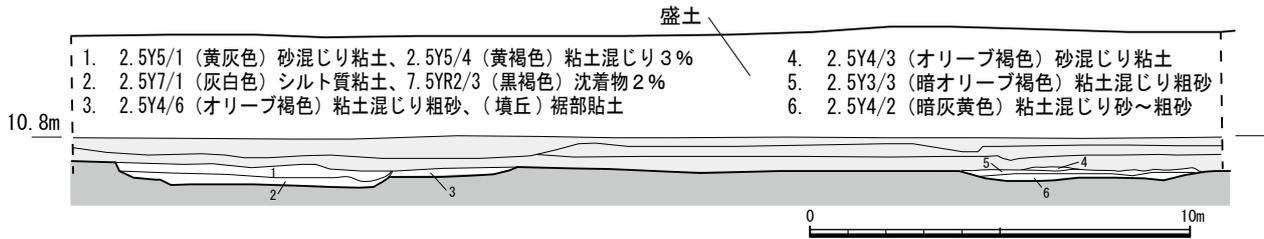


図 22 溝 2-002 (小型方墳) 断面図 1/50

この溝に区画された内側は後世の削平で高まりの遺存は認められないが、墳丘の南東隅部分を検出したと考えている。特に溝 2-002 の東西方向部分の北側で幅 1 m 程の帯状に検出したものは、墳丘裾部の盛土痕跡の可能性が考えられる。これらのことから、一辺が 6 m 以上の墳丘を有する小型方墳の一部を検出したと考える。周溝及び墳丘部から古墳に関わる遺物は出土していないが、付近の上層から須恵器・円筒埴輪片・鉄

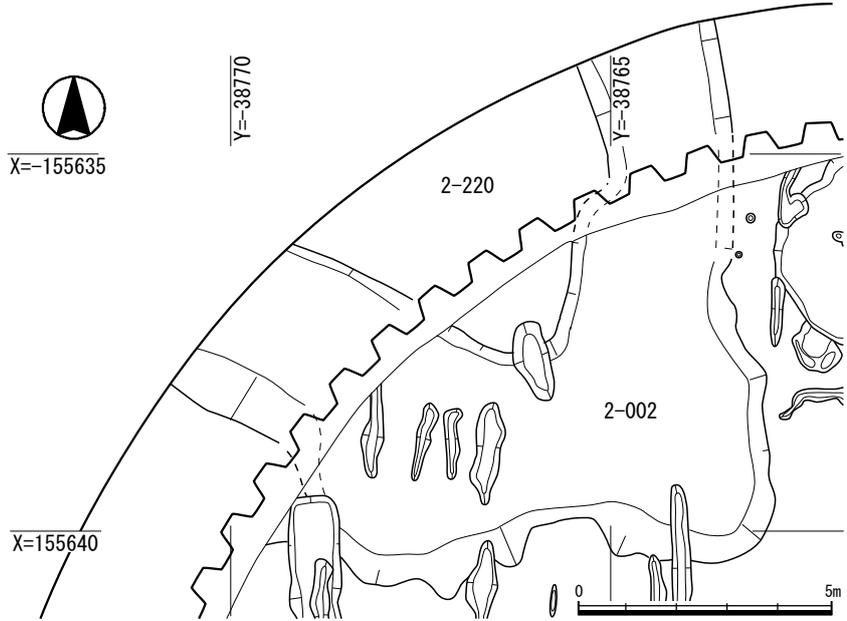


図 23 溝 2-002 (小型方墳) 平面図 1/100

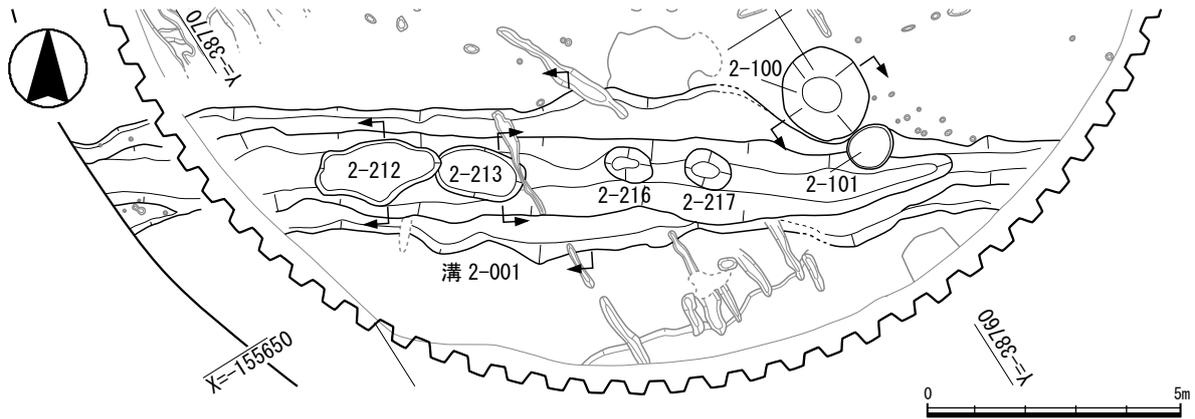


図 24 溝 2-001、土坑 3-212・213・216・217 遺構図 1/150

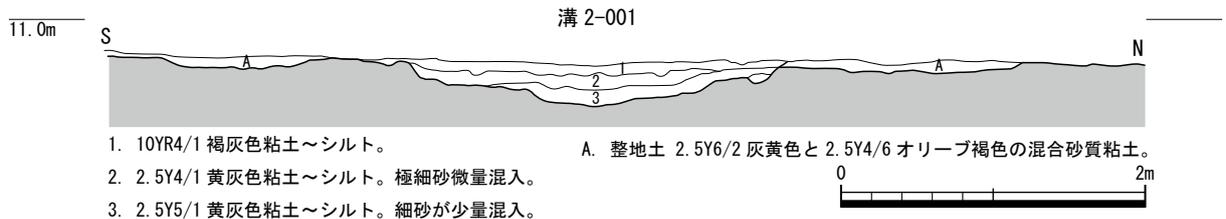


図 25 溝 2-001 土層断面図 1/40

### 第3章 調査の成果

製品が出土している（図29・図版15）。

#### 溝

##### 溝2-001

調査区南西部（2・4区）及び6区で検出した、幅1.5～2.5m、深さが0.3m程、横断面が皿状を呈し、南東から北西に直線的に延びる溝である。延長20m程を検出している。検出した南東端3m及び北西端3.5mは幅が1.5mで、その間の延長13.5mの幅が2.5mと広がっている。この部分の両側で、厚さ0.1m程のブロック状の土色・土質を呈する堆積が、幅1.5～2mの帯状に認められ、整地によるものではないかと考えている。また、この溝幅が広がる部分の溝底部で浅い土坑4基（土坑2-212、213、216、217）を検出している。溝内の最上層堆積である褐灰色粘土質シルト層から須恵器坏身等が出土しており7世紀後半には廃絶したと思われる。下層の堆積層から遺物は出土しなかったため、溝の開削時期については不明である。大阪市が報告するSD702（検出長180m）の一部を検出したと考えている（図24・25）。

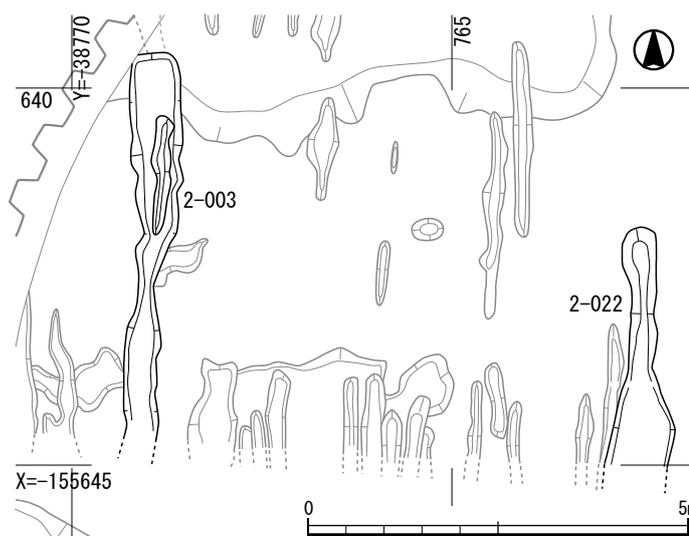


図26 溝2-003、022遺構図 1/100

溝2-003、022

調査区西側（3区）で検出した、2条の南北方向溝である。溝2-003は、幅0.2～0.65m、深さ0.04mで延長5.1m、溝2-022は、幅0.2～0.75m、深さ0.02mで延長3.1mを検出している。共に灰白色砂混じり極細砂～シルトであることから、水性自然堆積と考えられる。2条の溝の間隔は約6.5mで耕作に伴うものと考えている。南側の3区に延びていたと思われるが、削平されて遺存していない。溝2-022から土師器小片が出土している（図26）。

##### 溝2-095

調査区北端部（1区）で検出した、幅0.6～2m、深さが0.04m程、横断面が浅い皿状を呈し、東から西に直線的に延びる溝である。延長5.5m程を検出している。検出した西端部は2m×1.5m程の長方形様の不定形土坑の形状を呈して終わっている。東側は調査区外へと延びている。溝内の堆積土は、溝2-003、022同様に砂混じりの極細砂～シルトである。遺物は須恵器、土師器、瓦器片が出土しており、13世紀頃の区画溝と考えられる（図27・28）。

##### 溝2-098

調査区北東部（1区）で検出した、幅1.1m、深さが0.04m程、横断面が浅い皿状を呈し、南から北に直線的に延びて溝2-095に切られている。延長3.5m程を検出したが、溝2-095の北に延びるものであるかは、調査区外のため不明である。遺物は、須恵器瓶の頸部片や土師器の小片が出土している。

##### 溝2-131

調査区東端（1区）で検出した、幅0.5m、深さが0.11m程、横断面が浅い皿状を呈し、南から北

に直線的に延びている。溝2-132に切られており、延長2m程を検出した。形状的には、土坑かとも思えるが、周辺で検出している溝2-098、151、152等と類似性指摘できることから、溝としている。遺物は、須恵器や土師器の小片が比較的多く出土したが、古い時代の遺物混入と考えている。また、鉄釘が一点出土している（図29-16）。

**溝2-132**

調査区中央部東側（1区）で検出した、幅0.25～0.7m、深さが0.04m程、横断面が浅い皿状を呈し、西から東に直線的に延びる溝である。始点である西端は直角に曲がり北に延長1.5m延びており、東西方向と合わせて、延長11m程を検出している。検出した東端部は、調査区外へと延びている。遺物は、須恵器や土師器の小片が出土している。直角に曲がる形状から区画溝と考えられる。

**溝2-144**

調査区中央部（2区）で検出した、幅0.3～0.4m、深さ0.05m程で、横断面が上幅が広く浅いV字状を呈している。南北方向に延長3m程を検出している。位置や形状から区画溝と考えられる。

**溝2-145、149、150**

調査区中央部東側（2区）で検出した、東西方向に延びる3条の溝である。

**溝2-151、152**

調査区中央部南東側（2区）で検出した、2mの間隔で南北に延びる2条の溝である。溝2-151は、

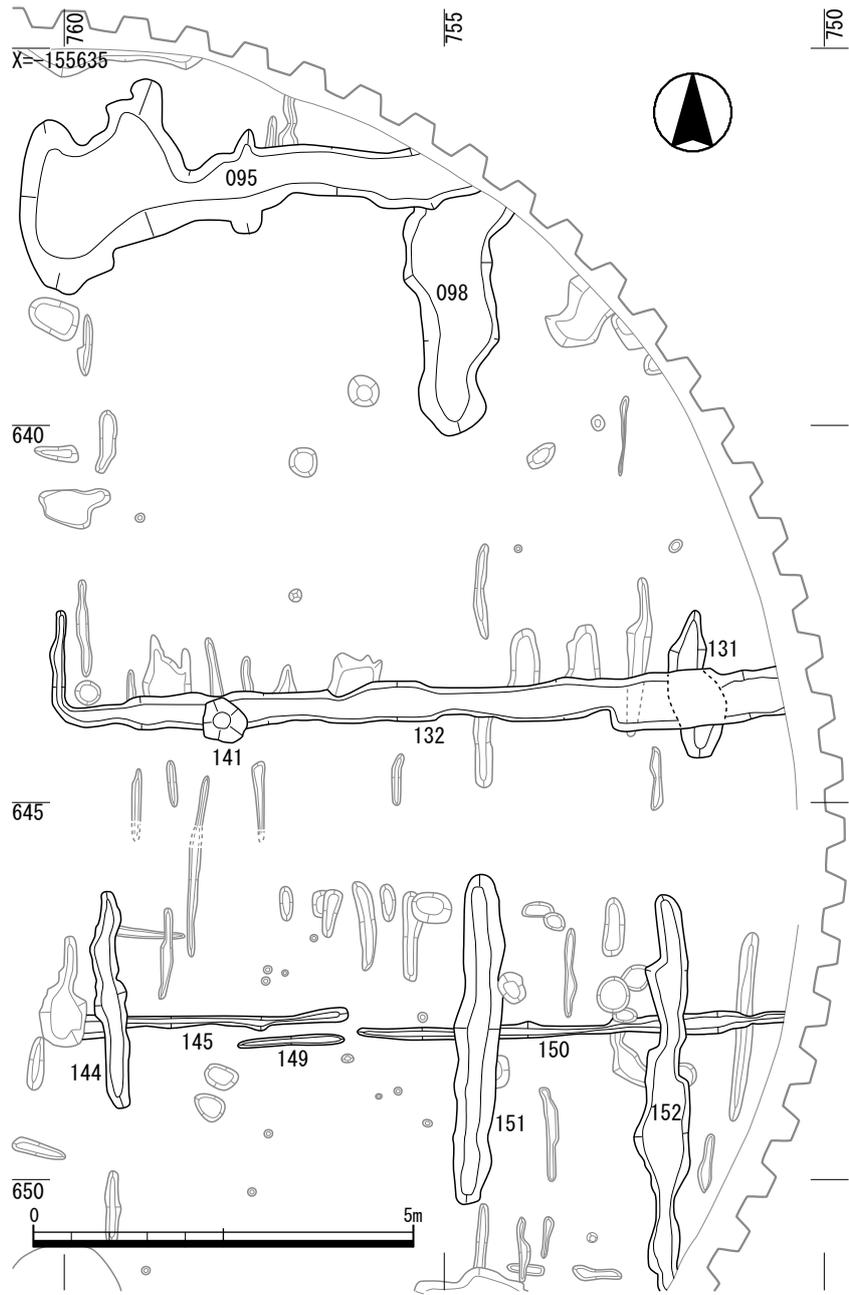


図27 溝2-095、098、131、132、144、145、149～152 遺構図 1/100

### 第3章 調査の成果

幅0.6 m、深さが0.05 m程、溝2-152は、幅0.3～0.6 m、深さ0.03 m程で、共に横断面が浅い皿状を呈している。共に南北端を検出しており、溝2-151は、延長4.3 m程、溝2-152は、延長5.3 m程を検出している。遺物は、須恵器や土師器の小片が出土しているだけである。

#### 小溝群

調査区ほぼ全域（1～4区）で検出した、幅0.1～0.25 m、深さ0.01～0.05 m程で南北方向に延びる溝で、耕作に伴うものと思われる。時期は、この面で検出した遺構の中では、最も新しく、中世後半頃のものと思われる。

#### 土坑

##### 土坑2-100、101

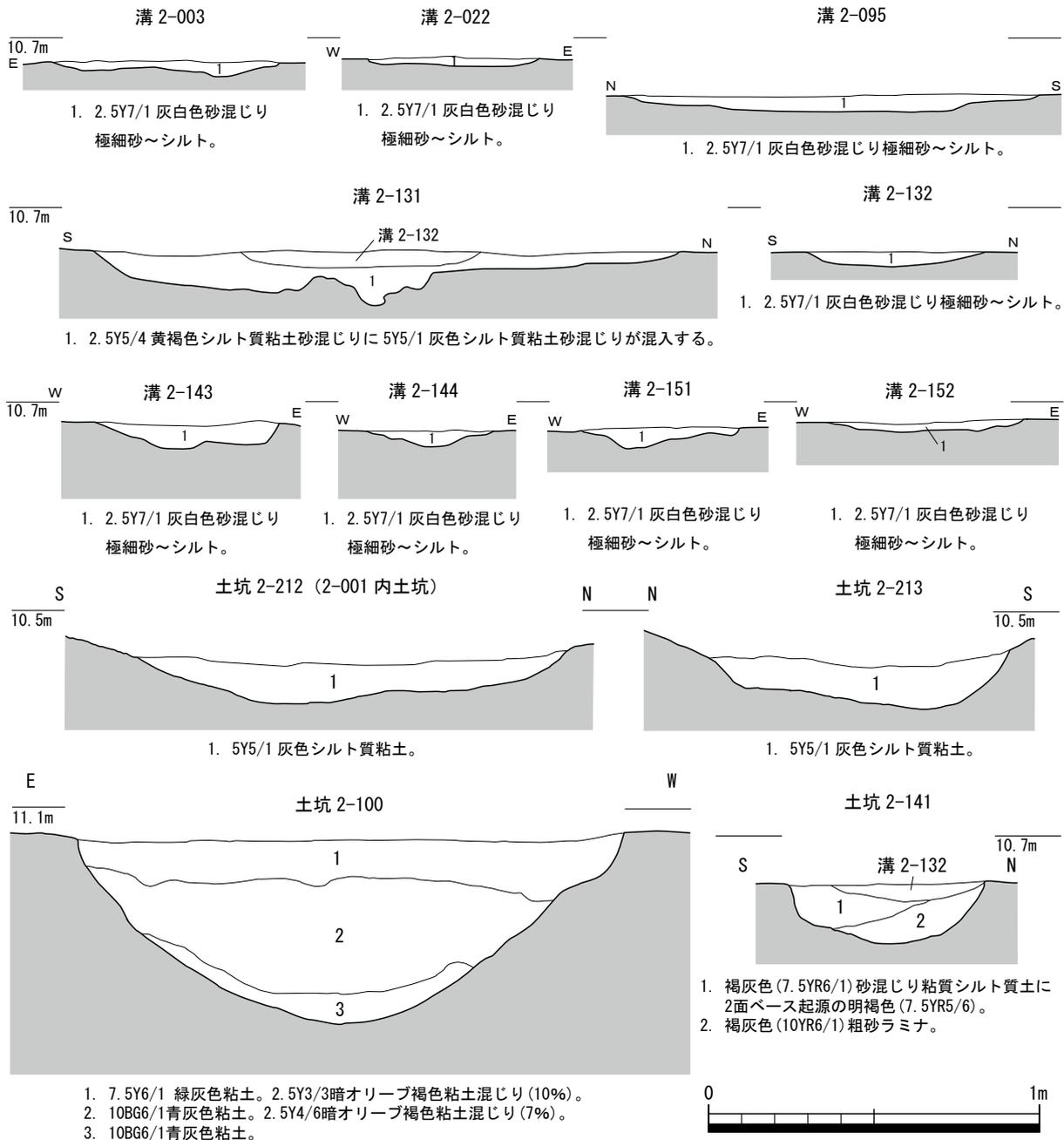


図 28 2面遺構土層断面図 1/20

土坑2-100は、調査区南部（2区）、溝2-001の北側に接して検出した。平面形は、長径1.8m、短径1.68mで、断面形は、深さ0.55mの上部が開くU字状である。埋土は3層に分層出来、最下層は暗灰色粘土が底で0.05m程の厚さに自然堆積し、その後ブロック状の土で全体の六割方を埋め戻し、最後に0.15m程を下層とは異なるブロック状の土で埋め戻しているようである。土坑の掘り方の範囲で湧水層は、認められない。遺物は、埋め戻し土から土師器、須恵器、黒色土器、須恵質瓦等の小片や、サヌカイト剥片等が出土した。土坑の開削時期は、溝2-001との関係から類推すると8世紀後半頃まで上限を考える事はできるが、その場合1世紀の間土坑が機能したことになり、無理が生じ、実際のところ決定に足る資料が無く、不明である。埋没時期は、出土した土器から平安時代後半頃と考えられる。この土坑2-100の南に近接して、土坑2-101を検出している。平面形は、径0.9mの円形で、断面形は、深さ0.55mのU字状である。埋土は、灰オリーブ色が目立つ拳大のブロック状粘土で丁寧に埋め戻されており、その廃絶状況は、土坑2-100と同様である。土坑2-101と溝2-001は切り合い関係が明瞭で、溝2-001が完全に埋没後、土坑2-101が開削されている。土坑2-101と土坑2-100の位置関係や埋め戻す行為に注目しこの2基の土坑を同時期のものと考え、

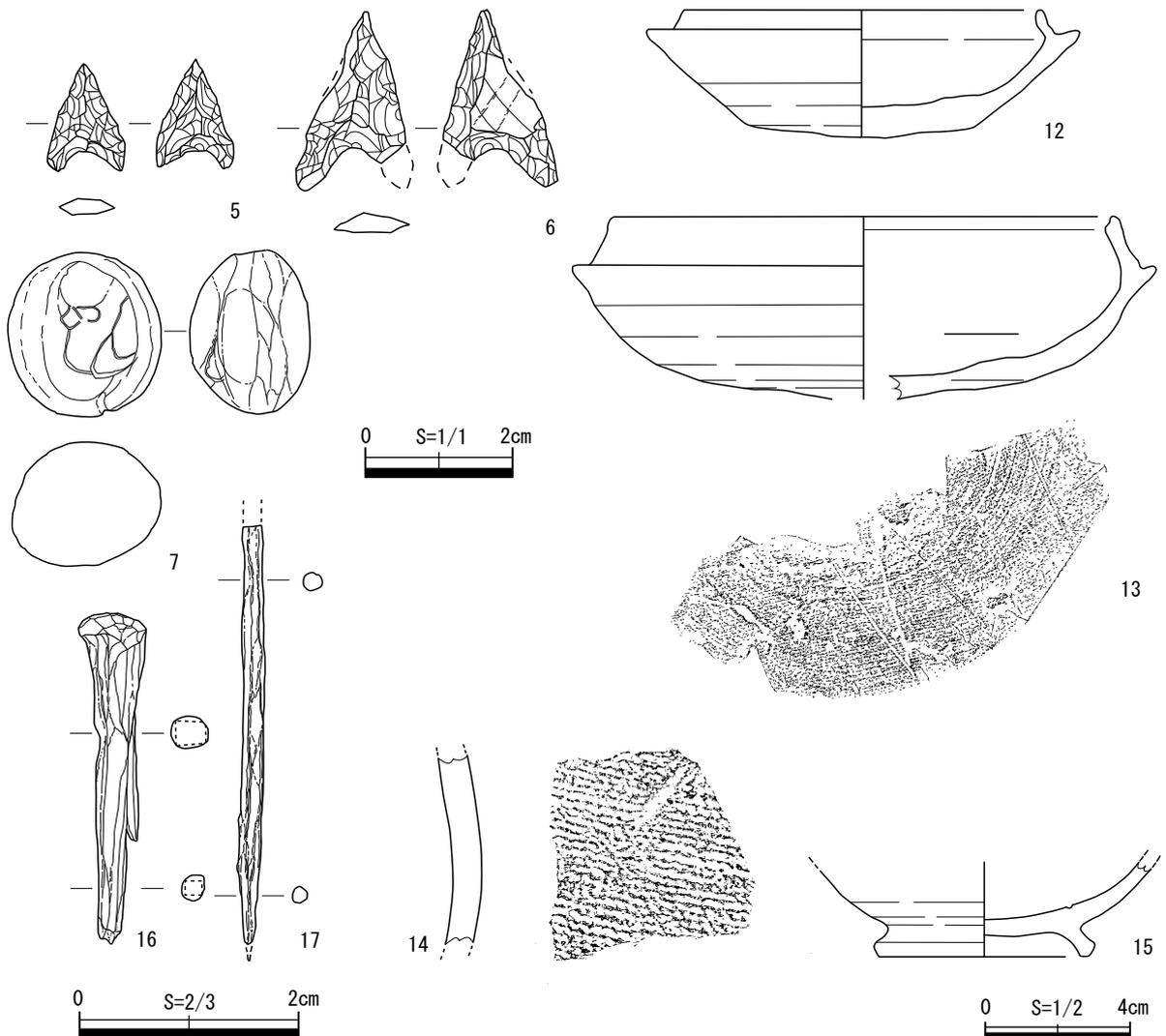


図29 2面出土遺物実測図 (1・2・5・6 S=1/4、3・4 S=2/3、7・8・9 S=1/2)

### 第3章 調査の成果

溝2-001 廃絶後の遺構と判断できる（図24）。土坑2-101からの遺物は確認していない。

#### 土坑2-141

調査区中央部南東側（1区）で検出した、長辺0.6m、短辺0.55m、深さ0.18m程の隅丸方形の土坑である。前述の溝2-132に切られており、検出時は八割方が覆われて確認できなかった。溝2-132を掘削してはじめて全容を確認できた。遺物は、土師器小型甕の胴部小片が1点出土している。

#### 土坑2-212、213、216、217

溝2-001の北西（4区）溝底で検出した4基の楕円状平面形を呈する土坑である。溝幅が広がっている部分の延長8mほどの範囲に溝底に並んで検出した。北西側の2基は相対的にやや大きく、土坑2-212は、やや歪ではあるが平面形は楕円状で、最大幅1.4m、長さ2.5m、深さ0.17m、土坑2-213は、平面形は長楕円状で、最大幅1m、長さ1.8m、深さ0.1mである。また、この2基の土坑の掘り方には、切り合いがあり、土坑2-213の後に土坑2-212が掘られている。これに対して、南東側の2基はやや小さく、土坑2-216は、平面形は楕円状で、最大幅0.7m、長さ1m、深さ0.04m、土坑2-217の平面形は隅丸方形の楕円で、最大幅0.75m、長さ0.95m、深さ0.03mである。4基の土坑は全て底部は平坦で、ベースである灰色シルト質粘土と茶褐色粘土がブロック状に混ざった埋土である（図24）。遺物は出土していない。

#### （2）遺物

12・13は、共に溝2-001の溝埋土1層（灰褐色シルト質粘土層）から出土している。12は、7世紀後半の須恵器坏身である。13は、5世紀後半の須恵器坏の身である。16は、溝2-131から出土した鉄釘で、古墳時代の棺釘と思われる。14・15・17は共に②層出土である。12は、棒状鉄製品で、古墳時代の鉄鏃の茎と思われる。14は、縄蓆紋タタキを施された須恵質土器の体部片で、内面はナデで仕上げている。15は、緑釉陶器高台付埴の底部片である。中世頃の堆積であるため、釉薬は殆ど剥落してしまっているが、薄黄緑色の釉薬が僅かに遺存している。8世紀後半から9世紀前半のものと思われる。他に②・③層から縄文から弥生時代の石器が出土している。5は、溝2-132から出土した縄文時代の石鏃である。形状及び風化の度合いから、早・前期のものと思われる。6も縄文時代の石鏃である。形状及び風化の度合いから、中・後期のものと思われる。7は、石製投弾である。現在縄文時代の例は確認されていないので、弥生時代の遺物としておく。なお、2・3・4・5は、今回の調査でも検出した古墳時代中期を中心とする長原古墳群に伴う遺物である可能性が高いと考えている。29は①層から出土し、付着物が顕著な須恵器瓶子底部片である。時期は、底部外面が無調整であることから9世紀頃と考える（図29・33）。

## 第8節 1面（中世末～近世初）

1面の調査は、立坑本体の1～4及び5・6区で実施した。立坑建設用地の造成時の盛土（NG0層）及び耕作土（NG1層）を除去して、T.P10.75～.8m付近で検出した遺構面である。灰黄色を呈する粘土と砂と土の混合土層である基本層序の「①層」上層をベースとしているが、場所によっては、造成時の攪乱によると思われるが、この①層が消失し、②層が露出した部分も認められた。3区～6区

での遺構検出状況が良くないのは、こうした事情によるものと思われる。1区・2区に比べて。周辺の調査では、中世から近世頃の坪境として報告されている溝や大型畦畔、その他耕作に伴う小溝群等を検出している。今回の調査でも同様の遺構群を検出した。大阪市で報告されているNG 2～3層に相当する遺構面と考えている（図30・図版12・13）。

（1）遺構

溝

溝 1 - 009

調査区中央やや東寄りで検出した南北方向の溝である。後述する他の南北方向の小溝群に比べて、幅も広く、深く掘削された溝である。規模は幅0.4m、深さ0.3m程で、底部の堆積はやや砂質で遺

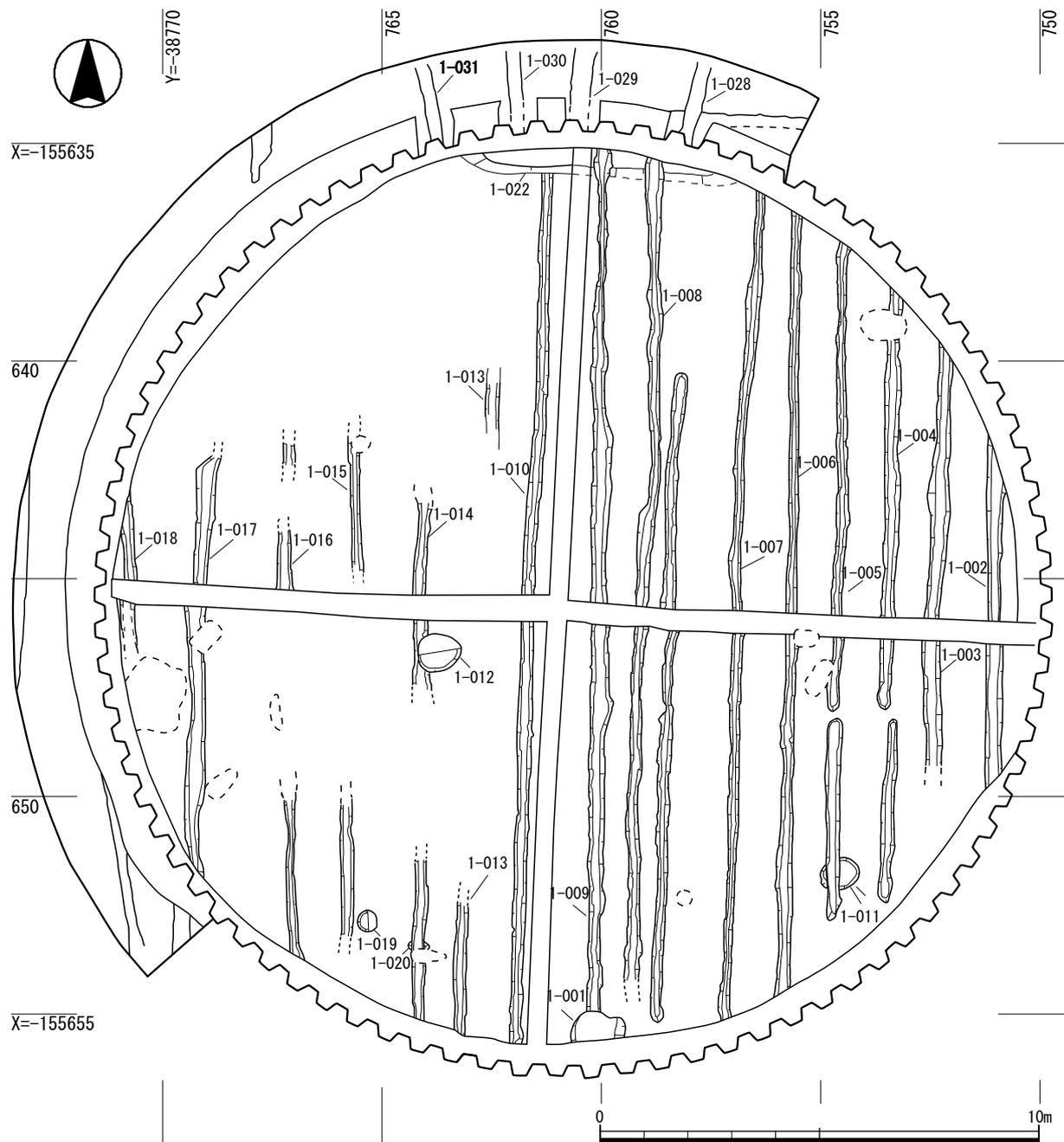


図30 1面（1～4、6区）遺構図 1/150

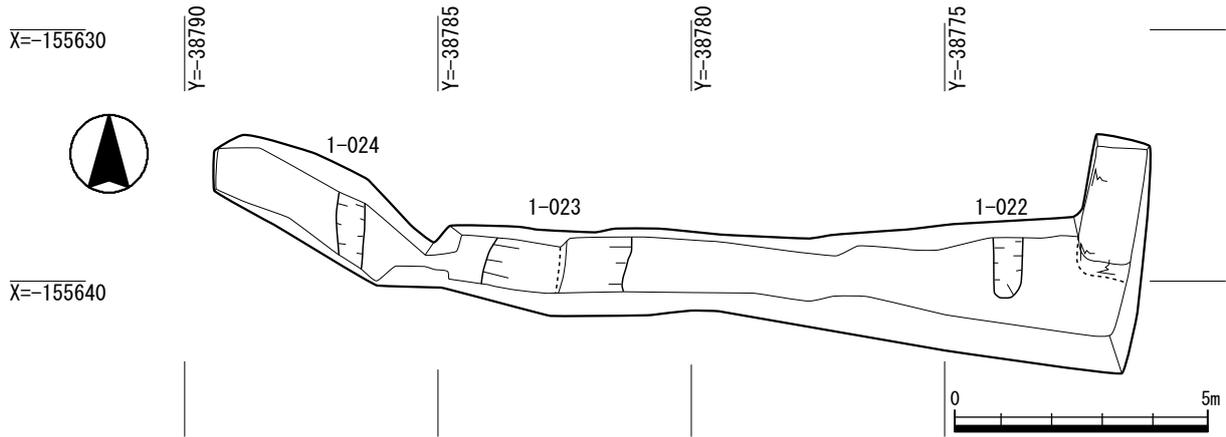


図31 1面(5区)遺構配置図 1/150

物を含んでおらず、用水の機能が推定できる。また、溝内堆積の最終段階で、磁器塚の高台片などの遺物が含まれていたことから、意図的に廃絶された可能性が考えられる(図版14-18・19)。

溝1-023

5区の中央やや西寄りで見出した幅2.6m程の南北溝である。第1章で述べたように工事による遺構への影響から遺構検出のみで調査を終了し、遺構の掘削は行っていない。そのため深さなどの詳細は不明であるが、1面で検出される溝としては、比較的幅が広いことから、水路としての機能をもつものであるだろう。

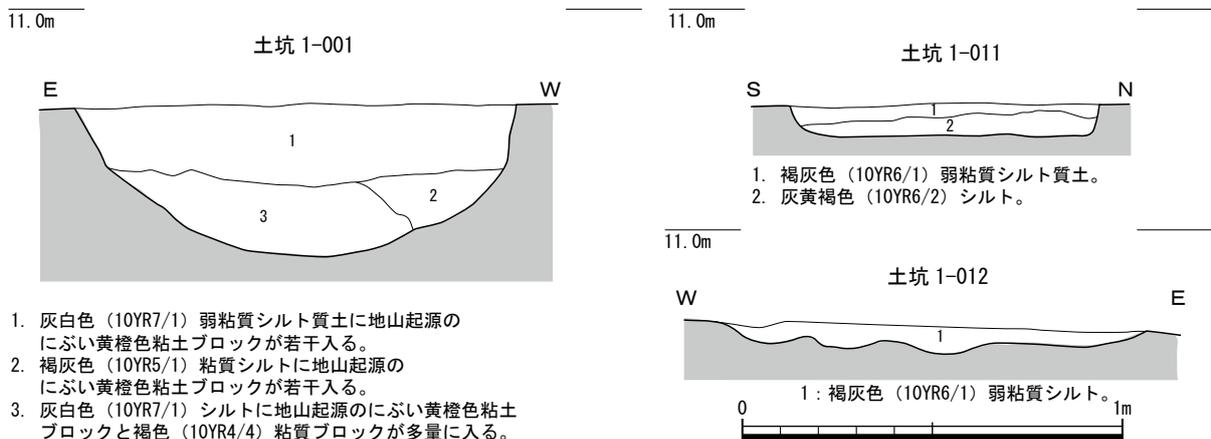
小溝群(溝1-002~008, 010, 013~018, 028~031)

調査区全域で見出した南北方向の溝である。幅は0.2m~0.4m程で、深さは数cmの浅いものである。調査区東半分の遺存状況が良好であるのに対し、西側の状況が良くないのは、当該地の盛土造成時工事で使用された重機による攪乱に起因したものである。小溝は1m前後の間隔で平行して検出しており、畝間の底付近が遺存したものと考えている。

高まり

高まり1-022

調査区北端部で見出した東西方向の高まりである。検出当初は、周辺の調査で確認されている埋没小古墳の一部かと考えられたが、高まりの盛土が全て中世以降のものであることが判明したため、幅1.5



1. 灰白色(10YR7/1)弱粘質シルト質土に地山起源の  
にぶい黄橙色粘土ブロックが若干入る。
2. 褐灰色(10YR5/1)粘質シルトに地山起源の  
にぶい黄橙色粘土ブロックが若干入る。
3. 灰白色(10YR7/1)シルトに地山起源のにぶい黄橙色粘土  
ブロックと褐色(10YR4/4)粘質ブロックが多量に入る。

図32 土坑1-001, 011, 012断面土層図 1/20

m程度の比較的大きな畦畔と考えている。この高まりの北と南側では、小溝の検出状況が異なることから、周辺の調査で確認されている、中・近世の条里型地割の坪境畦畔の残欠と考えている。

### 土坑

#### 土坑 1-001

調査区南端部で検出した土坑である。平面形は、1.15 m×1 mの隅丸形状を呈し、断面形は、深さ0.4 mで半球状を呈する。の方向の高まりである。土坑内の堆積は上下2層に分層出来、下層は卵大の角張ったブロック状粘土塊を含んでおり、上層も角張ったブロック塊を含んで、共に埋め戻されたものと考えられる。上層のブロック塊は、下層のものに比べて細くなっており、土坑の上半分をより丁寧に埋め戻したものと思われる。溝1-009を切っていて、1面の時期の下限を示す遺構である。遺物は土師器、瓦器、染付けの小片が出土している。

#### 土坑 1-011

調査区南端部で検出した土坑である。平面形は、1.15 m×0.8 mの楕円形を呈し、断面形は、深さ0.15 mで皿状を呈する。土坑内の堆積は上下2層に分層出来、2段階で埋め戻されていると思われる。溝1-005に切られていて、1面の時期の上限を示す遺構である。遺物はツバ甕を含む土師器の小片が出土している。

#### 土坑 1-012

調査区中央西寄りで検出した土坑である。平面形は、1 m×0.85 mの楕円形を呈し、断面形は、深さ0.03 mで浅い皿状を呈する。土坑1-011の上層と同じ土質で埋まっていた。溝1-014を切っていて、土坑1-001と同様に1面の時期の下限を示す遺構である。遺物は出土していない。

#### 土坑 1-019

調査区南端部西よりで検出した小型土坑である。平面形は、0.5 m×0.25 mの楕円形を呈し、断面形は、深さ0.1 mでU字状を呈する。土坑内の堆積は上下2層に分層出来、上層はブロック塊を多く含み、埋め戻されたと思われる。遺物は出土していない。

#### 土坑 1-020

調査区南端部西よりで検出した小型土坑である。平面形は、0.45 m×0.45 mの隅丸形状を呈し、断面形は、深さ0.12 mでU字状を呈する。土坑内の堆積は上下2層に分層出来る。溝1-014を切っていて、土坑1-001、012と同様に1面の時期の下限を示す遺構である。遺物は出土していない。

### (2) 遺物

盛土及び現耕作土（床土を含む）を機会掘削すると1面が露出状態であったため、所謂遺物包含層は、遺存していない。そのため、この遺構面で出土した遺構以外からの出土遺物は、遺構面精査（遺構検出）時のものであり、状況から溝1-009及び小溝群に伴うものである可能性が高い。また、出土遺物は、全てと云えるほど数cm四方の小片である。これは耕作によるものと考えている。図版14の9・10はサヌカイト片で弥生時代のものであろう。図版15の18は埴、19は徳利で共に18世紀中頃の波佐見窯産である。23は円筒埴輪のタガ部分片で、2～4・6区2面で報告した鉄器や円筒埴輪片同様に長原古埴群に伴うものであろう。

## 第9節 須恵器瓶子付着物の赤外分光分析

(1) はじめに

立坑本体部の調査(1区)において、1面(中世末~近世)のベース層である①層から、オリーブ黒色の付着物が付着した平安時代前期(9世紀頃)の須恵器瓶子と思われる底部破片が出土した。このオリーブ黒色付着物は、瓶子の底部内面から破断面にかけて認められ、須恵器瓶子を容器としていた内容物が付着して遺存したと思われることから、この付着物が当時貴重な漆等の樹脂である可能性が高いので、付着物を同定することを目的として赤外分光分析を行った(図35)。

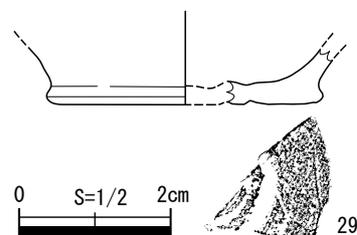


図33 付着物が認められる須恵器  
(①層出土 S=1/2)

(2) 試料と方法

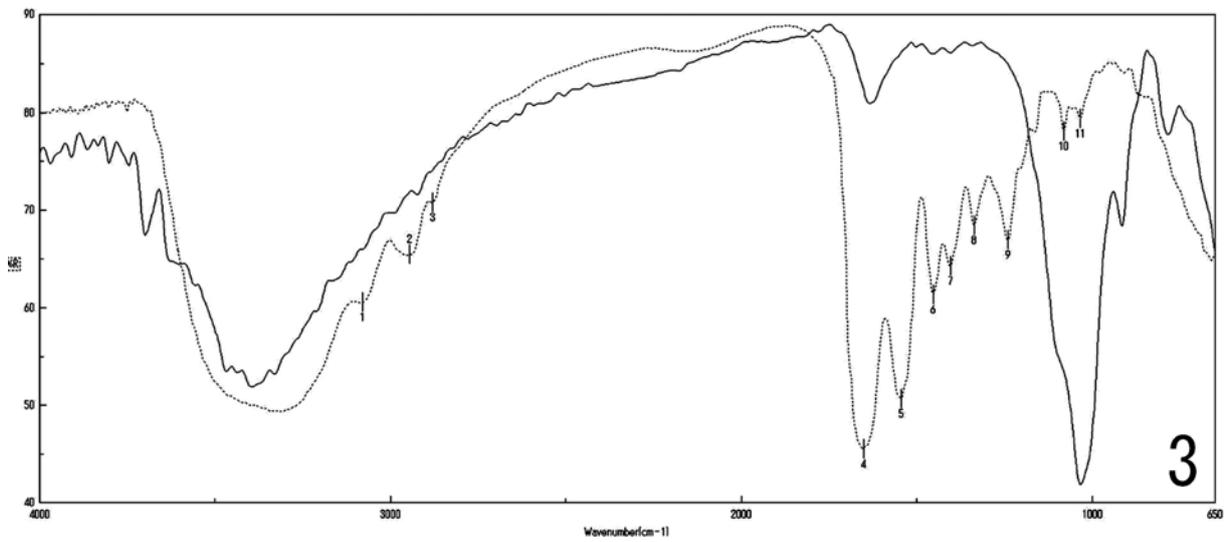
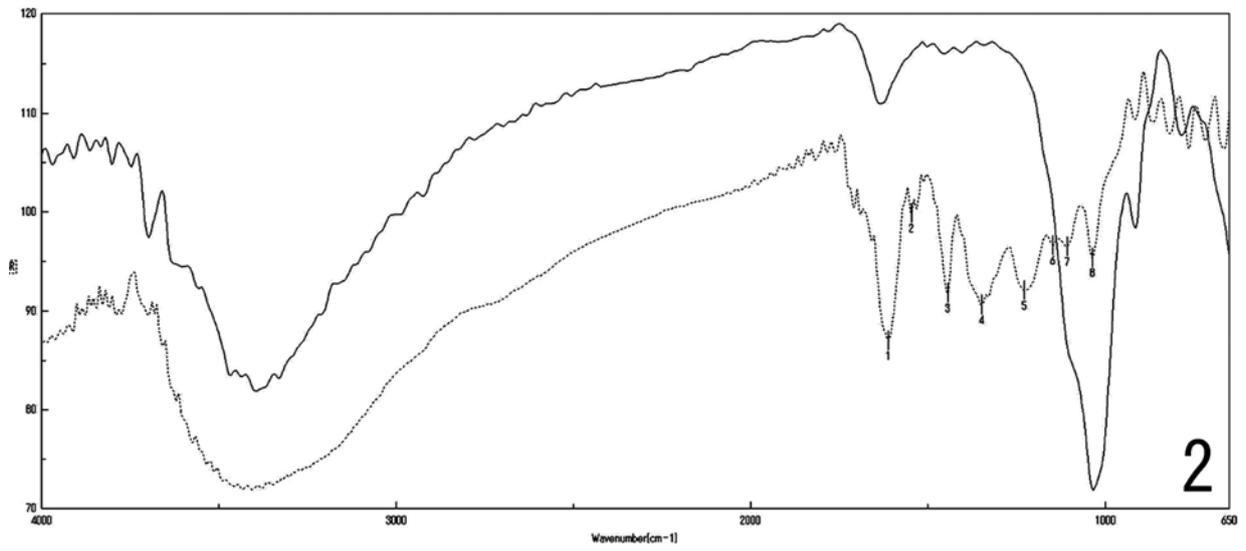
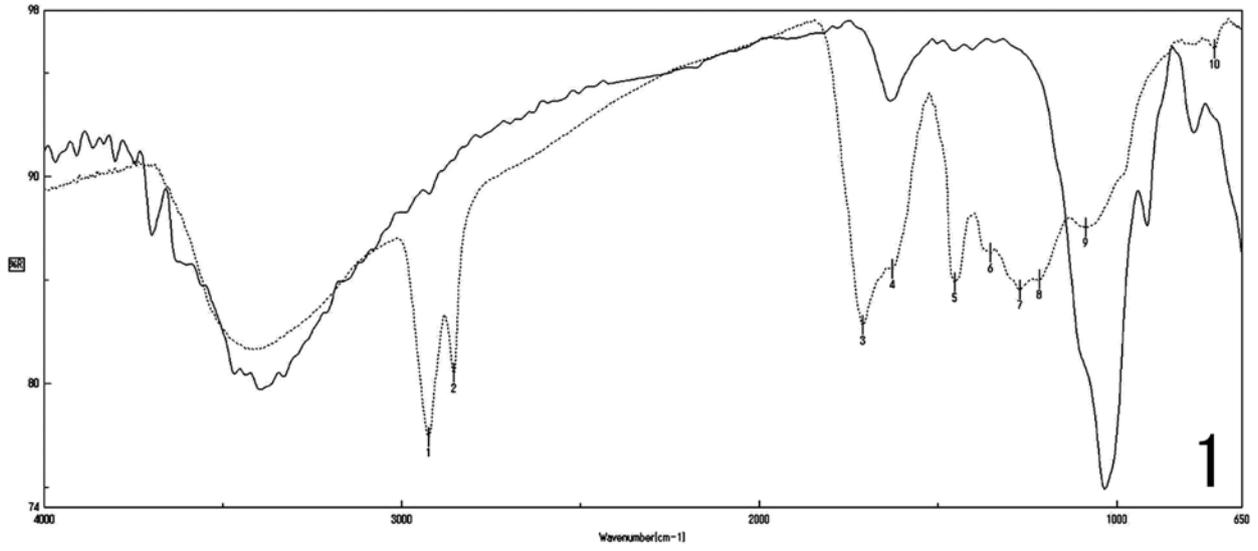
試料は、瓶子底部内面に付着したオリーブ黒色の付着物である(表1、図版15)。分析した付着物は、鉱物粒子からなる夾雑物を含むオリーブ黒色の付着物である。付着物は、光沢のないオリーブ黒色を呈し、やや明褐色の部分も見られる(図版16-2a・2b)。なお、外面には付着物は見られない。試料は、付着物から手術用メスを用いて試料を薄く削り取った後、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株)製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

表1 赤外分光分析を行った試料とその詳細

分析No.	分析試料	遺物	層位	時期	備考
1	黒色付着物 (オリーブ黒色5Y3/2)	須恵器 (瓶子:登録番号033)	第1層 (1面ベース面)	8世紀(奈良時代後期)	内面および破断面に付着 (鉱物等の夾雑物含む)

表2 基本試料の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		柿渋		膠		アスファルト	
	位置	強度	位置	強度	位置	強度	位置	強度
1	2925.48	28.5337	1612.20	86.9729	3079.76	60.5550	2951.52	37.7132
2	2854.13	36.2174	1546.63	99.8586	2944.77	65.4311	2923.56	13.4033
3	1710.55	42.0346	1444.42	91.8189	2879.20	70.8008	2852.20	34.2277
4	1633.41	48.8327	1348.00	90.6152	1652.70	45.5335	1698.02	90.4396
5	1454.06	47.1946	1228.43	92.0935	1544.70	50.7051	1603.52	88.0516
6	1351.86	50.8030	1147.44	96.6413	1454.06	61.3410	1461.78	64.2322
7	1270.86	46.3336	1106.94	96.5132	1403.92	64.2755	1376.93	77.0079
8	1218.79	47.5362	1035.59	95.3807	1336.43	68.4400	1030.77	90.0588
9	1087.66	53.8428	-	-	1240.00	66.9414	811.88	90.8315
10	727.03	75.3890	-	-	1081.87	78.0923	725.10	91.1479
11	-	-	-	-	1033.66	79.4135	-	-



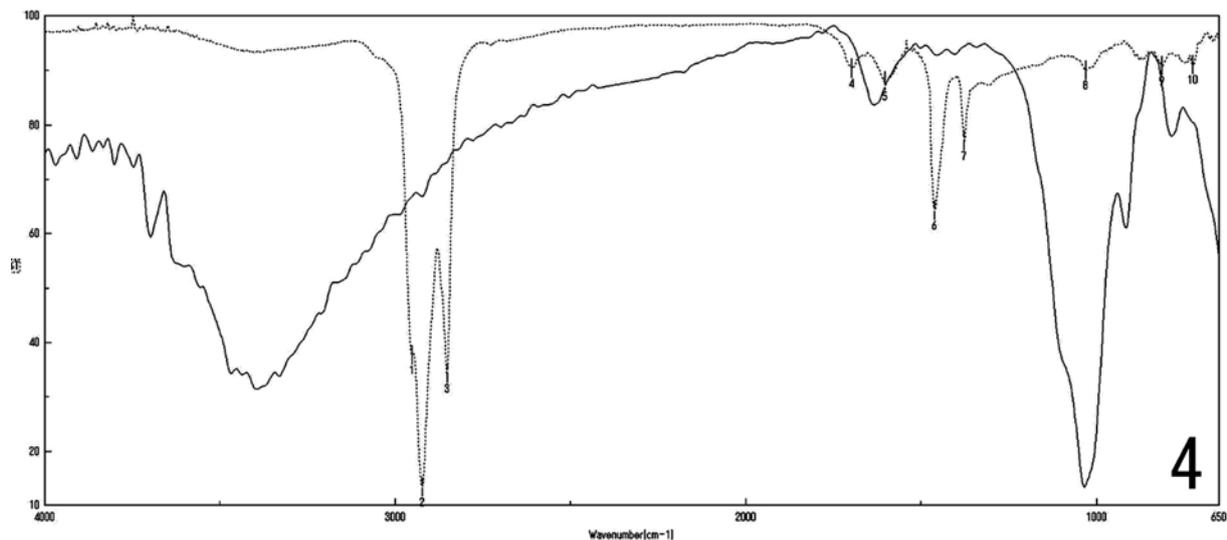


図 34 オリーブ黒色付着物および基本資料と赤外線分光分析スペクトル図

(実線：付着物、点線：基本資料、番号は吸収位置)

1. 付着物と生漆 2. 付着物と柿渋 3. 付着物と膠 4. 付着物とアスファルト

### (3) 結果および考察

以下に、底部付着物の赤外分光分析結果について述べる。なお、赤外吸収スペクトル図は、縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber (cm<sup>-1</sup>);カイザー)を示す。また、スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は主な生漆、柿渋、膠、アスファルトの各赤外吸収位置(表2)を示す。

付着物の赤外分光分析では、CH基に由来する2927 (cm<sup>-1</sup>)、2858 (cm<sup>-1</sup>)の吸収が僅かである。よって、本来の有機物の成分はなく、炭化あるいは劣化により無機物化したと考えられる。なお、生漆などが劣化した際に見られるゴム質の吸収が明瞭に見られたことから、漆の可能性はある。ただし、ウルシオール(No. 6～No. 8)の吸収(No. 6～No. 8)は認められなかった。また、柿渋や膠あるいはアスファルトなどに見られる吸収も見られなかった(図34-1～4)。

以上の赤外分光分析の結果から、この付着物は漆などの有機物が炭化あるいは劣化したものと考えられ、本来の有機物としての成分は検出されなかった。なお、漆の劣化に伴って良く見られるゴム質の吸収が顕著に見られるため、漆の可能性も考えられる。このオリーブ黒色の付着物は、明らかに付着して残存することから、劣化に対して強い物質と考えられ、漆やアスファルトであった可能性がある。

### (4) おわりに

長原遺跡の調査において検出された須恵器瓶子の底部内面のオリーブ黒色の付着物について赤外分光分析を行った。その結果、この付着物は漆などの有機物が炭化あるいは劣化したものと考えられ、本来の有機物としての成分は検出されなかった。なお、漆の劣化に伴って良く見られるゴム質の吸収が顕著に見られるため、漆の可能性も考えられた。

## 第4章 まとめ

### (1) 旧石器・縄紋時代～弥生時代(3～7面)

7～4面は、第2～5節で報告したように、旧石器時代から弥生時代中期までの遺構面と推定している。これら4つの遺構面の時期については、周辺の調査では遺構・遺物が確認されているが、今回の調査地においては遺構は検出したものの、遺物が出土しなかった。そのため各遺構面の時期については、周辺の調査で確認されている土層と、今回の調査で確認した土層を比較し、検出した各遺構面の時期を長原遺跡の基本層序から類推している。このような調査成果から、今回の調査地付近は、旧石器時代から弥生時代中期においては、長原地域に居住する人々の日常生活圏ではなく、活動圏の一角と考えている(図35)。

3面では、方形及び五角形の平面形に溝が廻る遺構や、方形の浅い土坑を検出している。今回の調査地南東30mの地点で弥生時代中期後半の大型方形周溝墓2基(SX801・SX802)が確認されており、調査当初は平面形から、規模は小型であるが、同様に弥生時代の墓である可能性を考えたが、調査結果からは第6節で報告したように墓とは考え難く、遺構の性格としては不明であるので「周溝遺構」

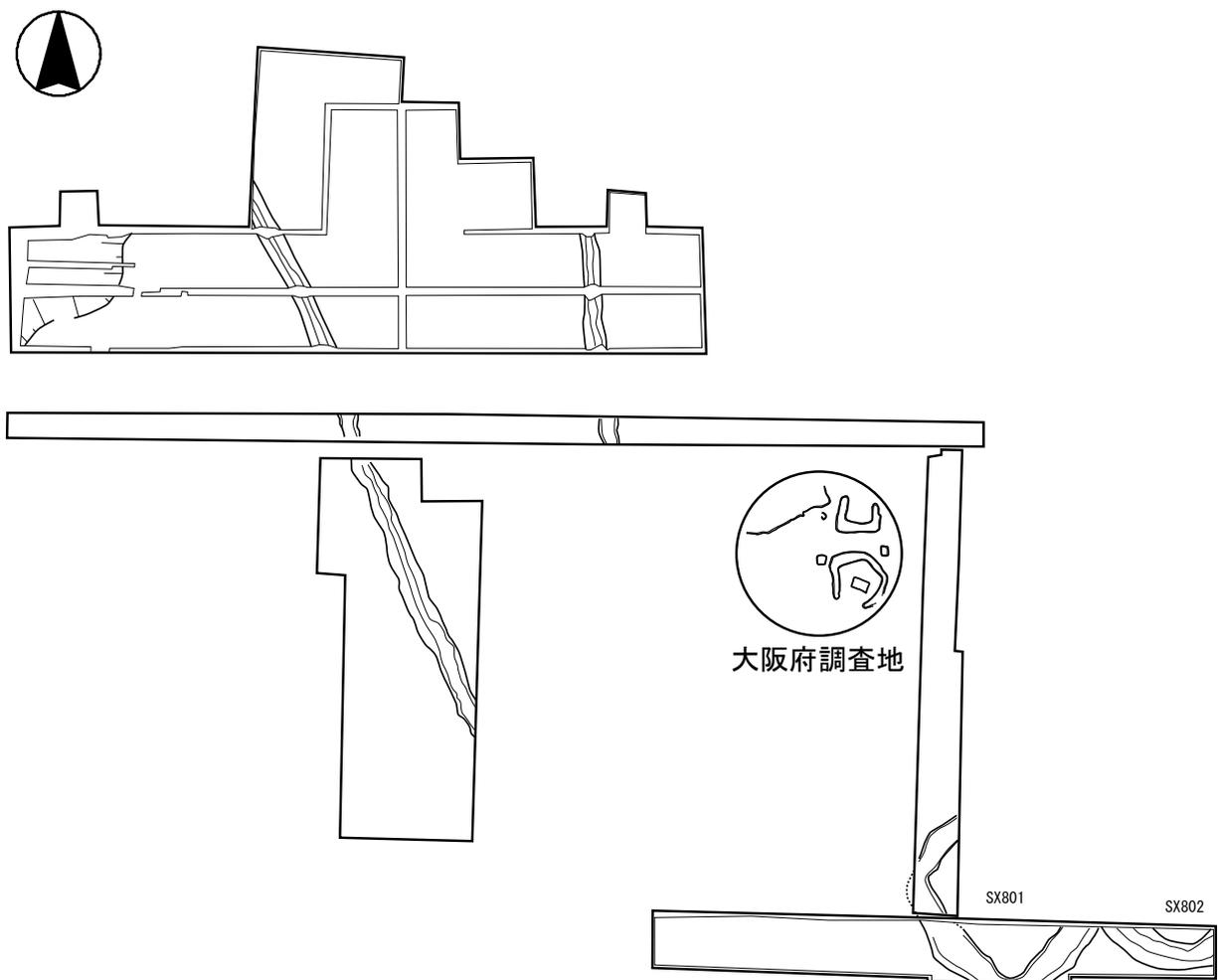


図35 旧石器・縄紋時代～弥生時代 調査地周辺の主要検出遺構

#### 第4章 まとめ

としている。

また、遺物が遺構に伴って出土しているが、第3節の遺物で報告したように、縄文時代のものと考えられる（図18）。周辺の調査からすると縄文時代の生活痕跡が検出されているのは6面であるから、もともとは6面に伴うべき遺物が弥生時代の遺構面である3面において、何某かの事情により再堆積したものであろう。

#### (2) 古墳時代～古代（2面）

次に2面検出遺構であるが、この遺構面では第7節で報告したように、古墳時代から中世に至る長期間の遺構を検出している（図36）。当然のこととして2面がそのような長期間生活面であり続けた結果とは考えられない。ではなぜそのような検出状況となったかである。周辺の既往の調査成果等から推察すると、長原古墳群築造が終焉し始める古墳時代後期の6世紀後半頃から、瓜破台地の一角に位置する今回の調査地周辺でも北流する溝跡（SD701・702・708・713・720～722）が多数検出されており、水路の整備がこの頃から始められているようである。

弥生時代～古墳時代後期以前の居住域や農業などの生産活動等が、台地北側に広がる沖積平野部（低地部）を中心に行われていたものが、台地上へと拡大を始めたものと思われる。開発の状況は、古墳

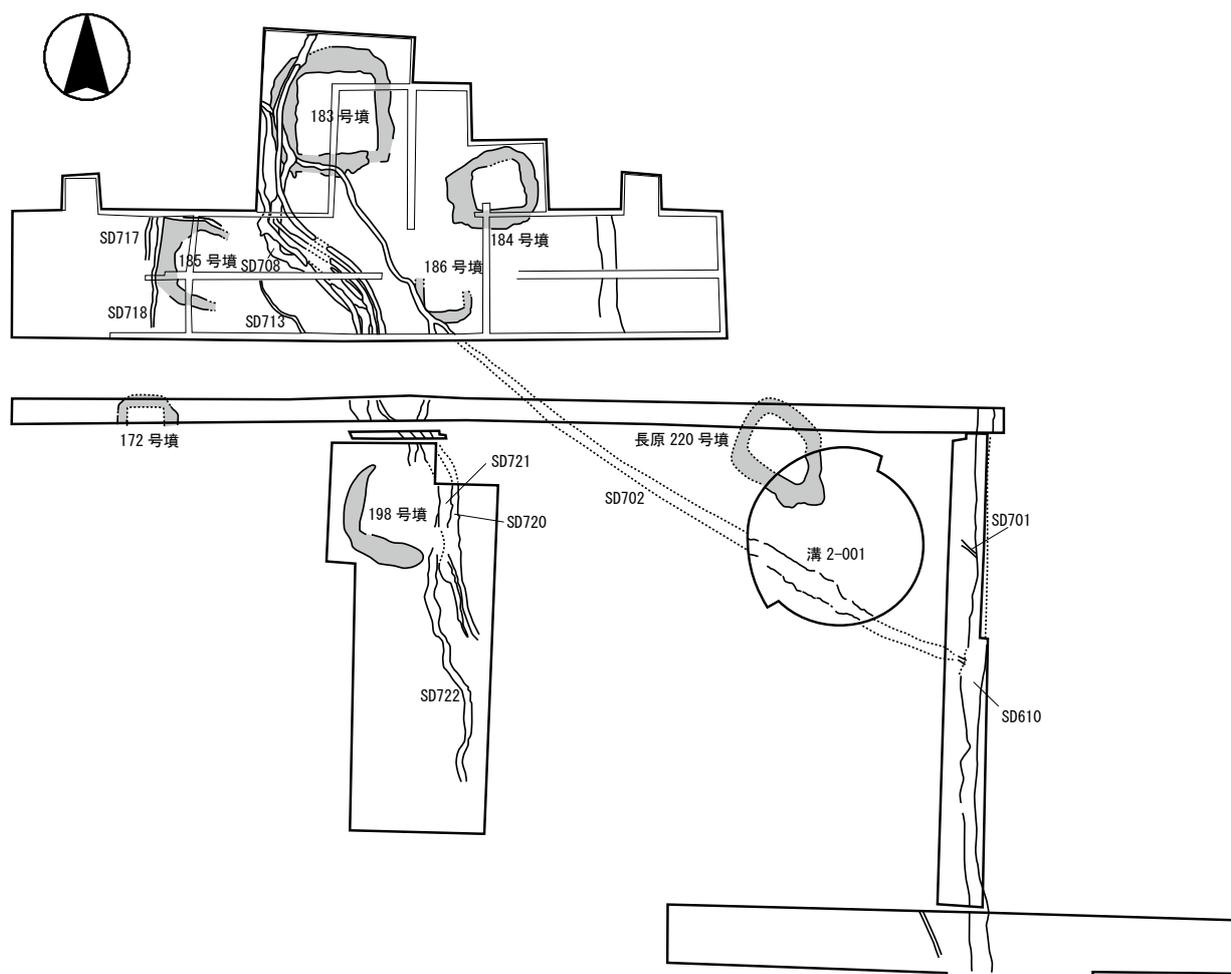


図36 古墳時代～古代 調査地周辺の主要検出遺構

時代後期～飛鳥時代は地形に沿った不定形なもので、古墳等も避けて行われていたようである。それが奈良時代後期～平安時代になると、半町～一町間隔で平行する南北溝（SD704・717・718）が確認され、条里型地割りが想定されているように、この頃から開発が大規模になり比較的大きな削平等が行われ始めたのではないかと考えている。

このような削平を伴う開発は、近世初頭の大和川付け替え工事の頃（1面）に一応の完成を見たと思われる。この様に幾度となく削平された結果2面の様な検出状況となったと考えている。

2面で最も古い遺構は1・6区で検出した溝2-002を周溝、墳丘2-220の小型方墳である。長原古墳群の分布範囲としては南東端に位置する今回の調査地周辺では、古墳時代中期頃の小型方墳が6基（172・183～186・198号墳）確認されており、7基目である。この7基の小型方墳は、一つの支群を構成すると思われる。今回の調査時点では、大阪市の調査で219基の古墳が確認されており220番目の古墳である。

古墳より少し時代が下る遺構として、2・4区で検出した7世紀頃に機能していたと思われる溝2-001がある。大阪市の調査で報告されているSD-702と考えていると第7節で報告しているが、今回の調査成果からみると形状や埋没状況から農業用水路とは性格が異なり、集落等に伴う可能性が指摘できる。次に時代が下る遺構として、土坑2-141がある。時期は平安時代頃を推定している。

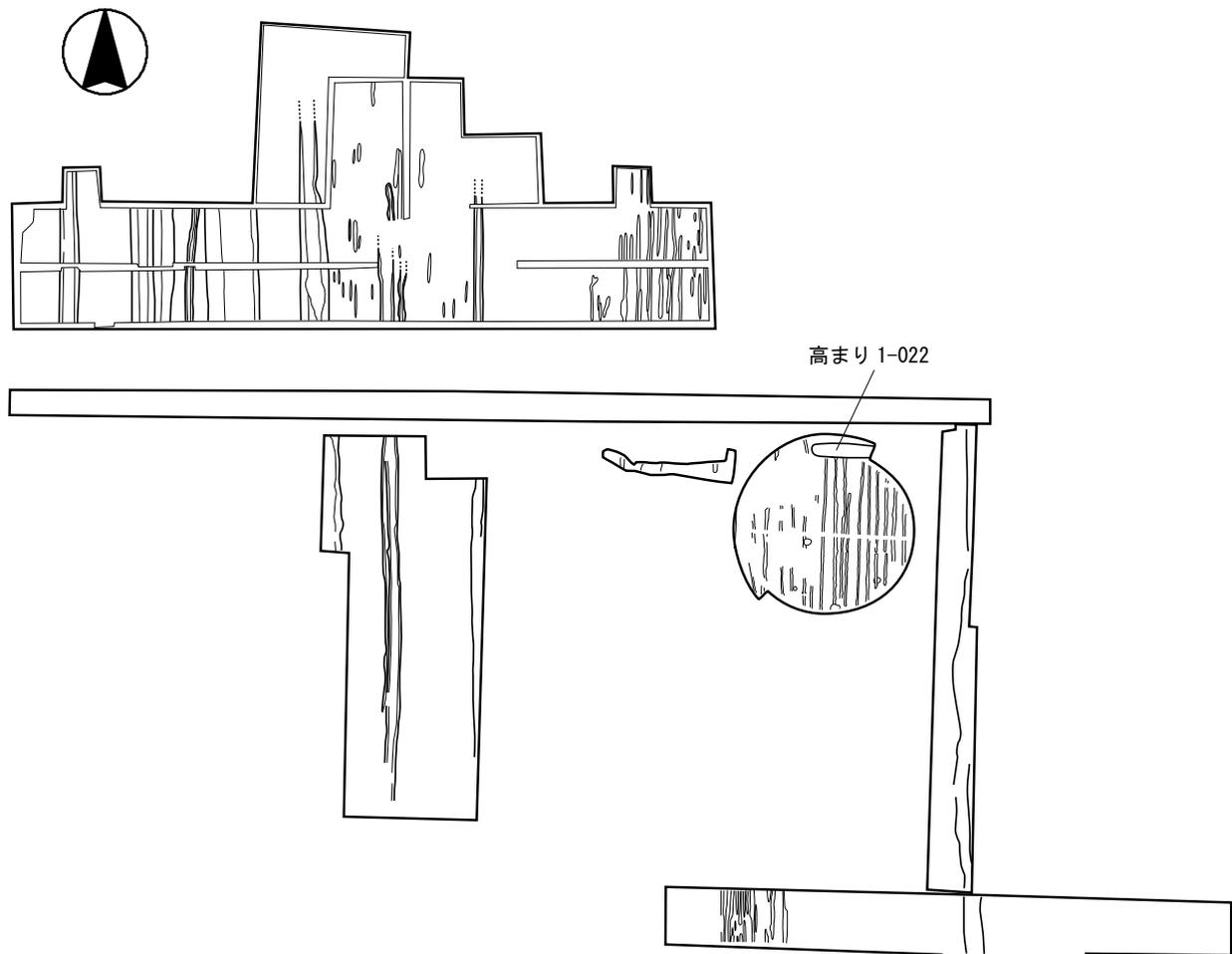


図 37 中世～近世 調査地周辺の主要検出遺構

## 第4章 まとめ

この土坑を切って掘削されている溝2-132等の方位に合う溝があり、土坑2-100・101等と共に中世前半頃の集落等に伴う可能性が指摘できる。そして、前述の溝同様に方位に合う浅く細い溝群がある。これがこの遺構面における切り合い関係では、もっとも後出の遺構である。耕作に伴うもので、中世後半頃のものであろう。

以上のように検出した遺構を分類すると4時期に分類可能であるが、各遺構の遺存や遺物の包含状況から、分類し難い遺構が大半である。ただしこの4時期に分類可能であることが、第7節のはじめで述べたNG4～7面に相当すると考える所以である。また、この2面の遺物で報告した2～5の古墳由来と考えられるものや縄文・弥生時代の遺物が出土している点は、前述した開発事情を傍証するものと思われる。

### (3) 中世～近世(1面)

最後に1面検出の溝群であるが、前述した大和川付け替え後のものと考えている(図37)。高まり1-022は検出状況が良好ではないが、東西方向の大型畦畔のような高まりとも考えられるもので、坪境の一部である可能性が指摘できる。大和川付け替え後の近世条里地割型を検出したと考えている。

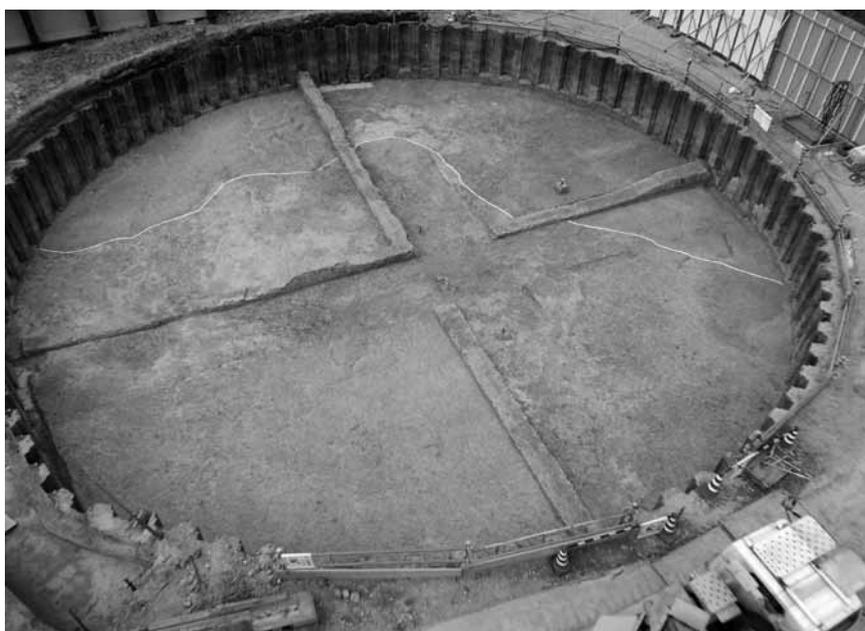


# 図 版

1 面検出作業状況



1  
7面1～4区  
遺構完掘状況  
(南から)

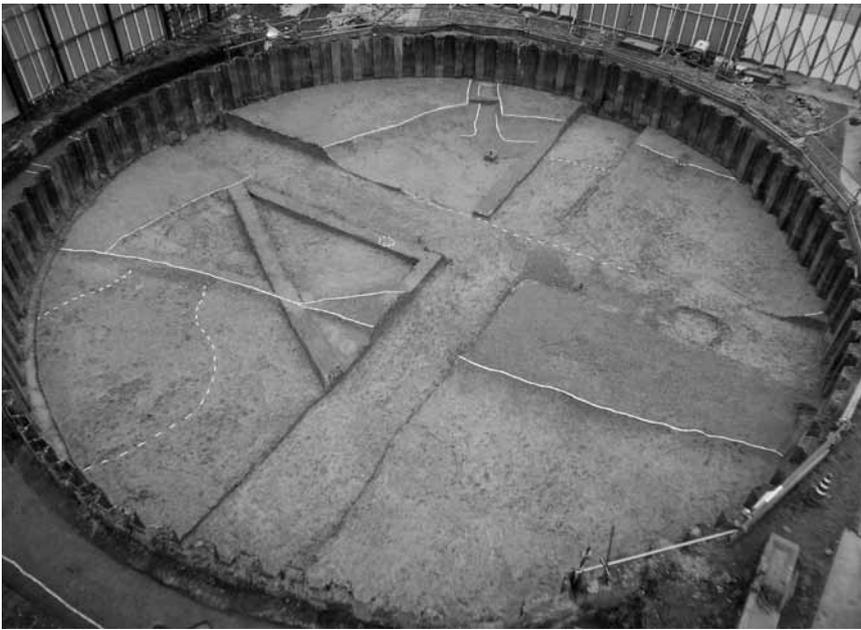


2  
6面1～4区  
遺構検出状況  
(南から)

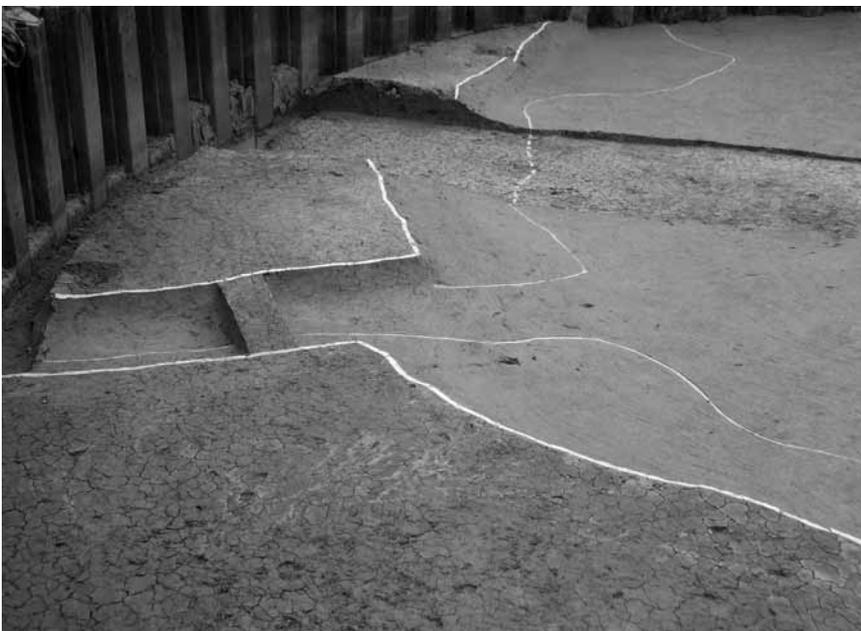


3  
6面1～4区  
遺構完掘状況  
(手前：落ち込み6-001)  
(南西から)





4  
6面1～4区  
遺構完掘状況  
(手前：落ち込み6-001)  
(南西から)



5  
6面1・2区  
溝6-002・003合流部  
(北から)

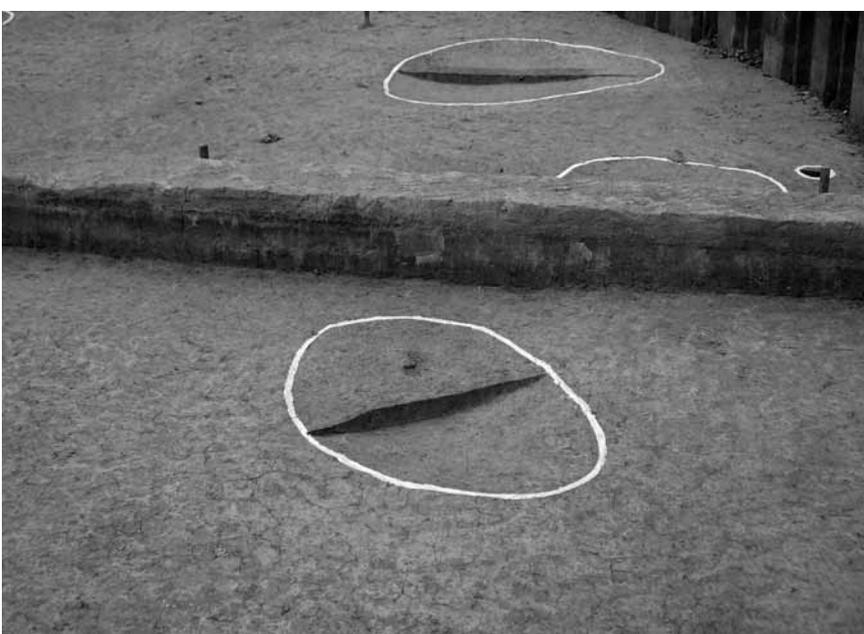


6  
6面2区  
溝6-003炭片集中部検出状況  
(南東から)

7  
5面1～4区  
遺構完掘状況  
（南東から）



8  
5面1・2区  
（手前から）土坑5-005、001、  
002  
（南から）

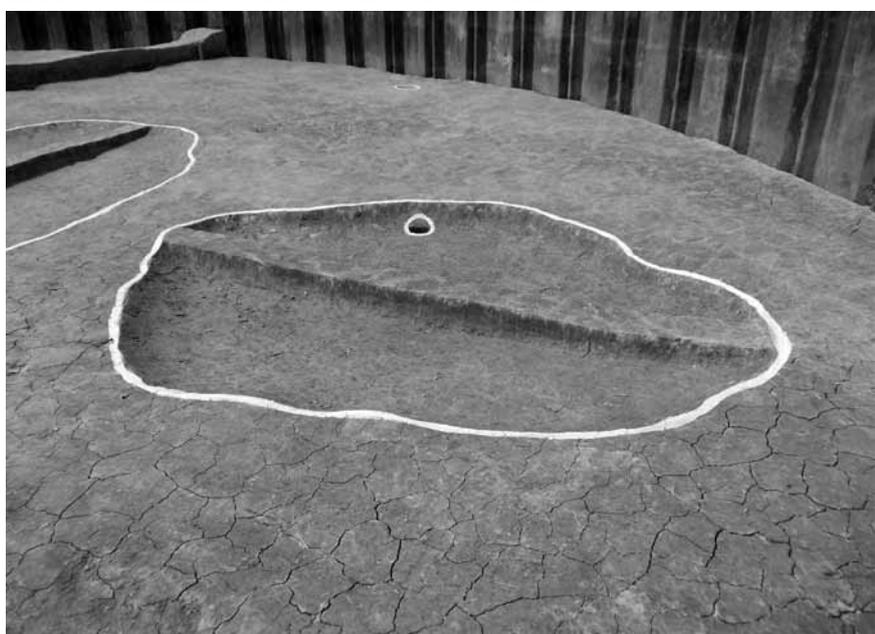


9  
5面1区  
土坑5-004・010  
（東から）





10  
4面1～4区  
遺構完掘状況  
(南東から)



11  
4面1区  
土抗4-001、ピット4-015  
(南から)



12  
4面1・2区  
土抗4-001・002・003  
(南東から)

13  
4面2区  
土抗 4-004  
(南から)

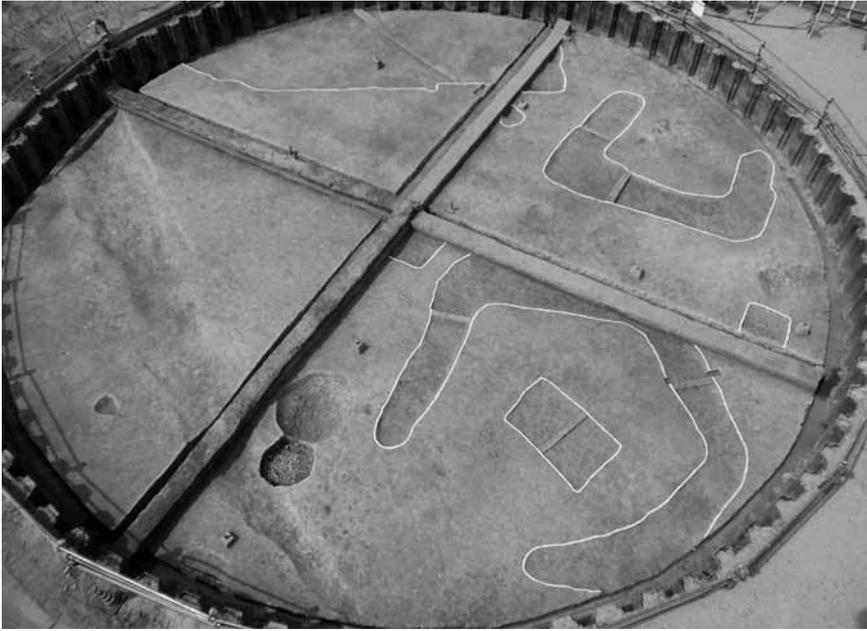


14  
4面2区  
土抗 4-005、ピット 4-015  
(南から)



15  
4面2区  
土抗 4-005 と地震痕跡  
(北西から)





16  
3面1～4区 (全景)  
遺構完掘状況  
(南東から)



17  
3面1区  
溝3-001  
(南から)



18  
3面1・2区  
溝3-004、土坑3-002・003・005  
(南から)

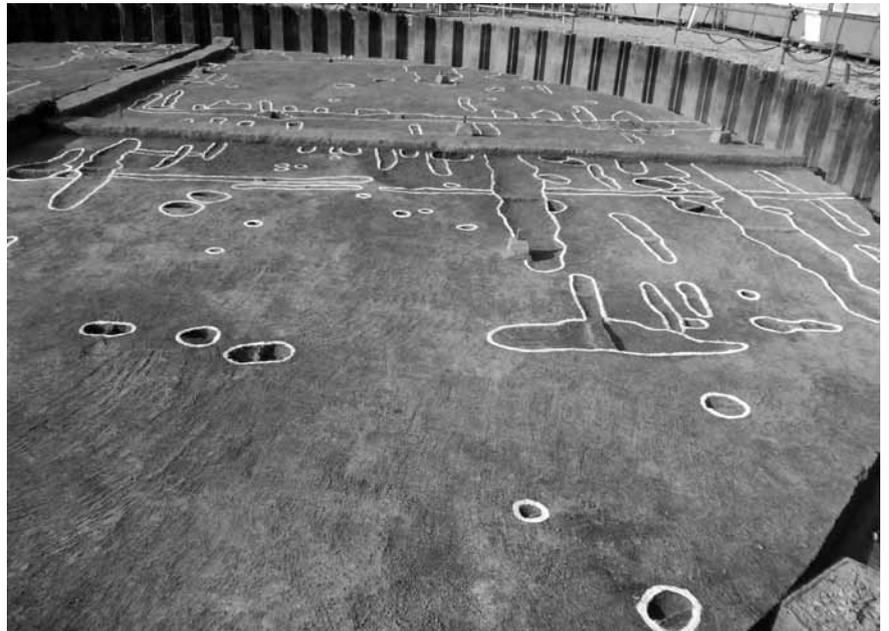
19  
2面1～4区  
遺構検出状況  
(南から)

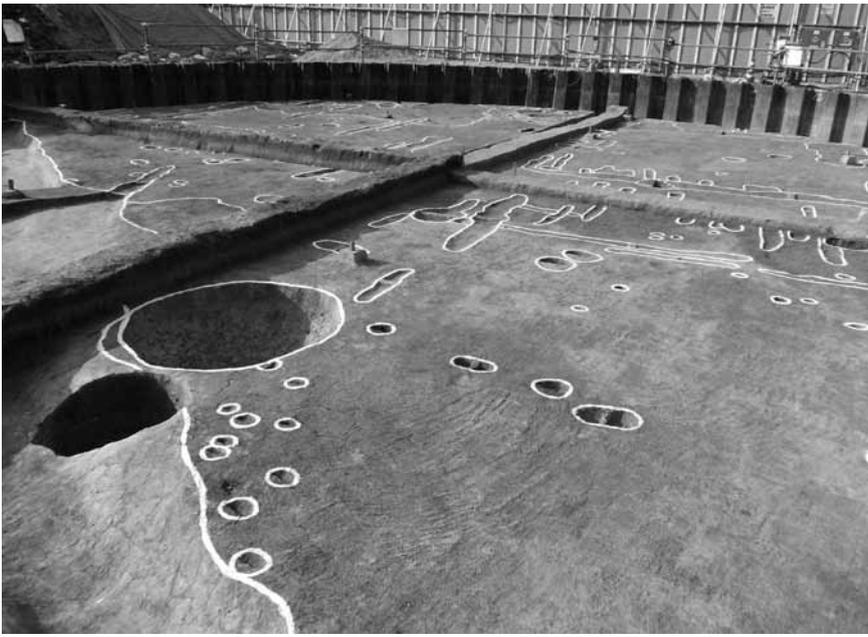


20  
2面1～4区  
遺構完掘状況  
(南から)

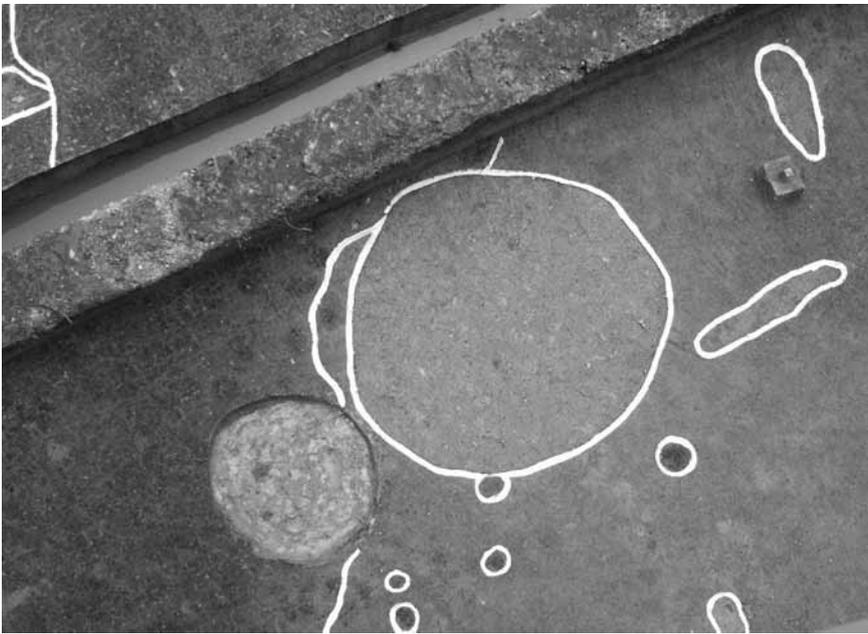


21  
2面1・2区  
中世遺構群 (溝、ピット、土坑)  
(南から)

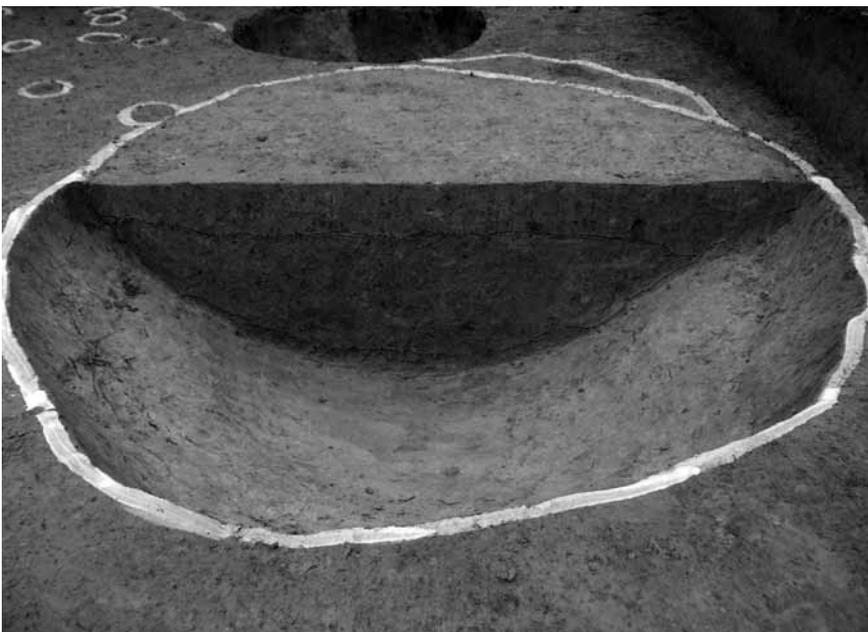




22  
2面1・2区  
中世遺構群 (溝、ピット、土坑)  
(南東から)



23  
2面1・2区  
土坑 2-100、101 検出状況  
(南東から)



24  
2面2区  
土坑 2-100 土層断面  
(北から)

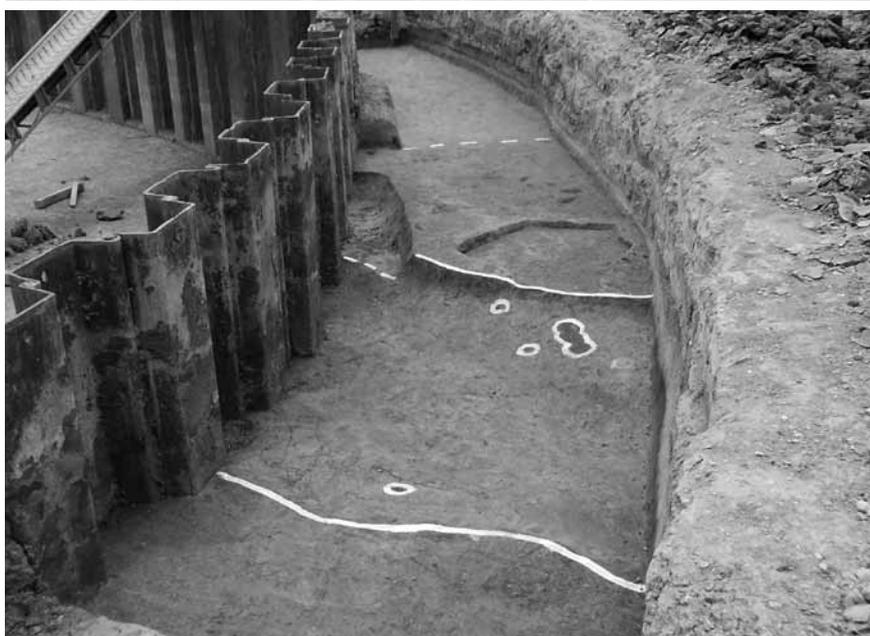
25  
2面2・4区  
溝2-001  
(南東から)



26  
2面2・4区  
溝2-001 底部検出状況  
(土坑2-212・213・216・217)  
(南東から)



27  
2面6区  
溝2-001、整地2-218  
(南東から)





28  
2面6区  
整地 2-219 (中央)  
(北から)



29  
2面3区  
長原 220号墳  
(溝 2-002、墳丘 2-220)  
(東から)



30  
2面3区  
長原 220号墳  
(墳丘 2-220)  
(東から)

31  
2面6区  
長原220号墳  
(溝2-002、墳丘2-220)  
(南西から)  
(右側1～4区6面掘下げ中)



32  
2面3区  
長原220号墳  
(溝2-002、墳丘2-220)  
(西から)



33  
2面3区  
長原220号墳  
(溝2-002、墳丘2-220)  
(南から)

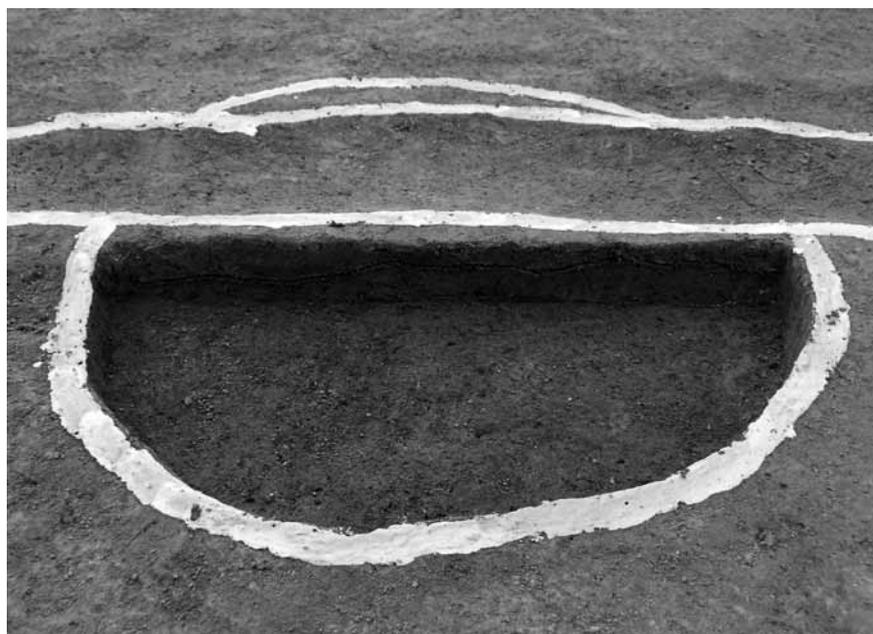




34  
1面1～4区  
遺構完掘状況  
(南東から)  
※溝 1-009 は未完掘



35  
1面2区  
土坑 1-001  
(北から)



36  
1面2区  
土坑 1-011、溝 1-005  
(東から)

37

1面1・2区

溝 1-009、小溝群検出状況

(南から)

※写真左端の溝 1-009 は未完掘



38

1面5区（東側）

溝 1-022 検出状況

※5区は、1面より下層は工事で破壊されないので、1面の遺構を検出して終了。



39

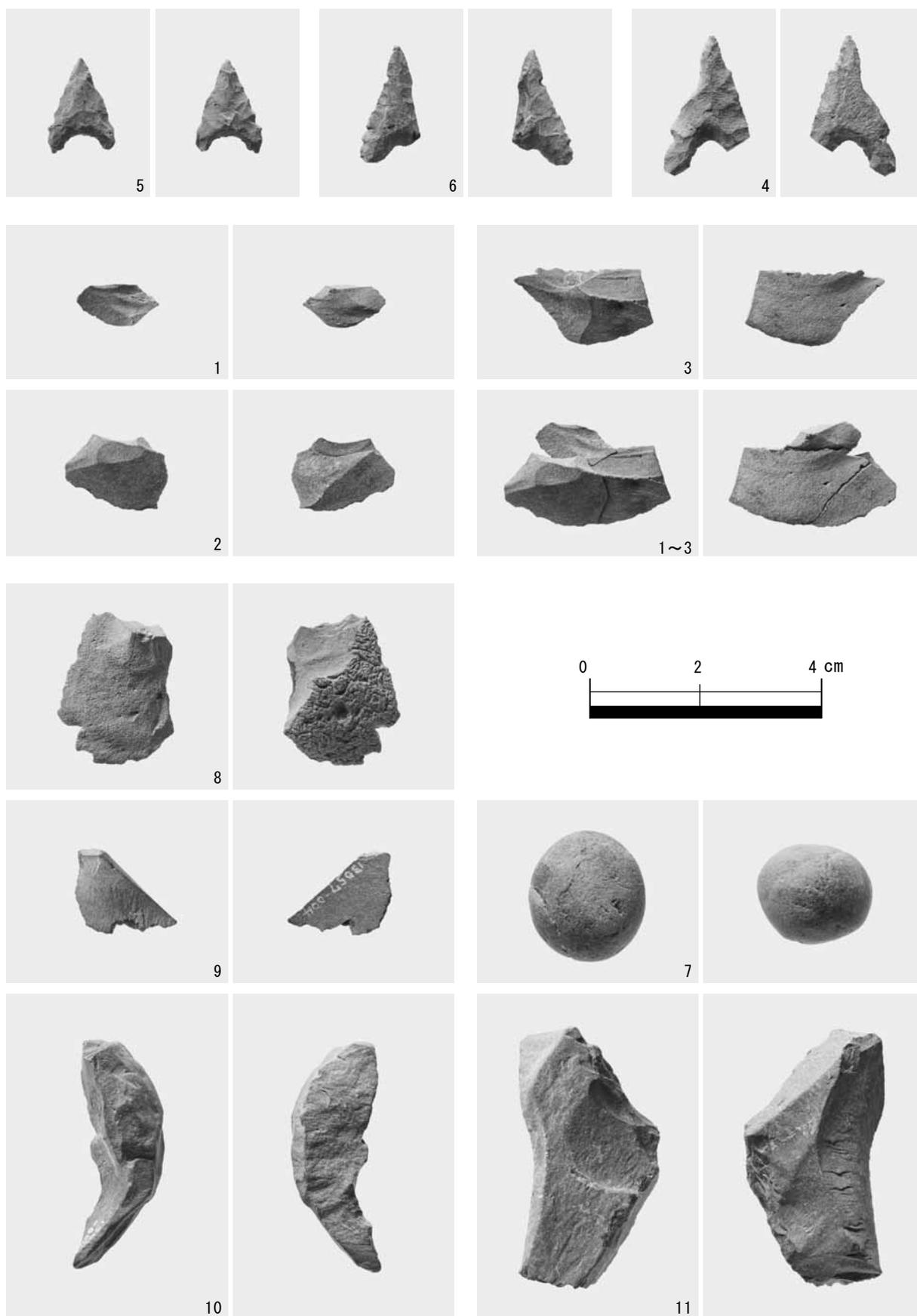
1面6区（北東部を除く）

小溝群（溝 1-017、018、030、

031）検出状況

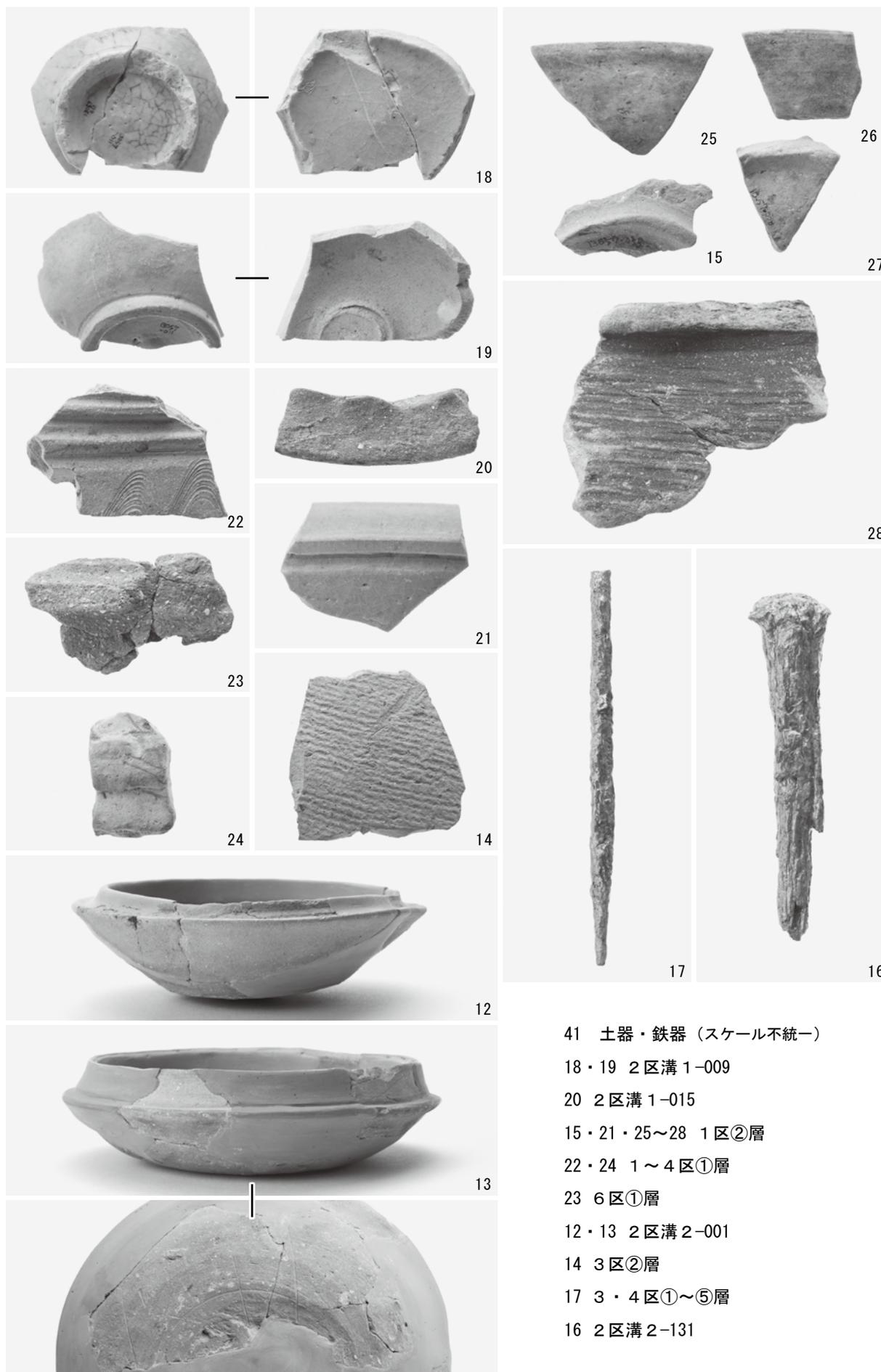
（南西から）





40 石器・石核・サヌカイト剥片

2・4～7 3面出土(図20)、1・3・8・10・12 2面出土(図27) 9・11 1面出土



41 土器・鉄器（スケール不統一）

18・19 2区溝1-009

20 2区溝1-015

15・21・25~28 1区②層

22・24 1~4区①層

23 6区①層

12・13 2区溝2-001

14 3区②層

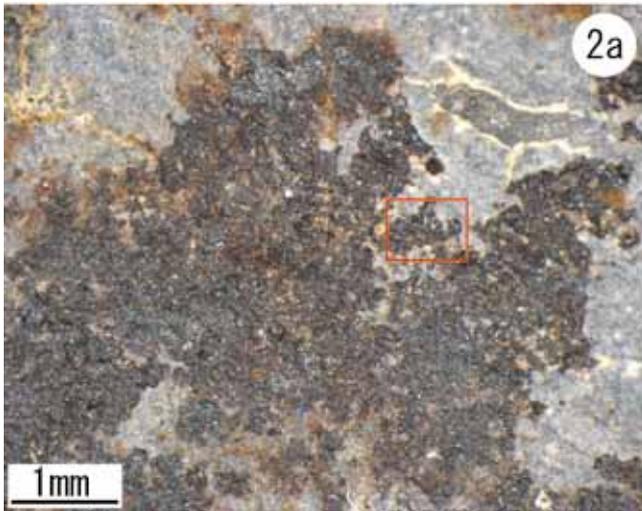
17 3・4区①~⑤層

16 2区溝2-131

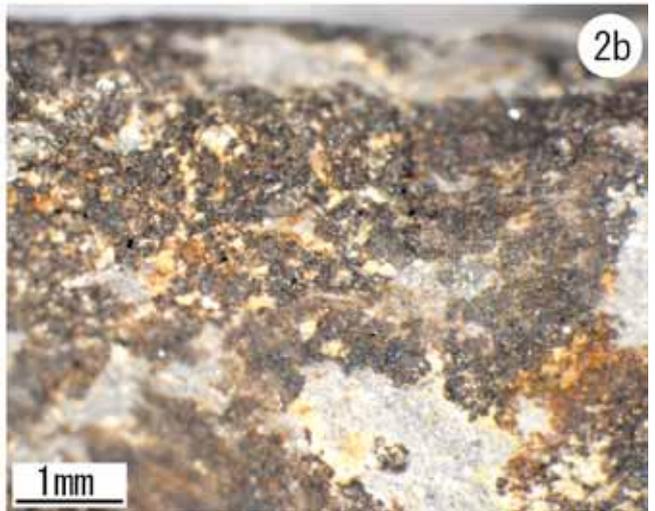


29

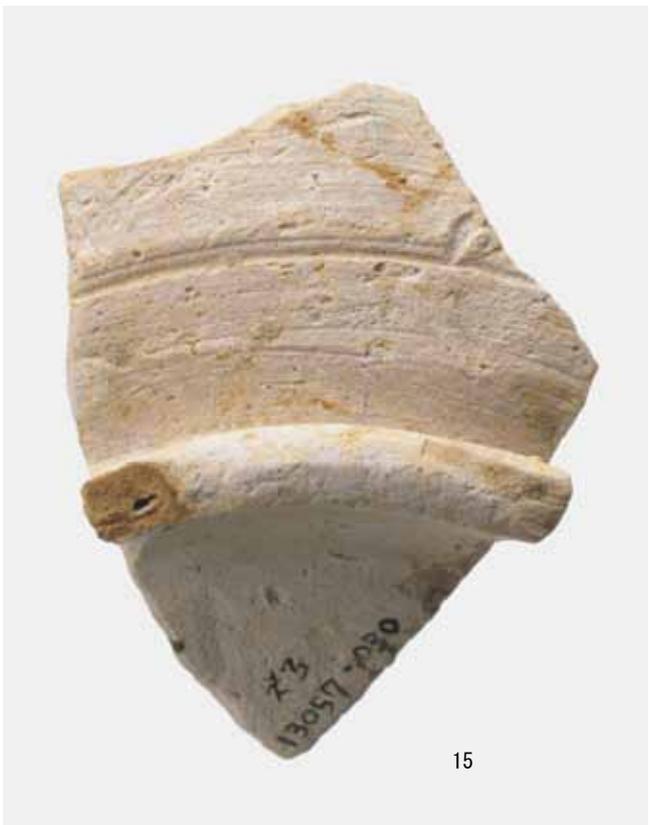
10mm



2a



2b



## 報告書抄録

ふりがな	ながはらいせき							
書名	長原遺跡							
副書名	大阪広域水道企業団東部水道事業所長吉立坑築造工事に伴う発掘調査							
巻次	—							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2015-2							
編集著者名	松岡良憲							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351(代表)							
発行年月日	平成28年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはら 長原 いせき 遺跡	おおさかか おおさかし ひらのく 大阪府大阪市平野区 ながよしかわなべ ちようめ ちない 長吉川辺3丁目地内	27126	101	34° 35′ 46″	135° 34′ 39″	平成26年 1月 5日 ～ 平成26年 6月 30日	1～4区 350m <sup>2</sup> 5区 20m <sup>2</sup> 6区 50m <sup>2</sup> 総計 420m <sup>2</sup>	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長原遺跡	集落跡・古墳	縄文～弥生時代 古墳時代 飛鳥～奈良時代	水路・土坑 小型方墳 水路	打製石鏃・石製投弾 埴輪片・鉄釘・鉄鏃 土師質土器・瓦器		縄文時代から弥生時代にかけて溝や土坑を検出。古墳時代の小型方墳跡を検出。飛鳥時代の古川辺川からの用水路を検出。		
要約	長原遺跡で平成25年度時点で219基の埋没古墳が発見されており、今回発見の古墳は、分布の南東端地域での発見であり、分布範囲を考える上で重要。棺釘、鉄族、埴輪片等が、飛鳥時代から中世の遺物と共に出土しており、一部で飛鳥時代に古墳の破壊が始まった可能性がある。							

大阪府埋蔵文化財調査報告2015-2

## 長原遺跡

—大阪広域水道企業団東部水道事業所  
長吉立坑築造工事に伴う発掘調査—

---

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目  
TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成27年11月30日

印刷 株式会社 近畿印刷センター  
〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号